県道太田上町志度線道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

六条下所遺跡

2021.2

香川県教育委員会

序　文

本書には、県道太田上町志度線道改築事業に伴い平成 27 年度に発掘調査を実施した、香川県高松市六条町に所在する六条下所遺跡（ろくじょうげしょいせき）の報告を収録しています。

六条下所遺跡の発掘調査では、弥生時代前期の水路とみられる溝群と近世の掘立柱建物群が見つかりました。弥生時代前期の溝群は隣接する遺跡から連続するもので、当時の周辺の開発の歴史を知る手がかりを得られました。また、近世の掘立柱建物群が見つかったことから、西に隣接する空港跡地遺跡の成果と併せて、農村地域の集落が広がることがわかりました。

この成果が本県の歴史研究の資料として今後広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、県土木部道路課並びに関係各機関・地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも埋蔵文化財保護行政並びに当センターへのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2021 年 2 月

香川県埋蔵文化財センター

所長　西岡　達哉

例言

1　本書は、県道太田上町志度線道路改築事業に伴い平成 27 年度に実施した、六条下所遺跡（香川県高松市六条町）の発掘調査の本報告である。

2　発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査期間と担当者は次のとおりである。
期間　2015 年 11 月 1 日～ 2016 年 3 月 31 日
担当　森下英治・小野秀幸

4　発掘調査及び整理作業においては、次の方々、機関の協力を得た。
香川将慶、香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合

5　報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。乗松真也が執筆、編集を担当した。

6　本書で用いる座標系は世界測地系 (国土座標第Ⅳ系) で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7　遺構は、次の略号により表示した
SA：柵　SB：建物　SD・SR：溝　SK：土坑　SP：柱穴　SX：落ち込み状遺構

8　遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線 (m) である、

9　遺構断面図中の注記の一部については、色調に小山正忠･竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。

10　土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。同表中の残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11　石器実測図中の石材は表記がない限りサヌカイトである。

12　遺物の時期は以下の文献に拠った。
弥生時代前期
森下英治 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 29 冊　龍川五条遺跡Ⅱ　飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか ,pp.284-325

中世

佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における土器編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 4 冊　空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会ほか ,pp.405-468

佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業 (1)　9 世紀後葉～ 11 世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 26 年度』,pp.41-72

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘作業と整理作業の経過……1

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の方法と成果
　第１節　調査の方法……7
　第２節　層位……7
　第３節　弥生時代以前の遺構と遺物……21
　第４節　中世の遺構と遺物……25
　第５節　近世以降の遺構と遺物……27
　第６節　その他の遺物……34

第４章　自然科学分析
　第１節　六条下所遺跡の花粉分析……35
　第２節　六条下所遺跡から出土した大型植物遺体……39
　第３節　六条下所遺跡のテフラ分析……41

第５章　総括……46

挿図目次

第１図　調査地位置図……1
第２図　周辺遺跡位置図……4
第３図　高松平野遺跡位置図……5
第４図　調査区割図……7
第５図　１区 南壁断面図　……8
第６図　１区 北壁・２区 SD2001・SD2002 南側東端断面図……9
第７図　２区 北壁断面図……10
第８図　３区 北壁・南壁断面図……11
第９図　３区 西壁・東壁 SX3003・南壁断面図　……12
第 10 図　遺構配置図（1 区下位遺構）……13
第 11 図　遺構配置図（1 区上位遺構）……14
第 12 図　１区遺構配置図（下位遺構）……15
第 13 図　１区遺構配置図（上位遺構）……16
第 14 図　２区遺構配置図……17
第 15 図　３区遺構配置図……18
第 16 図　SR1001 断面図１……19
第 17 図　SR1001 断面図２……20
第 18 図　SD1012・SD1013・SD1014・SD2003 断面図…21
第 19 図　SR・SD 出土遺物実測図……22
第 20 図　SD2001・SD2002・SD3002・D3007 断面図・SD2001 出土遺物実測図……23
第 21 図　地割れ状遺構平面図……24
第 22 図　１区 地割れ状遺構断面図・SX3002 平・断面図…25
第 23 図　SD3001・SD3003 ～ SD3007・SD3009 断面図…26
第 24 図　SD3001・SD3003・SD3004 出土遺物実測図 …27
第 25 図　SB1001・SA1001 平面図……28
第 26 図　SB1001・SA1001 断面図……29
第 27 図　SB1003 平・断面図・SD1003・SD1004・SD1005・SD1007・SD1009 断面図 ……30
第 28 図　SK1001・SK1002・SK1004・SK1006・SK2001・SK2002・SK2003 平・断面図・SK3004 出土遺物実測図 ……31
第 29 図　SP 平・断面図……32
第 30 図　SX3001 平・断面図・SX3003・遺構外出土遺物実測図……33
第 31 図　六条下所遺跡における花粉分布図……37
第 32 図　下層確認トレンチのテフラ分析試料の採取位置……41
第 33 図　テフラ分析試料の採取層準の柱状図……42
第 34 図　テフラ試料の含水率・含砂率・鉱物組成の分布図……43
第 35 図　火山ガラスの屈折率測定結果……43
第 36 図　時期別遺構配置図（弥生時代前期以前～弥生時代前期後半)……47
第 37 図　弥生時代前期の自然流路と溝……48
第 38 図　時期別遺構配置図（中世～近世)……49

写真目次

写真１　分析試料の断面画像……35
写真２　産出した花粉化石……38
写真３　六条下所遺跡から出土した大型植物遺体……39
写真４　火山灰分析試料の断面写真……41
写真５　テフラ試料中の粒子の顕微鏡写真……45
写真６　１区遺構検出状況（西から）……53
写真７　１区全景（北東から）……53
写真８　１区全景（東から）……53
写真９　１区 SB1001（南から）……54
写真 10　１区 SB1001-SP1064 断面（東から）……54
写真 11　１区 SB1001-SP1065 断面（東から）……54
写真 12　１区 SR1001 流路 A-D 検出状況（北西から）……55
写真 13　１区 SD1012 断面（南から）……55
写真 14　１区 SD1013 断面（南から）……55
写真 15　１区 SD1013 弥生土器出土状況（南から）……56
写真 16　１区 SD1014（南から）……56
写真 17　１区調査状況（東から）……56
写真 18　１区 SR1001 流路 A･D 調査状況（南から）……57
写真 19　１区 SR1001 石鏃出土状況……57
写真 20　１区 SR1001 断面（南東から）……57
写真 21　１区 SR1001 断面（南東から）……58
写真 22　１区 SR1001 流路 A･B（南から）……58
写真 23　１区 SR1001 流路 A･D（北から）……58
写真 24　１区地割れ状遺構検出状況（東から）……59
写真 25　１区地割れ状遺構（東から）……59
写真 26　１区 SR1001 下層断面（東から）……59
写真 27　１区基盤層剥片出土状況（南から）……60
写真 28　２区全景（南から）……60
写真 29　２区北壁断面（南東から）……60
写真 30　２区 SK2002･SK2003 断面（南から）……61
写真 31　２区 SD2001・SD2002（南から)……61
写真 32　２区 SD2001・SD2002 断面（北から）……61
写真 33　３区全景（南から）……62
写真 34　３区 SD3004 断面（南から）……62
写真 35　３区 SD3004 土師質土器出土状況（南西から）……62
写真 36　３区 SD3007 断面（北から）……63
写真 37　３区 SD3009 断面（南から）……63
写真 38　発掘体験……63
写真 39　六条下所遺跡出土遺物 1……64
写真 40　六条下所遺跡出土遺物 2……65

表目次

第１表　平成 27 年度発掘調査体制一覧　……2
表２表　令和元年度整理作業体制一覧……2
第３表　分析試料一覧……35
第４表　産出花粉胞子一覧表……36
第５表　大型植物遺体……39
第６表　テフラ分析試料の詳細……41
第７表　テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果……42
第８表　篩残渣中の鉱物組成……43
第９表　六条下所遺跡出土土器観察表……51
第 10 表　六条下所遺跡出土石器観察表……52

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課では、県道太田上町志度線道路改築に伴い、平成 26 年度（2014 年）に香川県高松市六条町で試掘調査を実施した。その結果、対象地の一部（1,934㎡）で遺構、遺物を確認したため、この範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地「六条下所遺跡」に含め、適切な保護を図ることとした（香川県教育委員会編 2016）。その後、県道予定地内の六条下所遺跡については、香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課と香川県高松土木事務所との間で協議が進められ、平成 27 年度（2015 ～ 2016 年）に香川県埋蔵文化財センターが本発掘調査を実施した。

第２節　発掘作業と整理作業の経過

発掘作業は直営方式で実施した。調査面積は 1,934㎡、調査期間は 2015 年 11 月 1 日～ 2016 年 3 月 31 日である（第１表）。また、2015 年 11 月 27 日には発掘体験講座「発掘してみよう」を開催した。発

第１図　調査地位置図

掘体験講座の参加者は小・中学生 11 名である。

整理作業は 2019 年 4・5 月、2020 年 1 ～ 3 月に実施した。花粉分析と火山灰分析については株式会社パレオ・ラボに委託した。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

第１表　平成 27 年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田　宏	総括	所長	真鍋　昌宏
	副課長	小柳　和代		次長	前田　和也
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐	愛染伊知朗	総務課	課長（兼）	前田　和也
	副主幹	松下由美子		主任	寺岡　仁美
	主事	和木　麻佳		主任	高木　秀哉
文化財グループ	課長補佐	片桐　孝浩		主任	中川　美江
	主任文化財専門員	山下　平重		主任	丸尾麻知子
	文化財専門員	乗松　真也		主任	岩崎　昌平
			調査課	課長	森　格也
				主任文化財専門員	森下　英治
				文化財専門員	小野　秀幸

第２表　令和元年度整理作業体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	原田　智	総括	所長	西岡　達哉
	副課長	片桐　孝浩		次長	石野　高雄
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐	中川　聡朗	総務課	課長（兼）	石野　高雄
	副主幹	長谷川江里		副主幹	斎藤　政好
	主事	辻　おしえ		主任	高橋　範行
文化財グループ	課長補佐（兼）	片桐　孝浩		主任	丸尾麻知子
	主任文化財専門員	松本　和彦		主任	横井　隆史
	文化財専門員	真鍋　貴匡		主任	寺尾　一夫
			資料普及課	課長	古野　徳久
				主任文化財専門員	乗松　真也

参考文献

香川県教育委員会編 2016『埋蔵文化財試掘調査報告ＸＸⅧ　平成 26 年度香川県内遺跡発掘調査』香川県教育委員会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

六条下所遺跡は香川県高松市六条町に所在する。

香川県は四国の北東部の一角を占め、四国島の一部と瀬戸内海上の島嶼部で構成されている。県南端部では讃岐山脈が東西に伸び、山脈の稜線がほぼ徳島県との県境となる。高松市は高松平野を中心とした範囲を市域とし、東西に長い香川県のほぼ中央に位置する。香川県の県庁所在地で、2020 年 1 月時点の面積は約 375㎢、人口は約 419,000 人である。

高松平野は、北は瀬戸内海に面し、南は讃岐山脈によって画され、約 200m 前後の丘陵と 400m 前後の連峰によって東西を挟まれる。平野内には石清尾山や由良山等の独立丘陵が点在する。讃岐山脈から派生する山地や丘陵からは複数の河川が瀬戸内海に向かって流下し、扇状地形の平野を形成する。

高松平野で最大規模の香東川の流路は、現在でこそ石清尾山の西麓にしかみられないが、中世以前には海岸線から約 8km さかのぼった地点で分岐し、石清尾山の東麓にも流れていた。特に、旧流路右岸の広い範囲では、香東川からは派生する支流がいくつも流下していたと考えられ、御坊川等がその痕跡とされる。また、香東川右岸を錯綜するこれらの支流や低地に囲まれた微高地が平野内に網目状に分布していたとみられる。平野東部では、香東川とは源流を異にする古川、春日川、新川が流下する。六条下所遺跡は古川左岸に立地する。中世以前の海岸線は、高松平野東部で大きく湾入するように復元され（古・高松湾）、春日川や新川の河口付近には湿地が広がっていたと思われる。古・高松湾は近世に埋め立てられ、四国島と屋島はこの段階で陸続きとなった。

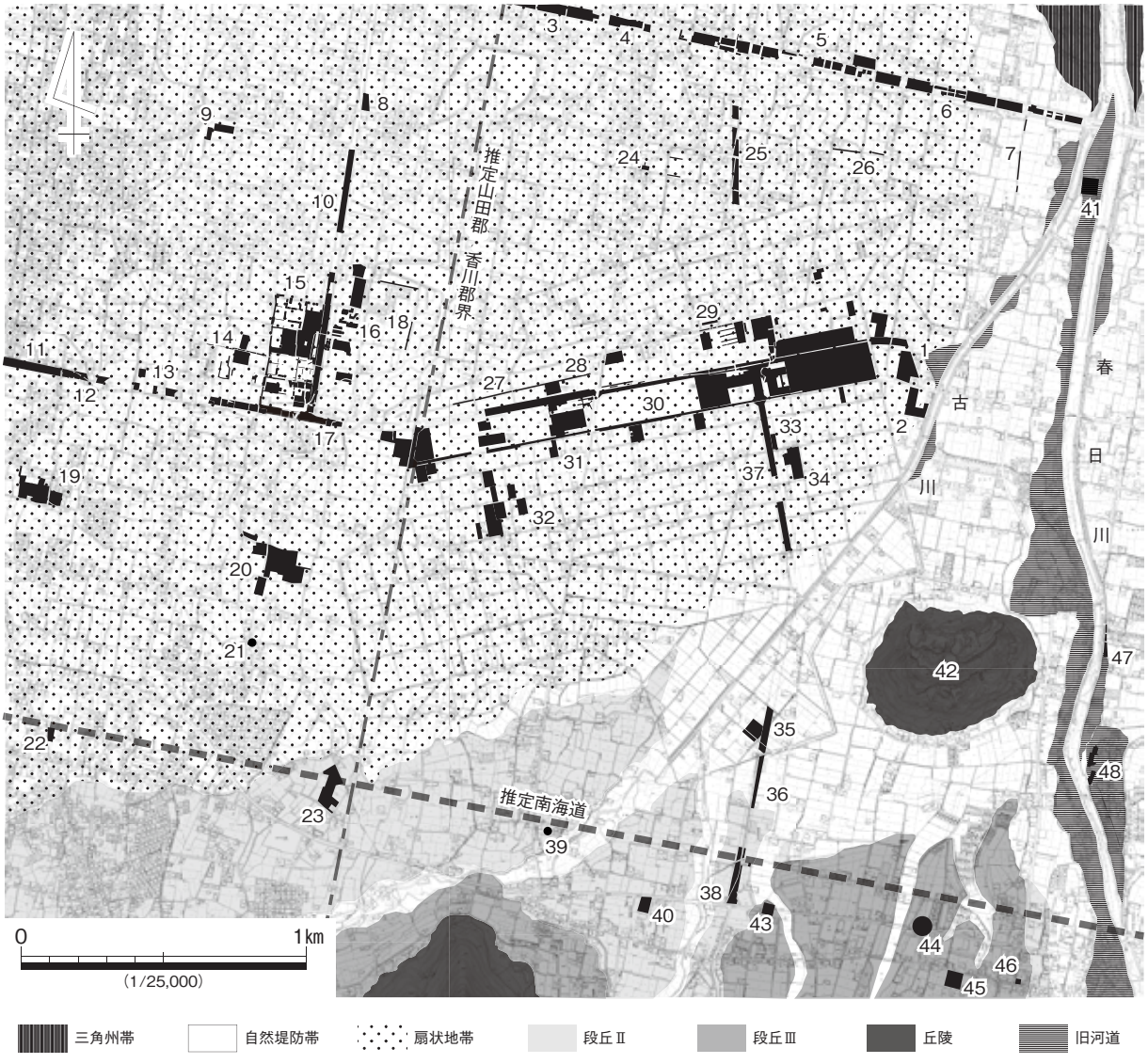
第２節　歴史的環境

旧石器時代では、南方の日山から伸びる段丘上の横内東遺跡で五色台産サヌカイト製とみられるナイフ形石器が出土している。縄文時代晩期後半の遺物は多肥宮尻遺跡の自然河川で確認されている。本遺跡から北方約 1km にある林・坊城遺跡の自然河川では、晩期後半の突帯文土器に一木鋤や打製石斧といった農耕に関わる遺物が伴う。

弥生時代前期には本遺跡から北西約 2.5km の汲仏遺跡で環濠集落が出現する。このほか、高松平野での環濠集落は本津川下流左岸の鬼無藤井遺跡、旧香東川下流域の天満・宮西遺跡でも認められる。汲仏遺跡、天満・宮西遺跡の環濠集落は前期前半に出現し、前期後半まで継続する。鬼無藤井遺跡の環濠集落の時期は前期後半である。高松平野では、弥生時代前期の遺物を伴う遺跡の確認例は増加しているが、環濠集落のような居住痕跡の遺構の分布は不鮮明である。近年調査された香東川中流域右岸の北口遺跡（前期後半）では、平面形円形で窪みをもち、内部に柱穴とみられる遺構が複数確認されている。さぬき市の鴨部・川田遺跡でも類似する遺構が検出されており、こうした遺構が明確な竪穴建物の構造を伴わない居住遺構の可能性がある。なお、北口遺跡は、当該期の掘立柱建物数棟も検出されていることから、高松平野での環濠集落以外の居住域とみなすことができる。明瞭な畦畔を備える水田は、本遺跡から約 2km 北西のさこ・長池遺跡からさこ・長池Ⅱ遺跡にかけて 2 単位確認されている。いずれも

前期後半で、等高線に直交する幹線小畦畔に沿って長方形に近い区画が並ぶ。さらに北方に位置する前期前半とみられる上西原遺跡の水田も同様の区画形状をとっている。一方、南西約 1.5km にある北野遺跡の前期前半の水田の区画形状はやや異なる。この点については北野遺跡の水田が自然河川の屈曲部付近に形成されたためと考えられている。さこ・長池、さこ・長池Ⅱ遺跡の水田は微高地上に形成され、排水先である自然河川に近接する。縄文時代晩期後半の自然河川はこの時期にも活発に活動しているとみられ、高松平野ではこうした自然河川を利用した排水計画のもとに水田が営まれた可能性がある。

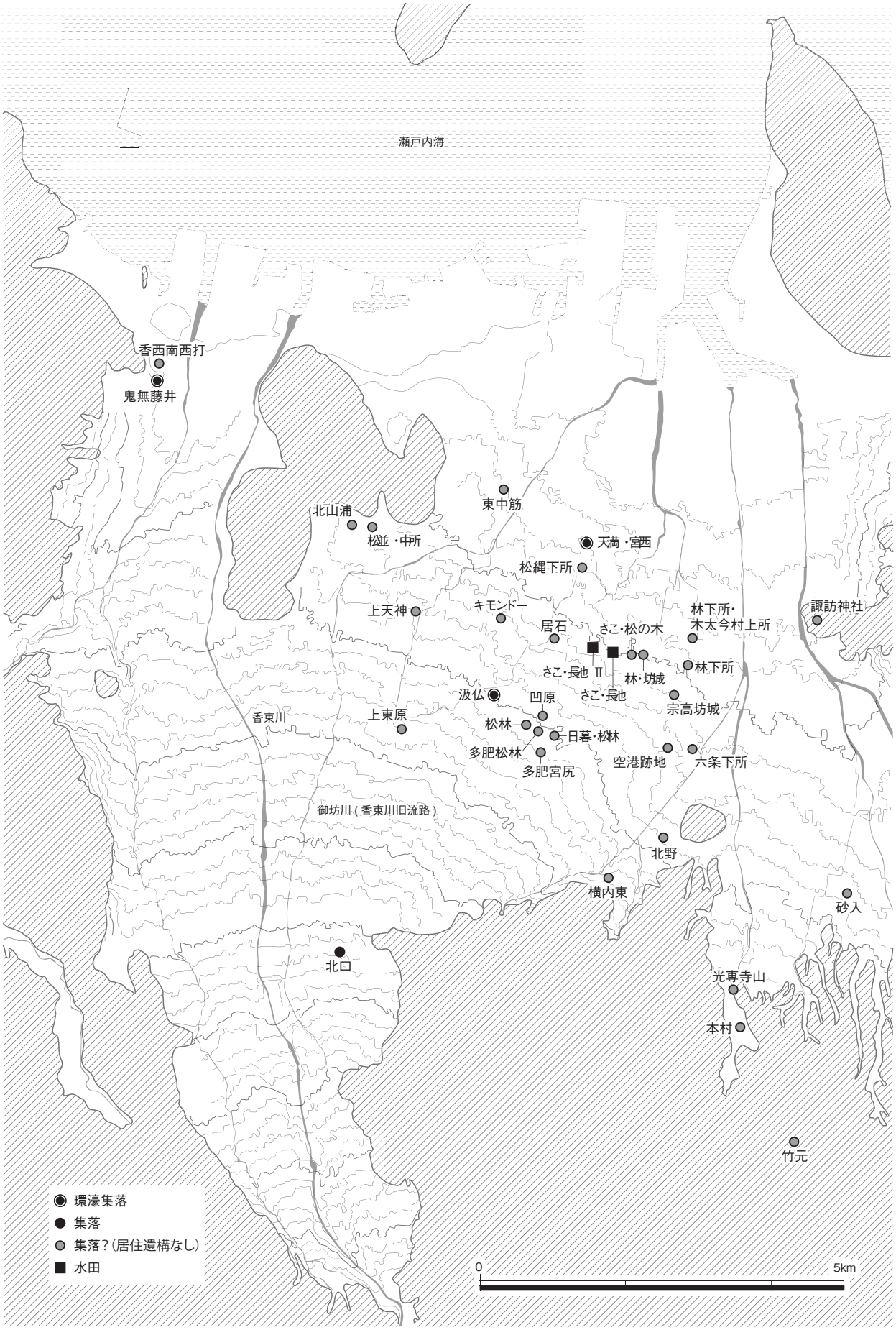
弥生時代中期中葉には平野全体に遺跡が点在する。本遺跡から約 2km 西に位置する多肥松林遺跡では、微高地間の自然河川から出土した未成品を含む多量の木器から、集落内での木器製作が推測されている。また、以前は不明瞭であった中期の墓域の確実な例として本遺跡から西方約 3km に位置する太田原高州遺跡がある。太田原高州遺跡では、中期末の平面形方形の区画墓群が構築され、一部の主体部



1. 六条下所遺跡　2. 六条上青木遺跡　3. さこ・長池遺跡　4. さこ・松ノ木遺跡　5. 林・坊城遺跡　6. 六条・上所遺跡　7. 六条上川西遺跡
8. 多肥下町下所遺跡　9. 汲仏遺跡　10. 凹原遺跡　11. 多肥北原西遺跡　12. 多肥北原遺跡　13. 多肥平塚遺跡　14. 松林遺跡　15. 多肥松林遺跡
16. 日暮・松林遺跡　17. 多肥宮尻遺跡　18. 池の内遺跡　19. 西久保遺跡　20. 野郷遺跡　21. 天満宮古墳　22. 横市遺跡　23. 彦作遺跡　24. 林宗高遺跡
25. 宗高坊城遺跡　26. 六条西村遺跡　27. 宮西・一角遺跡　28. 一角遺跡　29. 公務員宿舎遺跡　30. 空港跡地遺跡　31. 上林本村遺跡　32. 拝師廃寺
33. 中林遺跡　34. 竹部遺跡　35. 北野遺跡　36. 鎌野西遺跡　37. 上林遺跡　38. 三谷中原遺跡　39. 加摩羅神社古墳　40. 横内東遺跡
41. 六条城跡 42. 由良山城跡　43. 鎌野城跡　44. 高野丸山古墳　45. 高野廃寺　46. 川島本町山田遺跡　47. 大瀬遺跡　48. 由良南原遺跡

（高松市都市計画図「太田」・「林」・「仏生山」・「三谷」に一部加筆）

第２図　周辺遺跡位置図



第３図　高松平野遺跡位置図

には副葬品と考えられる玉が伴う。このうち水晶製算盤玉は日本海沿岸の丹後半島産とみられている。

弥生時代後期にはさらに遺跡数が増加する。この時期の高松平野では細粒かつ多量の角閃石を含む胎土と精緻な器形を特徴とする香東川下流域産土器が成立する。香東川下流域産土器製作地の中心は、香東川流域の石清尾山南側一帯とされている。一方、集落とともに粘土採掘坑が検出された空港跡地遺跡では、明橙色～橙白色の胎土で、香東川下流域産土器とは異なる器形の白色系土器の製作が推測されている。このほかにも平野東端丘陵部付近等を推定製作地とする土器等、この時期の高松平野では複数の土器群の存在が明らかとなりつつある。また、林・坊城遺跡では、平面形円形の周溝墓 3 基が近接して築かれている。

古墳時代前期前半には、主体部等は不明ながらも、空港跡地遺跡で前方後円形、前方後方形の周溝墓が確認されている。古墳時代中期初頭の築造とされる三谷石舟古墳は墳丘長約 80m の前方後円墳で、同時期の前方後円墳としては香川県内最大規模である。高松平野西部の鷲ノ山で産出する角閃石安山岩を用いた刳抜式石棺を埋葬施設とする。墳丘直径 40m と推定される円墳の高野丸山古墳は中期の築造と考えられている。空港跡地遺跡では 5 世紀末の竈を伴う竪穴建物が検出されているが、この直後の時期の竈をもつ竪穴建物はわずかである。7 世紀前葉～中葉には、多肥北原遺跡や多肥北原西遺跡等、高松平野中央部で竪穴建物が密集する集落が形成される。これらの竪穴建物は基本的に竈を備えており、当該期を高松平野での竈の普及期とすれば、竈が広く普及するまでには時間を要したことになる。

本遺跡は、古代讃岐国の山田郡 11 郷のうち、林郷に属していたと考えられる。高松平野には N9° ～ 11° E 方向の条里地割が広がり、春日川及び古川左岸の自然堤防帯や扇状地帯にも認められる。三谷中原遺跡では 8 世紀前半以前の条里方向の溝が、空港跡地遺跡でも 8 世紀の条里方向に合致する溝が確認されており、当該地域では条里施工は 8 世紀までには行われたと判断される。官道である南海道の推定路線は、讃岐国内を阿波国境から伊予国境までほぼ東西に横断する。条里地割が展開する平野では歴史地理学の手法により余剰帯が見い出され、この余剰帯が南海道の痕跡と推定された。高松平野では、平野南部を南海道の路線がほぼ直線に復元され、その推定路線が三谷郷北部を通過する。讃岐国内の南海道沿いには 6 の駅家が設置され、このうちのひとつである三谿駅家の位置は、地名から三谷郷内に求められる。南海道推定路線内にある三谷中原遺跡では、L 字状に屈曲する溝が 2 本検出された。2 本の溝の南北軸が揃うにも関わらず、それぞれの溝は北から西へ、南から東へと屈曲する。13m ある東西方向の溝間に南海道の路盤の存在が推定されている。隣接する香川郡では、南海道が起点と考えられる幅員 9m の南北方向の道路と、それに直交する幅員 6m の東西方向の道路が検出されている（多肥北原西遺跡、太田原高州遺跡）。東西道路は延長約 1km に達し、多肥廃寺の近傍を通過する。

本遺跡の西にある空港跡地遺跡（I 地区）では近世の掘立柱建物群が確認されている。建物は数か所に集中して分布することから、田畑の中に点在する居住域といった景観を復元し得る。

本遺跡の所在地は、近世～近代初頭の六条村の範囲に含まれる。六条村は、町村制施行後の 1890 年（明治 23）に隣接する林村に含まれ、1956 年（昭和 31）には高松市六条町となった（註 1）。

註

1　歴史的環境は、乗松（2020）を一部修正したものである。

参考文献

乗松真也 2020「遺跡の位置と環境」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊　北野遺跡　鎌野西遺跡』香川県埋蔵文化財センター ,pp.4-7

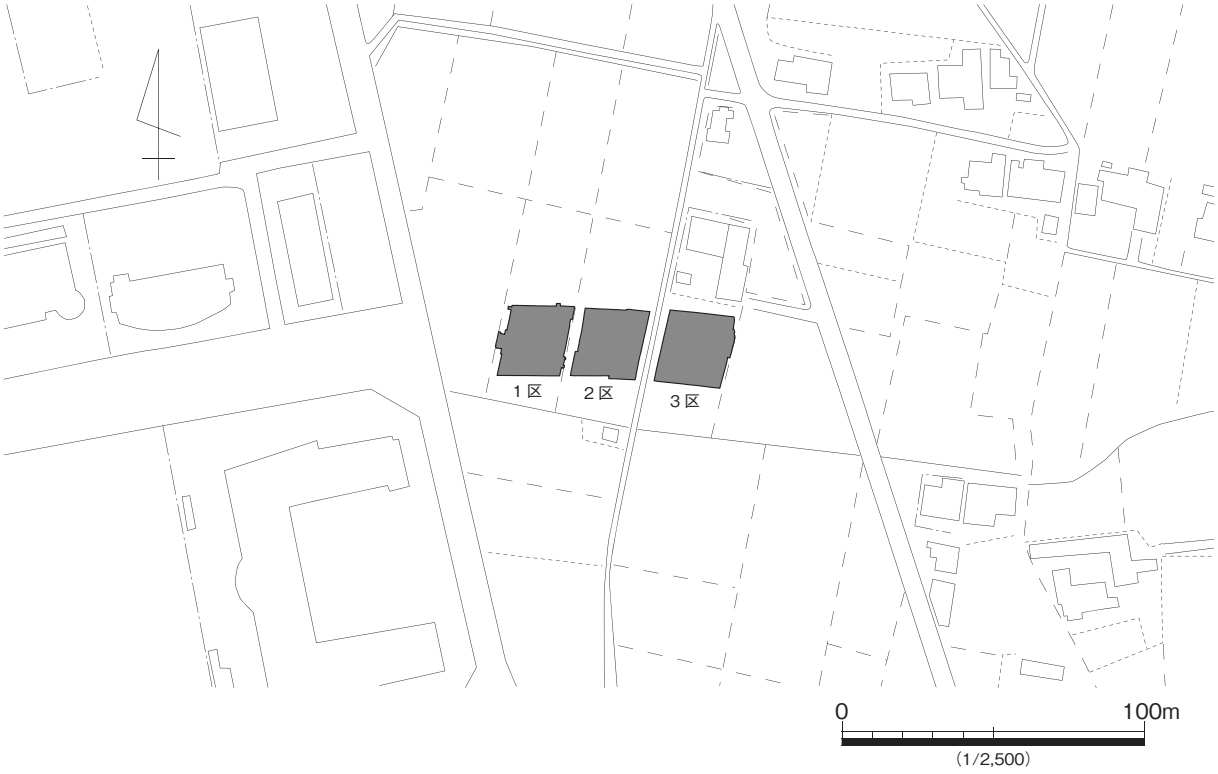
第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

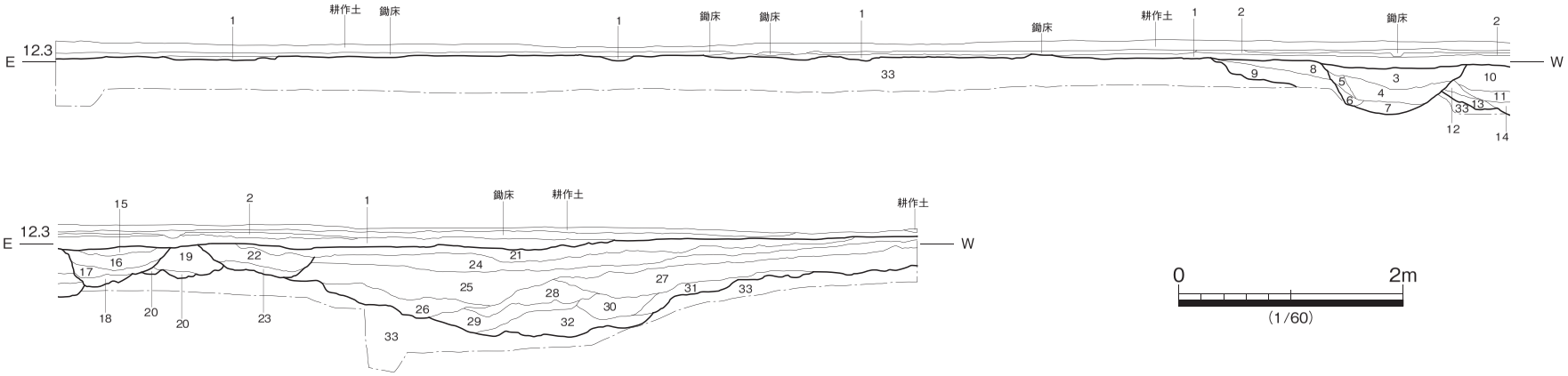
東西に長い調査対象地内を横断する道路や水路等の土地区画に応じて調査区を設定した。調査区は西から順に、１～３区とした。

第２節　層位

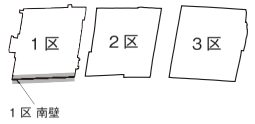
１～３区とも耕作土、鋤床とそれに近い層の下位に明黄褐色粘土層が堆積する。基本的には明黄褐色粘土層上面を遺構検出面とし、遺構検出面は１～３区かけてやや標高を下げる。１区西端から３区東端までの約 75m での東西端における標高差は約 20cm である。現地表面の標高も、調査対象地の東方約 200m を流下する古川に向かって少しずつ下がっており、この点は旧地形が反映されているものと考えられる。明黄褐色粘土層は、縄文時代の複数の流路（第 16 図流路Ⅰ～Ⅴ）で構成される。



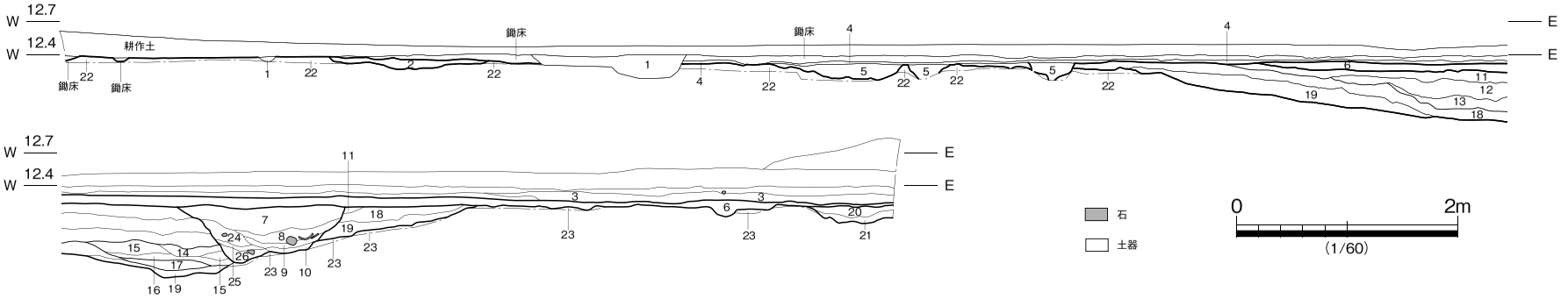
第４図　調査区割図



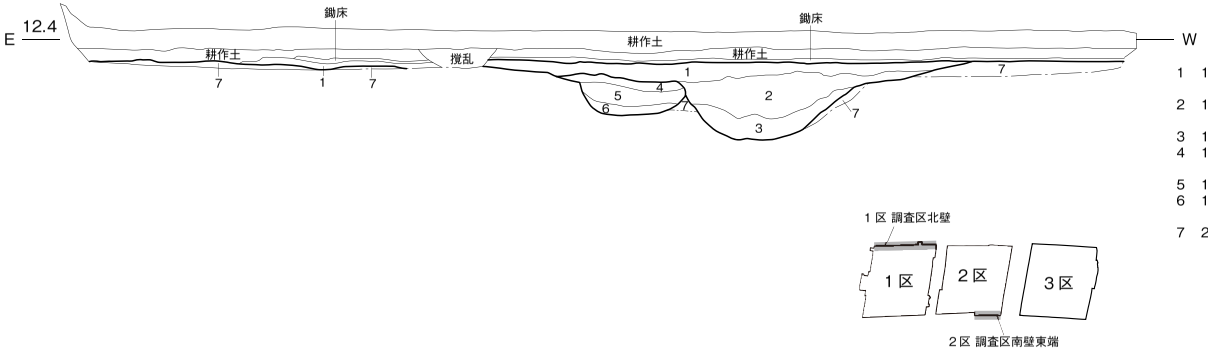
1　10YR4/2 灰黄褐色極細砂混じり粘質シルト
2　10YR4/4 褐色粘質シルト
3　10YR2/1 黒色粘土　【SD1013】
　10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルトがブロックで少量混じる
4　10YR2/1 黒色粘土　【SD1013】
　粘性が強い
5　10YR2/2 黒褐色粘土　【SD1013】
6　10YR4/2 灰黄褐色粘土　【SD1013】
　10YR2/2 黒褐色粘土が混じる
7　10YR3/2 黒褐色シルト混じり中砂　【SD1013】
　10YR6/8 明黄褐色粘土（基盤層）ブロックを含む
8　10YR4/1 褐灰色粘質シルト　【SR1001】
9　10YR5/2 灰黄褐色シルト　【SR1001】
　10YR6/8 明黄褐色粘土（基盤層）が粒上に多量に混じる
10　10YR2/3 黒褐色粘土　【SD1014】
　10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを含む
11　7.5YR2/2 黒褐色粘土　【SD1014】
12　10YR2/2 黒褐色粘土　【SD1014】
13　10YR4/2 灰黄褐色粘土　【SD1014】
　10YR2/2 黒褐色粘土が混じる
14　10YR3/2 黒褐色シルト混じり中砂　【SD1014】
　10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロックを少量含む
15　10YR3/2 黒褐色シルト　【SD1012】
16　10YR2/2 黒褐色粘土　【SD1012】
17　10YR3/2 黒褐色細砂　【SD1012】
　10YR2/1 黒色粘土粒上に極細砂含む
18　10YR3/2 黒褐色粗砂混じり細砂　【SD1012】
19　10YR3/2 黒褐色粘土　【SR1001】
20　10YR3/2 黒褐色シルトと10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる　【SR1001】
21　10YR2/1 黒色粘土　【SR1001】
22　10YR2/2 黒褐色粘土　【SD1015】
　7.5YR4/6 褐色シルトの Mn 粒を少量含む
23　10YR3/2 黒褐色粘土　【SD1015】
　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトが少量混じる
24　10YR2/1 黒色粘土　【SR1001】
　10YR3/2 黒褐色粘質シルトを多量に含む
25　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト　【SR1001】
　7.5YR4/6 褐色シルトの Mn 粒を多量に含む
26　10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト　【SR1001】
　10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質シルトが帯状に（一部粒状でまだらに）混じる
27　10YR3/2 黒褐色粘質シルト　【SR1001】
　10YR4/6 褐色シルトブロックを中量含む
28　10YR4/2 灰黄褐色シルト　【SR1001】
　10YR3/2 黒褐色シルトを極少量含む
29　10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルトと10YR3/2 黒褐色シルトが混じる　【SR1001】
30　10YR3/1 黒褐色粘土　【SR1001】
　2.5Y5/3 黄褐色粘土を粒状で極小量含む
31　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト　【SR1001】
　10YR6/8 明黄褐色粘土（基盤層）ブロックを含む
32　10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂　【SR1001】
　10YR5/8 黄褐色中砂ブロック少量含む
33　10YR6/8 明黄褐色粘土　【基盤層】



第５図　１区 南壁断面図

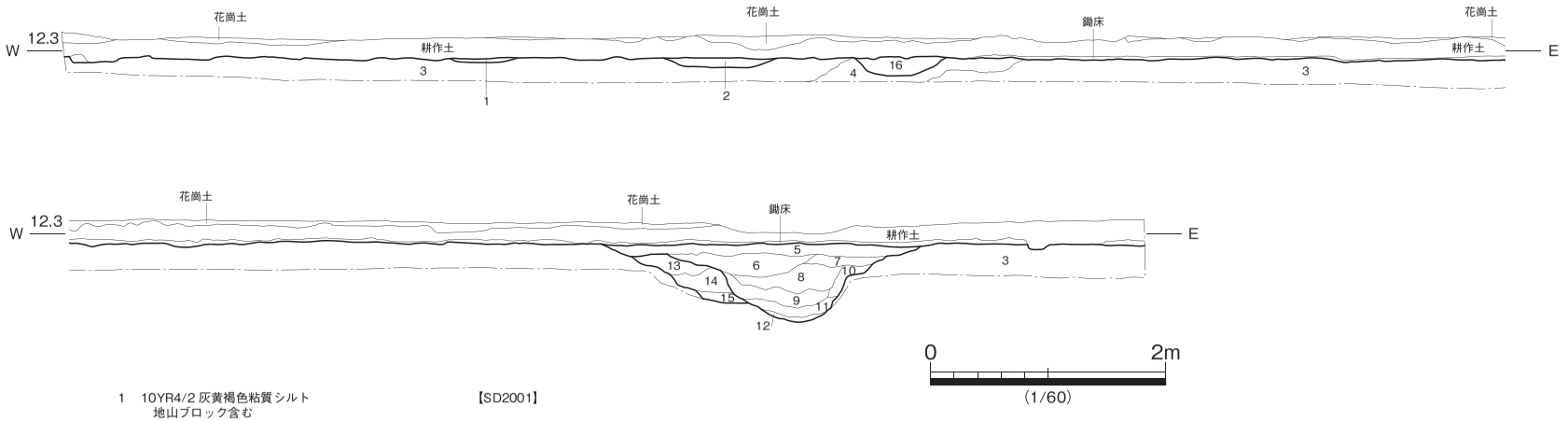


1　2.5Y6/2 灰黄色土 +2.5Y4/1 黄灰色土 +10YR6/8 明黄褐色土　【撹乱】
2　10YR5/1 褐灰色砂混じりシルト　【SD1016】
　φ5㎜までの 10YR3/2 黒褐色粒と 10YR6/8 明黄褐色土を含む
3　10YR7/1 灰白色砂混じりシルト
　わずかに 1 層を 3㎝までのブロックで含む
4　10YR6/1 褐灰色砂混じり粘質シルト
　わずかに 10YR2/2 黒褐色と 10YR6/8 明黄褐色が粒状に混じる
5　10YR3/1 黒褐色粘質シルト　【地割れ状遺構】
6　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SR1001】
　10YR3/3 暗褐色シルトの Mn 沈着粒φ2 ～ 5㎜多く含む
7　10YR2/3 黒褐色極細砂混じり粘土　【SD1013】
8　10YR2/2 黒褐色細砂～シルト混じり粘土　【SD1013】
9　【SD1013】
10　7.5YR3/2 黒褐色と 7.5YR3/1 黒褐色の中間色粘質シルト混じり中砂　【SD1013】
11　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SR1001】
12　10YR2/1 黒色粘土　【SR1001】
13　10YR2/1 黒色粘土　【SR1001】
　10YR3/2 黒褐色粘質シルトを多量に含む
14　【SD1015】
15　10YR3/1 黒褐色粘土と 10YR5/1 褐灰色シルトが混じり合う　【SR1001 流路 A】
　7.5YR4/3 褐色土粒を含む
16　10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂　【SR1001 流路 A】
17　10YR5/2 灰黄褐色粗砂　【SR1001 流路 C】
　下位に 10YR5/8 黄褐色シルト混じり粗砂の帯状の堆積
18　10YR3/2 黒褐色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色シルト　【SR1001 流路 D】
19　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂　【SR1001 流路 D】
　10YR4/6 褐色中砂が多量に混じる
20　10YR5/2 灰黄褐色細砂　【SX1001】
　10YR4/2 灰黄褐色粘質土をブロック状に含む
21　10YR4/2 灰黄褐色細砂　【SX1001】
　20 層より砂目が粗く、23 層をブロック状に含む
22　10YR7/8 黄橙色 +10YR6/1 褐灰色砂混じり粘質シルト　【基盤層】
23　2.5Y5/6 黄褐色粘土　【基盤層】
24　7.5YR3/2 黒褐色粘土混じり中砂　【SD1014】
25　【SD1014】
26　【SD1014】



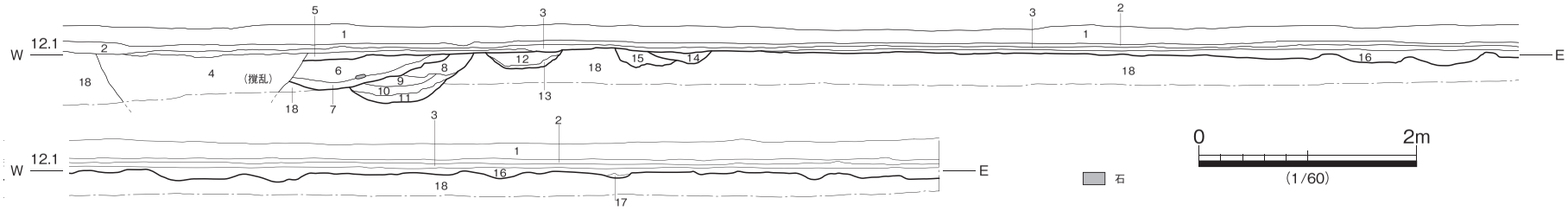
1　10YR4/1 褐灰色シルト混じり粘土　【SD2001】
　10YR5/8 黄褐色土混じる
2　10YR4/1 褐灰色粘質シルト　【SD2001】
　下位ほど褐色味が濃い～ 7.5YR4/2 灰褐色
3　10YR4/2 灰黄褐色シルト　【SD2001】
4　10YR5/1 褐灰色弱粘質シルト　【SD2002】
　10YR5/8 黄褐色土をブロック状に含む
5　10YR5/2 灰黄褐色と 10YR5/8 黄褐色粘質シルト　【SD2002】
6　10YR5/1 褐灰色シルト弱粘質　【SD2002】
　2.5Y2/1 黒色粘土が粒状に少量混じる
7　2.5Y5/6 黄褐色粘質シルト　【基盤層】
　標高 11.8 ～ 12.0m 以下は 2.5Y7/2 灰黄色と 2.5Y7/8 黄色の粘土

第 6 図　1 区 北壁・2 区 SD2001・SD2002 南側東端断面図

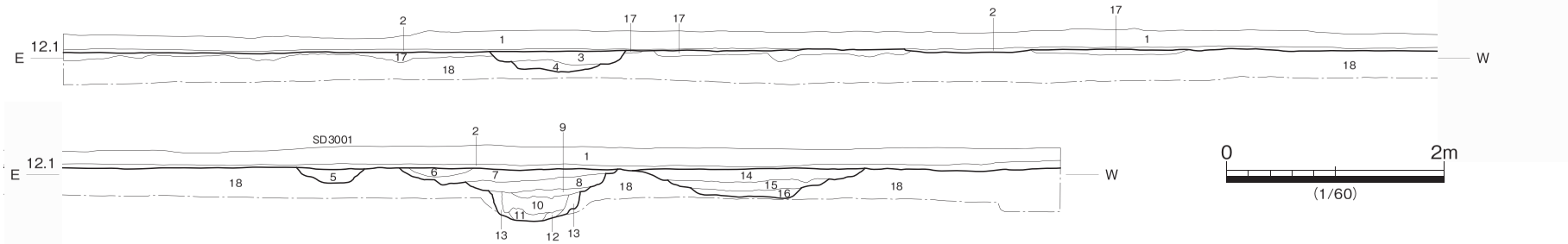


1　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD2001】
　地山ブロック含む
2　10YR5/2 灰黄褐色砂混じり粘質シルト　【SD2004】
　地山ブロック多量に含む、Mn 含む
3　2.5Y5/6 黄褐色粘質シルト　【基盤層】
4　2.5Y5/6 黄褐色粘土混じり中～細砂　【基盤層】
5　10YR4/1 褐灰色シルト混じり粘土　【SD2001】
　10YR5/8 黄褐色土を粒状に含む
6　10YR3/1 黒褐色粘質シルト強粘質　【SD2001】
7　0YR2/1 黒色シルト混じり粘土　【SD2001】
　10YR5/8 黄褐色土混じる
8　10YR4/1 褐灰色粘質シルト　【SD2001】
　7.5YR4/4 褐色土が混じる
9　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　【SD2001】
10　10YR6/1 褐灰色と 7.5YR5/8 明褐色と　【SD2001】
　10YR3/1 黒褐色がブロック状に混じり合うシルト混じり粘土
11　10YR4/2 灰黄褐色シルト　【SD2001】
12　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD2001】
13　10YR3/1 黒褐色粘質シルト　【SD2002】
　7.5YR5/6 明褐色土が混じる
14　10YR5/2 灰黄褐色と 10YR5/8 黄褐色粘質シルト　【SD2002】
15　10YR5/1 褐灰色シルト弱粘質　【SD2002】
　2.5Y2/1 黒色粘土が粒状に少量混じる
16　2.5Y5/3 黄褐色～2.5Y5/6 黄褐色シルト混じり中～細砂　【SD2003】

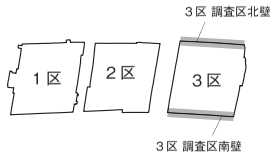
第７図　２区 北壁断面図



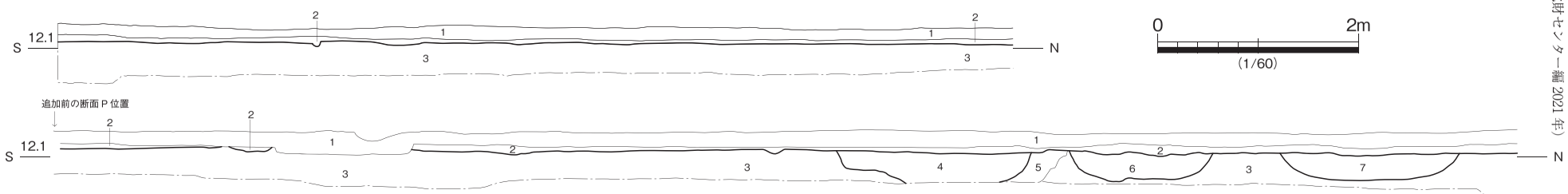
1 【耕作地】
2 【鋤床】
3 明褐色粘質シルトと 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる
4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土に 2.5Y5/3 黄褐色シルトが多量
10YR5/6 黄褐色粘質シルトが中量、10YR3/3 暗褐色粘質シルトが極小量で
粒状にまだらに混じる 【撹乱】
5 明褐色粘質シルト
10YR7/2 にぶい黄橙色シルト、マンガン少量含む
6 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3003】
10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト含む
7 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3003】
8 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3004】
10YR6/6 明黄褐色粘質シルト多く含む
9 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質粘質シルト 【SD3004】
10 10YR4/2 灰黄褐色粘土 【SD3004】
10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック多く含む
11 10YR6/2 灰黄褐色粘質細砂 【SD3003】
12 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3009】
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック多く含む
13 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト一部細砂 【SD3009】
14 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト 【SD3006】
15 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3001】
16 10YR2/2 黒褐色粘土
10YR3/4 暗褐色粘土が粒状に多量に混じる
17 2.5Y3/2 黒褐色粘土
10YR5/8 黄褐色粘質シルトを粒状に含む
18 2.5Y5/6 黄褐色粘土 【基盤層】



1 【耕作土】
2 【鋤床】
3 10YR3/2 黒褐色粘土 【SD3002】
10YR4/4 褐色粘土ブロック多く含む
4 10YR3/3 暗褐色粘土 【SD3002】
10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロック少量含む
5 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3001】
6 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂質粘質シルト 【SD3004】
10YR4/4 褐色粘土小ブロック多く含む
10YR5/6 黄褐色粘土小ブロック多く含む
7 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3004】
10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック少量含む
8 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3004】
10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック多く含む
9 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質粘質シルト 【SD3004】
10 10YR4/2 灰黄褐色粘土 【SD3004】
10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック多く含む
11 10YR6/2 灰黄褐色粘質細砂 【SD3004】
12 10YR5/2 灰黄褐色細砂混じり粘質シルト 【SD3004】
13 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 【SD3004】
10YR4/6 褐色粘土ブロック多く含む
14 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト 【SD3003】
10YR6/2 灰黄褐色細砂質シルト乾痕状に多く含む
15 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3003】
10YR5/4 にぶい黄褐色細砂質シルト若干含む
16 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD3003】
17 10YR4/2 灰黄褐色と 10YR4/1 褐灰いろの中間色粘土
10YR3/1 黒褐色粘土ブロック多く含む
18 2.5Y5/6 黄褐色粘土 【基盤層】

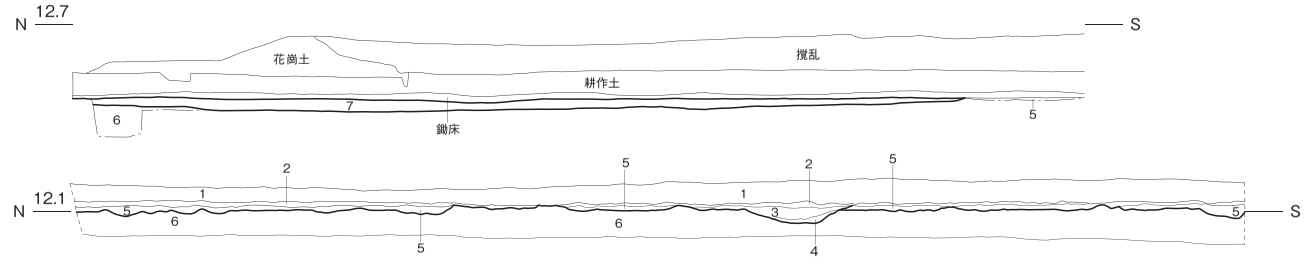


第８図　３区 北壁・南壁断面図

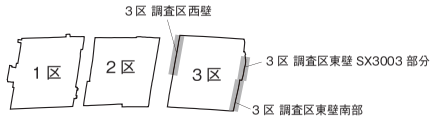


0 2m
(1/60)

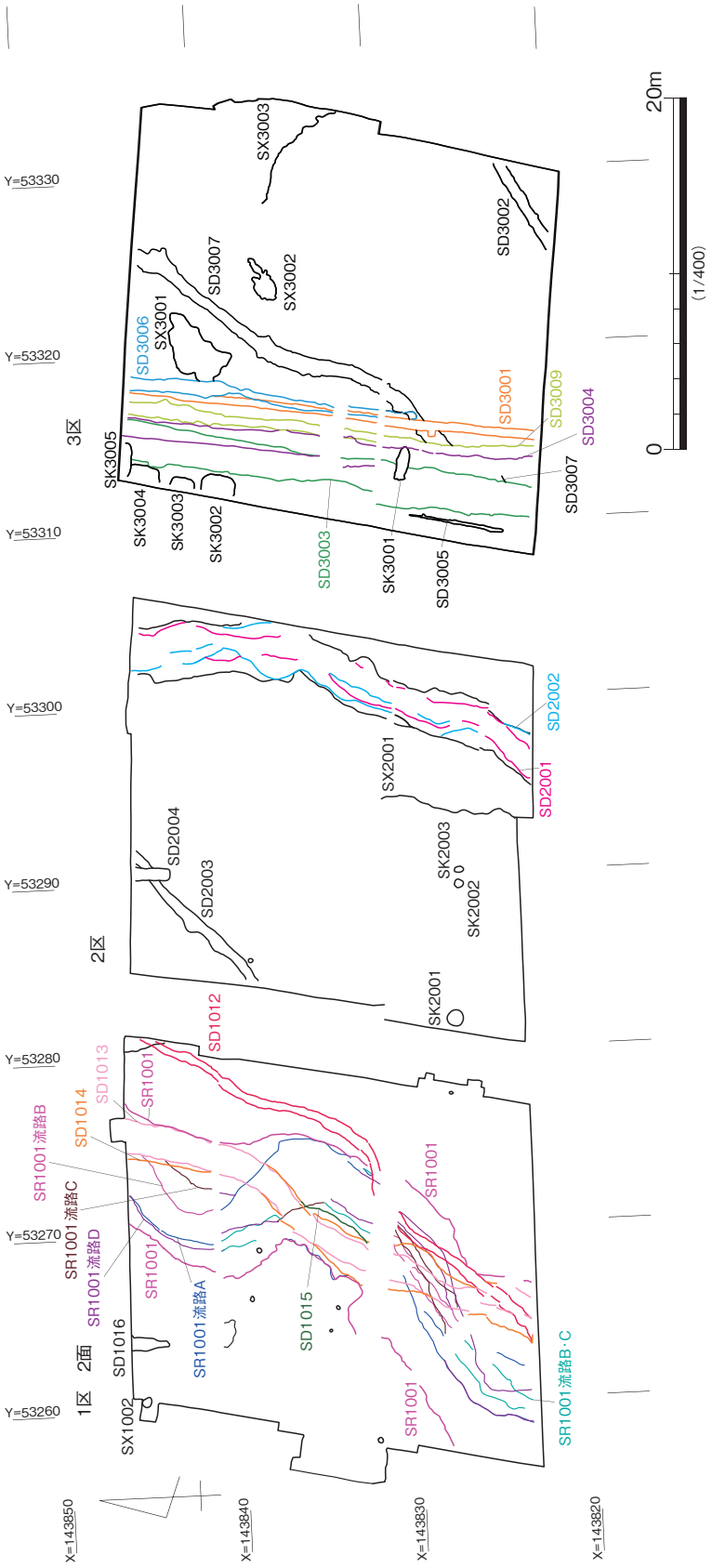
1 【耕作土】
2 【鋤床】
3 2.5Y5/6 黄褐色粘土 【基盤層】
4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土に 2.5Y5/3 黄褐色シルトが多量 【SK3002】
10YR5/6 黄褐色粘質シルトが中量、10YR3/3 暗褐色粘質シルトが極小量で粒状にまだらに混じる 【撹乱】
5 10YR2/2 黒褐色粘土 【撹乱】
6 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトに 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトが多量にまだらに混じる 【SK3003】
一部 2.5Y6/2 灰黄色シルトが帯状に堆積
7 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトに 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトが少量混じる 【SK3004】



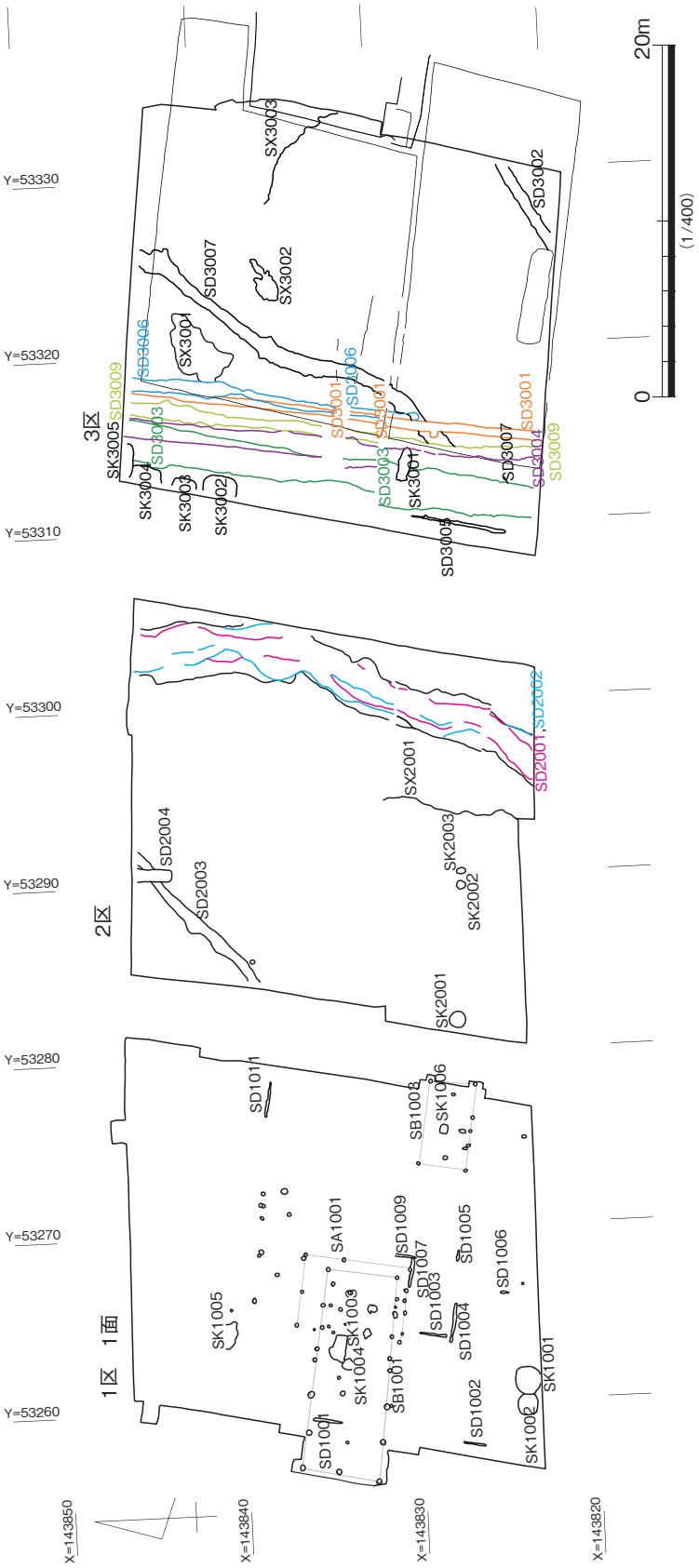
1 【耕作土】
2 【鋤床】
3 10YR3/2 黒褐色粘土 【SD3002】
10YR4/4 褐色粘土ブロック多く含む
4 10YR3/3 暗褐色粘土 【SD3002】
10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロック少量含む
5 10YR4/2 灰黄褐色と 10YR4/1 褐灰色の中間色粘土
10YR3/1 黒褐色粘土ブロック多く含む
6 2.5Y5/6 黄褐色粘土 【基盤層】
7 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 【SX3003】
直径 5 ㎜くらいまでの 5YR2/2 黒褐色粒を含む
直径 2 ㎝くらいまでの 2.5Y6/8 明黄褐色粘土ブロックを含む



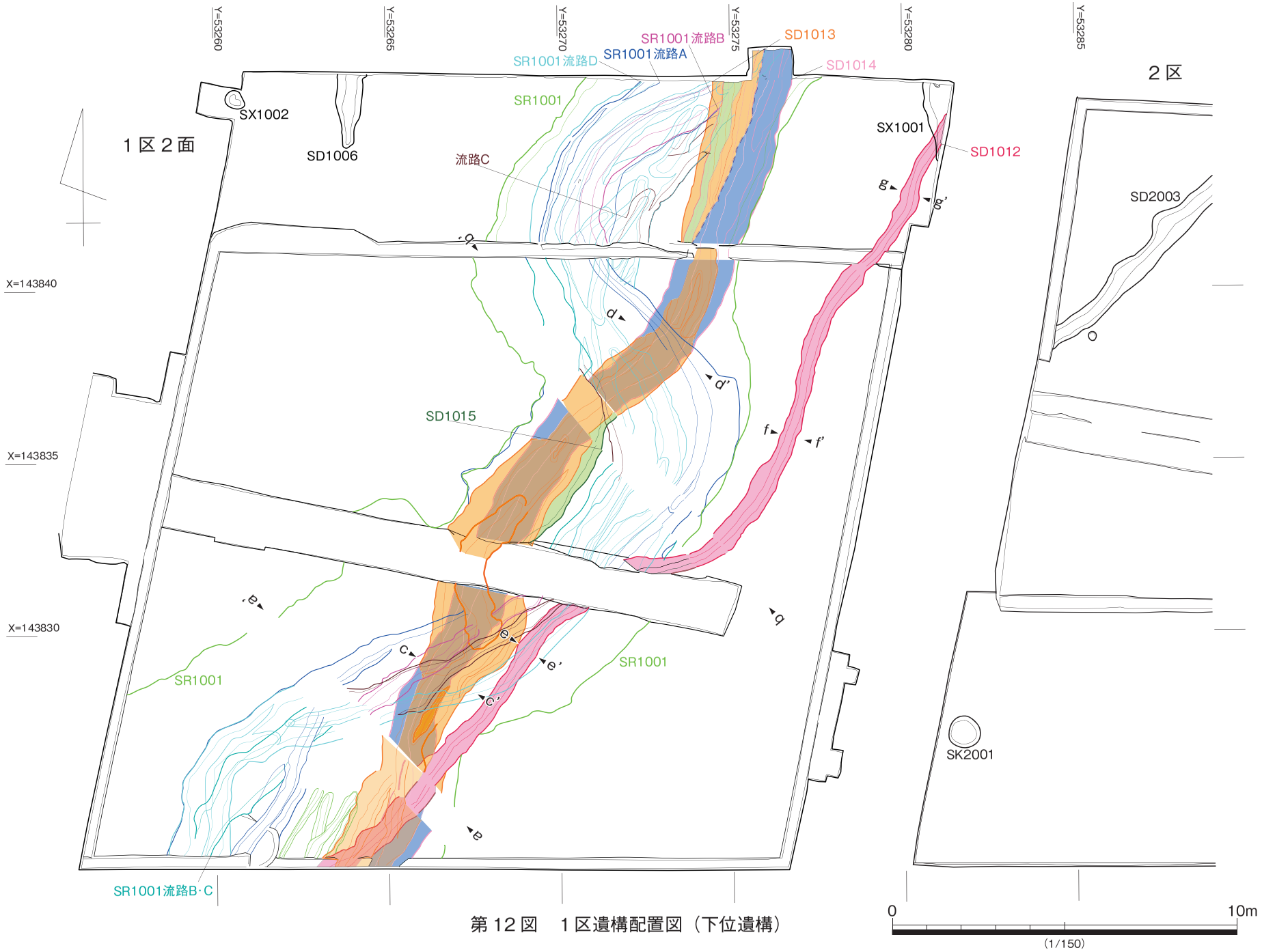
第 9 図　3 区 西壁・東壁 SX3003・南壁断面図



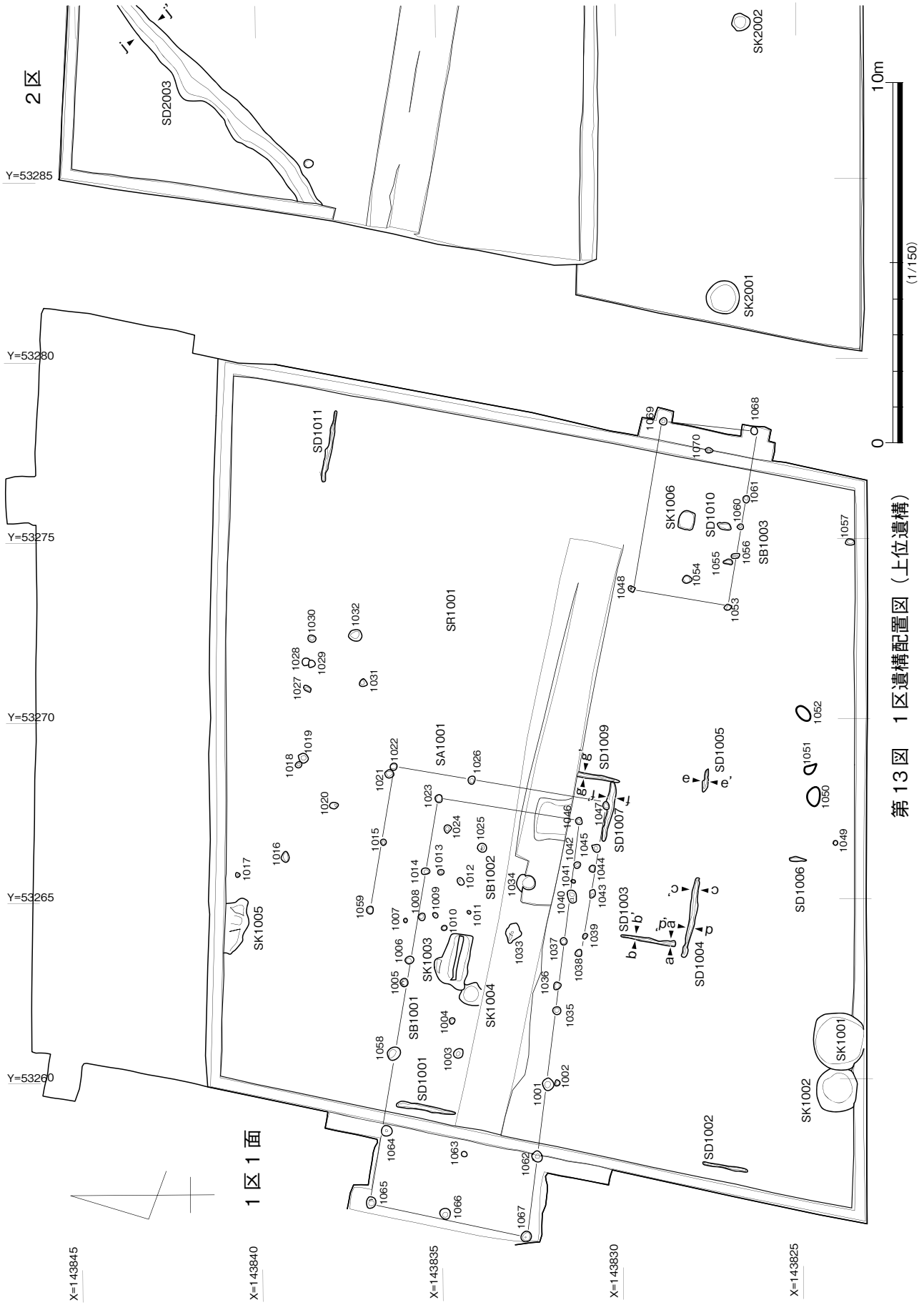
第 10 図　遺構配置図（1 区下位遺構）



第 11 図　遺構配置図（1 区上位遺構）

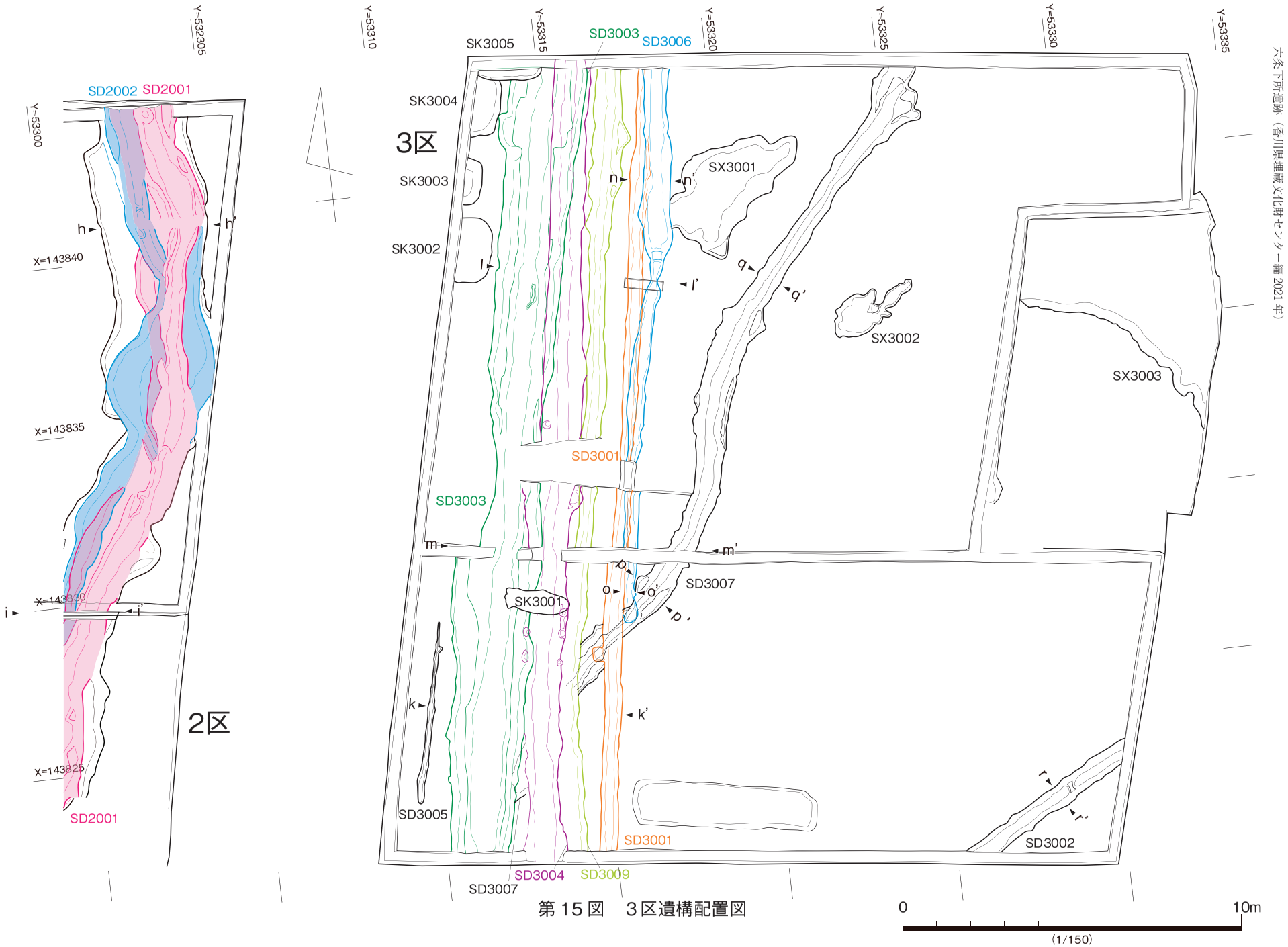


第12図　1区遺構配置図（下位遺構）

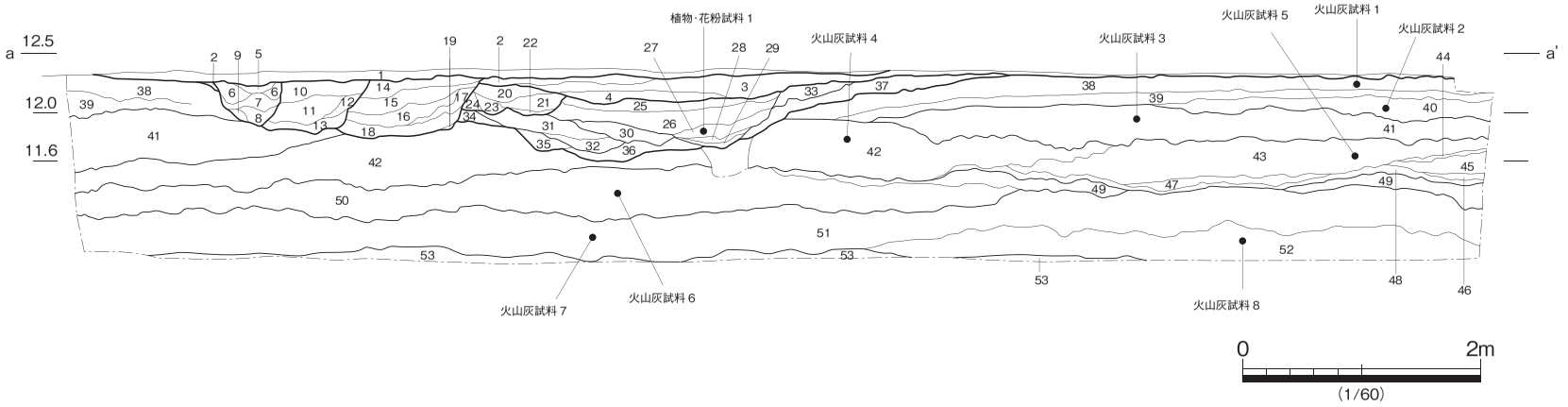


第 13 図　1 区遺構配置図（上位遺構）

第１４図　２区遺構配置図

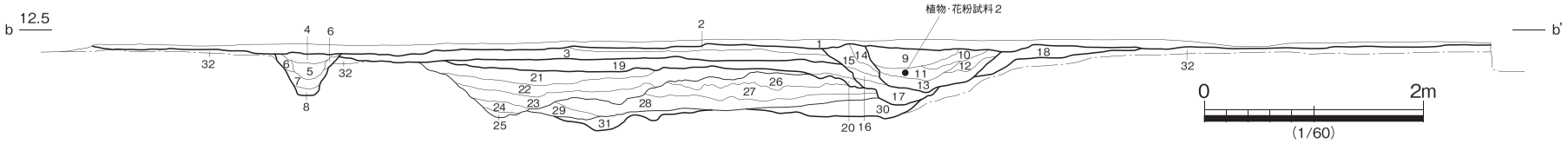


第 15 図　3 区遺構配置図



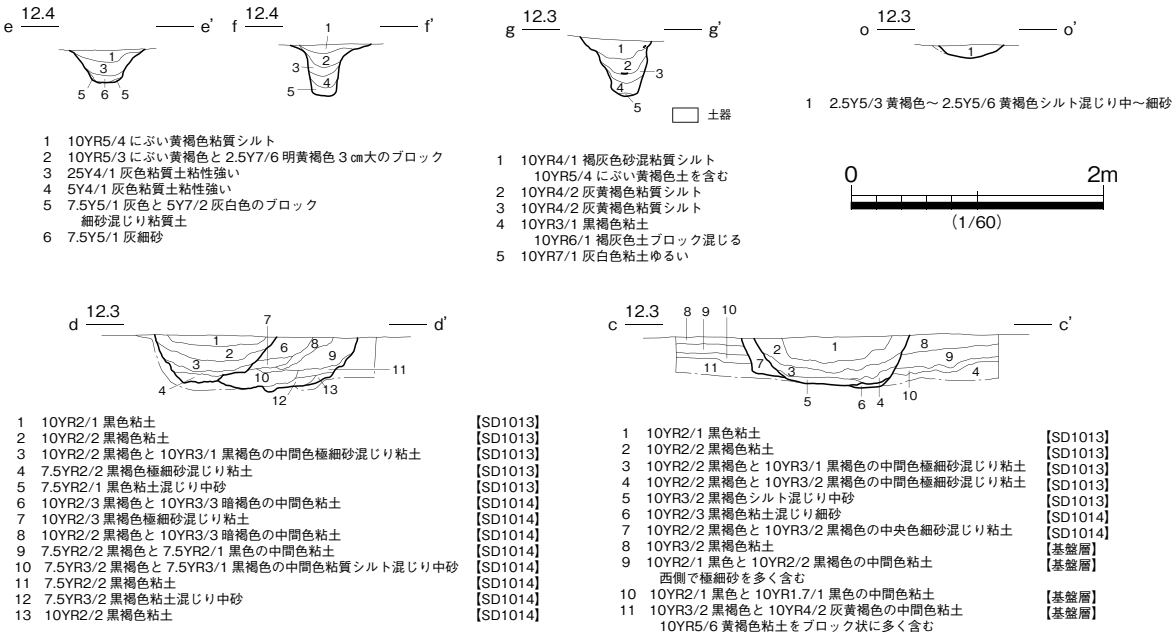
1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SR1001】
10YR3/3 暗褐色シルトの Mn 沈着粒 φ2 ～ 6mm 多く含む
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SR1001】
3 10YR2/1 黒色粘土 【SR1001】
4 10YR2/1 黒色粘土 【SR1001】
10YR3/2 黒褐色粘質シルトを多量に含む
5 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD1012】
10YR3/3 暗褐色シルトの Mn 沈着をブロックで多量に含む
6 10YR2/1 黒色粘土 【SD1012】
7 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1012】
8 10YR3/2 黒褐色細砂 【SD1012】
10YR2/1 黒色粘土を粒状に極少量含む
9 10YR3/1 黒褐色粘土 【SD1012】
10YR5/2 灰黄褐色粘土をブロックで中量混じる
10 10YR2/1 黒色粘土 【SD1013】
10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルトがブロックで少量混じる
11 10YR2/1 黒色粘土粘性が強い 【SD1013】
12 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1013】
13 10YR3/2 黒褐色シルト混じり中砂 【SD1013】
10YR6/8 明黄褐色粘土ブロックを含む
14 10YR2/3 黒褐色粘土 【SD1014】
15 10YR2/3 黒褐色シルト混じり粘土 【SD1014】
10YR3/4 暗褐色粘土が多量に混じる
16 7.5YR2/2 黒褐色粘土 【SD1014】
17 10YR2/2 黒褐色極細砂混じり粘土 【SD1014】
18 10YR3/2 黒褐色シルト混じり中砂 【SD1014】
10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロックを少量含む
19 10YR4/2 灰黄褐色粘土 【SD1014】
20 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 【SD1015】
21 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1015】
7.5YR4/6 褐色シルトの Mn 粒を少量含む
22 10YR3/2 黒褐色シルト混じり細砂 【SD1015】
23 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 【SD1015】
10YR5/2 灰黄褐色シルトが中量混じる
24 10YR2/1 黒色シルト混じり粘土 【SD1015】
25 10YR2/1 黒色粘土 【SR1001 流路A】
10YR5/2 灰黄褐色シルトと 7.5YR4/6 褐色粘質シルトがまだらに混じる
26 10YR2/2 黒褐色粘土と 10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる 【SR1001 流路A】
7.5YR4/6 褐色シルトの Mn 粒を多量に含む
27 10YR2/2 黒褐色粘土 【SR1001 流路A】
一部下位に 10YR3/2 黒褐色細砂
28 10YR3/2 黒褐色粗砂 【SR1001 流路A】
10YR4/6 褐色細砂を含む
29 7.5YR5/6 明褐色シルト混じり粗砂 【SR1001 流路A】
10YR5/2 灰黄褐色中砂を含む
30 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 【SR1001 流路B】
10YR2/2 黒褐色粘土ブロックを含む
31 10YR2/2 黒褐色粘質シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる 【SR1001 流路C】
一部下位に 10YR4/6 褐色粘質シルトの帯状の堆積
32 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 【SR1001 流路C】
下位に 10YR5/8 黄褐色シルト混じり粗砂の帯状の堆積
33 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 【SR1001 流路C】
34 10YR5/2 灰黄褐色シルト 【SR1001 流路D】
10YR6/8 明黄褐色粘土が粒状に多量に混じる
35 10YR3/2 黒褐色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色シルト 【SR1001 流路D】
36 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 【SR1001 流路D】
10YR4/6 褐色中砂が多量に混じる
37 10YR4/2 灰黄褐色シルト 【SR1001 流路D】
10YR3/2 黒褐色粘質シルトブロック少量含む
38 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土 【流路 Ⅰ】
39 2.5Y7/6 明黄褐色粘土 【流路 Ⅰ】
40 5Y6/4 オリーブ黄色粘土 【流路 Ⅰ】
41 2.5Y8/6 黄色粘土混じり細～中砂 【流路 Ⅱ】
小粒の Mn 含む
42 10YR7/8 黄橙色粘土 【流路 Ⅲ】
細砂混じる
43 10YR6/8 明黄褐色粘土混じり細～中砂 【流路 Ⅲ】
Fe の雲状斑紋
44 2.5Y7/4 浅黄色 シルト 【流路 Ⅲ】
細砂混じる
45 10YR7/6 明黄褐色粘土 【流路 Ⅲ】
細～中砂混じる　Fe の雲状斑紋
46 10YR7/6 明黄褐色粘土 【流路 Ⅲ】
細～中砂混じる　Fe の雲状斑紋．8 層より Fe 多い
47 10YR7/6 明黄褐色細～中砂 【流路 Ⅲ】
Fe の沈着
48 10YR8/6 黄橙色細砂 【流路 Ⅲ】
シルト混じる
49 5Y6/3 オリーブ黄色細～中砂 【流路 Ⅳ】
シルト混じる Fe 沈着
50 7.5Y7/2 灰白色粘土 【流路 Ⅳ】
細砂混じる
51 5Y5/3 灰オリーブ色細砂 【流路 Ⅴ】
シルト多く混じる Fe の雲状斑紋
52 5Y4/1 灰色極細砂 【流路 Ⅴ】
粘土多く混じる
53 5Y5/4 オリーブ色粘土 【基盤層】
細砂～極細砂混じる全体的に Fe のうすい雲状斑紋あり

第 16 図　SR1001 断面図 1



1 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SR1001】
10YR3/3 暗褐色シルトの Mn 沈着粒 φ2 ～ 6mm 多く含む
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SR1001】
3 10YR2/1 黒色粘土 【SR1001】
4 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 【SD1012】
10YR3/3 暗褐色シルトの Mn 沈着をブロックで多量に含む
5 10YR2/1 黒色粘土 【SD1012】
6 10YR3/2 黒褐色粘質シルトと 10YR5/2 灰黄褐色粘土がまだらに混じる 【SD1012】
7 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1012】
8 10YR3/2 黒褐色細砂 【SD1012】
10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトブロックを少量含む
9 10YR2/1 黒色粘土 【SD1013】
10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルトがブロックで少量混じる
10 10YR2/1 黒色粘土 【SD1013】
粘性が強い
11 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1013】
10YR3/4 暗褐色細砂を多量に含む
12 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1013】
13 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1013】
14 10YR2/3 黒褐色粘土 【SD1014】
15 10YR2/3 黒褐色シルト混じり粘土 【SD1014】
10YR3/4 暗褐色粘土が多量に混じる
16 7.5YR2/2 黒褐色粘土 【SD1014】
17 10YR3/2 黒褐色シルト混じり中砂 【SD1014】
10YR2/2 黒褐色粘質シルトブロックを中量含む
下位に 7.5YR4/6 褐色粘土を帯状に含む
18 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 【SD1015】
19 10YR2/2 黒褐色粘土 【SD1015】
7.5YR4/6 褐色シルトの Mn 粒を少量含む
20 10YR3/2 黒褐色シルト混じり細砂 【SD1015】
21 10YR2/1 黒色粘土 【SR1001 流路 A】
10YR5/2 灰黄褐色シルトと 7.5YR4/6 褐色粘質シルトがまだらに混じる
22 10YR2/2 黒褐色粘土と 10YR5/2 灰黄褐色シルトがまだらに混じる 【SR1001 流路 A】
7.5YR4/6 褐色シルトの Mn 粒を多量に含む
23 10YR2/2 黒褐色粘土 【SR1001 流路 A】
一部下位に 10YR3/2 黒褐色細砂
24 10YR3/2 黒褐色粗砂 【SR1001 流路 A】
10YR4/6 褐色細砂を含む
25 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 【SR1001 流路 A】
26 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 【SR1001 流路 B】
10YR2/2 黒褐色粘土ブロックを含む
27 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 【SR1001 流路 B】
28 10YR4/2 灰黄褐色極細砂 【SR1001 流路 B】
下位に 7.5YR4/6 褐色細砂混じりシルトの堆積
29 10YR5/2 灰黄褐色中砂混じり細砂 【SR1001 流路 B】
10YR4/6 褐色細砂が帯状に堆積
30 10YR4/2 灰黄褐色シルト 【SR1001 流路 C】
31 10YR4/2 灰黄褐色シルト 【SR1001 流路 D】
10YR6/8 明黄褐色粘土基盤層ブロックを極少量含む
32 10YR6/8 明黄褐色粘土 【基盤層】

第 17 図　SR1001 断面図 2



第 18 図　SD1012・SD1013・SD1014・SD2003 断面図

第 3 節　弥生時代以前の遺構と遺物

溝・自然流路

SR1001 流路 A ～ D、SR1001、SD1012 ～ 1015・2003

1 区南西部から 1 区北東部にかけて流下する溝である。これらの下位には弥生時代の大きな流路と考えられる層（流路Ⅰ～Ⅴ）が堆積する。

溝の堆積順は、SR1001 流路 D → SR1001 流路 C → SR1001 流路 B → SR1001 流路 A → SD1015 → SR1001 → SD1014 → SD1013 → SD1012、となっている。

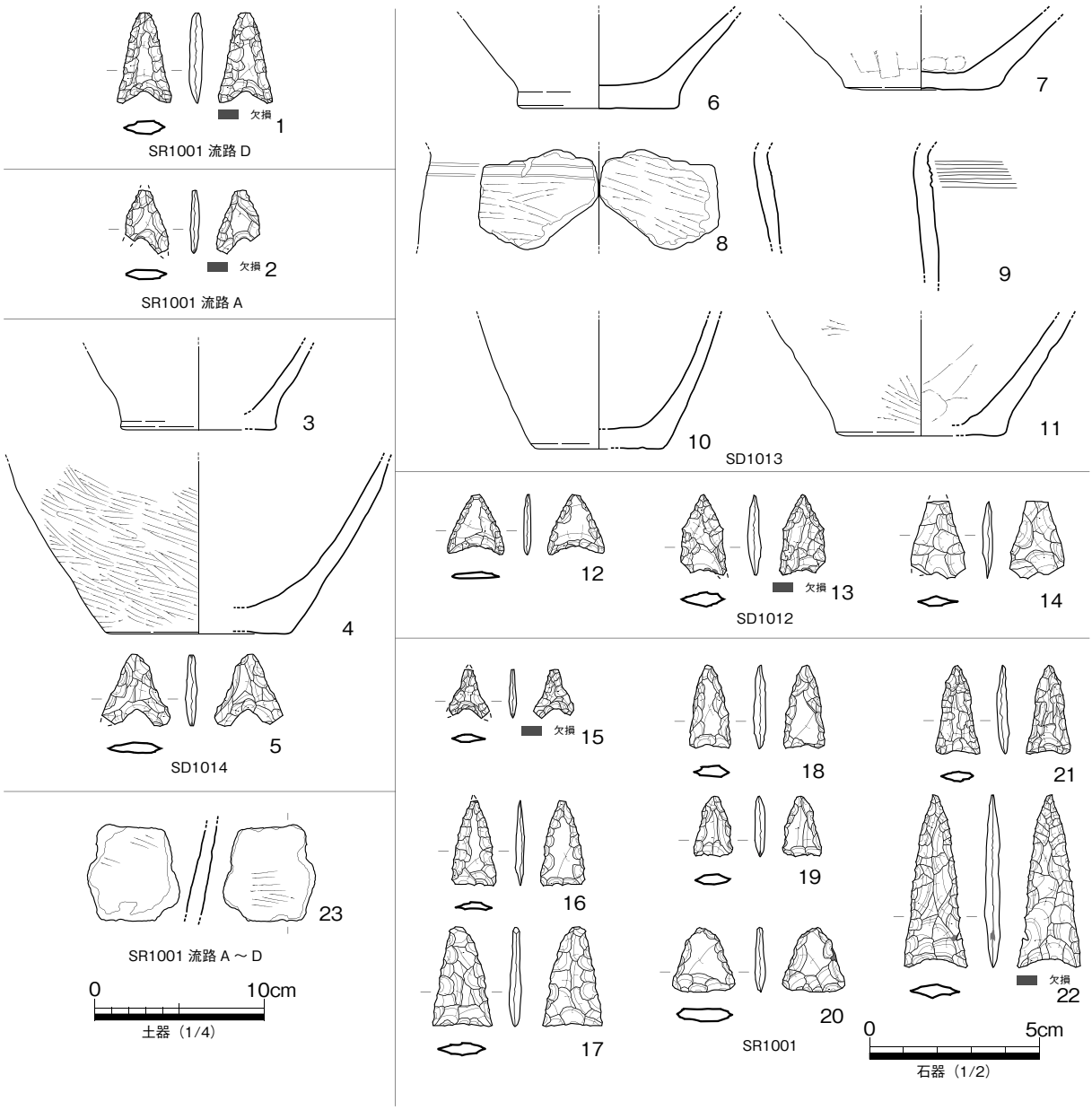
SD1012 ～ 1015 は、底面からの立ち上がりが比較的急で水路と推測される。SR1001 流路 A ～ D がある程度埋没して形成された窪地を利用して SD1015 が設けられたと考えられる。SD1015 とその上位の SR1001 が埋没し、さらに浅い窪地に順に築かれたのが SD1013・1014 である。SD1013・1014 の断面は逆台形状を呈し、底面付近には流水の痕跡が確認できる（c-c’ 5 層、d-d’ 10・12 層）。SD1014・1015 が埋没した後、一部は場所を違えて SD1012 が掘削される。SD1012 は、1 区南端部中央からかぎ状に曲がって 1 区北東角にかけて流下する。底面からの立ち上がり角度は比較的急である。底面付近の一部に流水の痕跡が認められ（e-e’ 6 層）、最終的には埋め戻されたと推察される（f-f’ 2 層）。

2 区で検出された SD2003 も南西 - 北東に流下することから、1 区の SD1012 ～ 1015 から派生する水路であった蓋然性が高い。

SR1001 流路 D 出土遺物　**1** はサヌカイト製石鏃である。

SR1001 流路 A 出土遺物　**2** はサヌカイト製石鏃である。

SD1014 出土遺物　**3**・**4** は前期の弥生土器底部である。**5** はサヌカイト製石鏃である。



第 19 図　SR・SD 出土遺物実測図

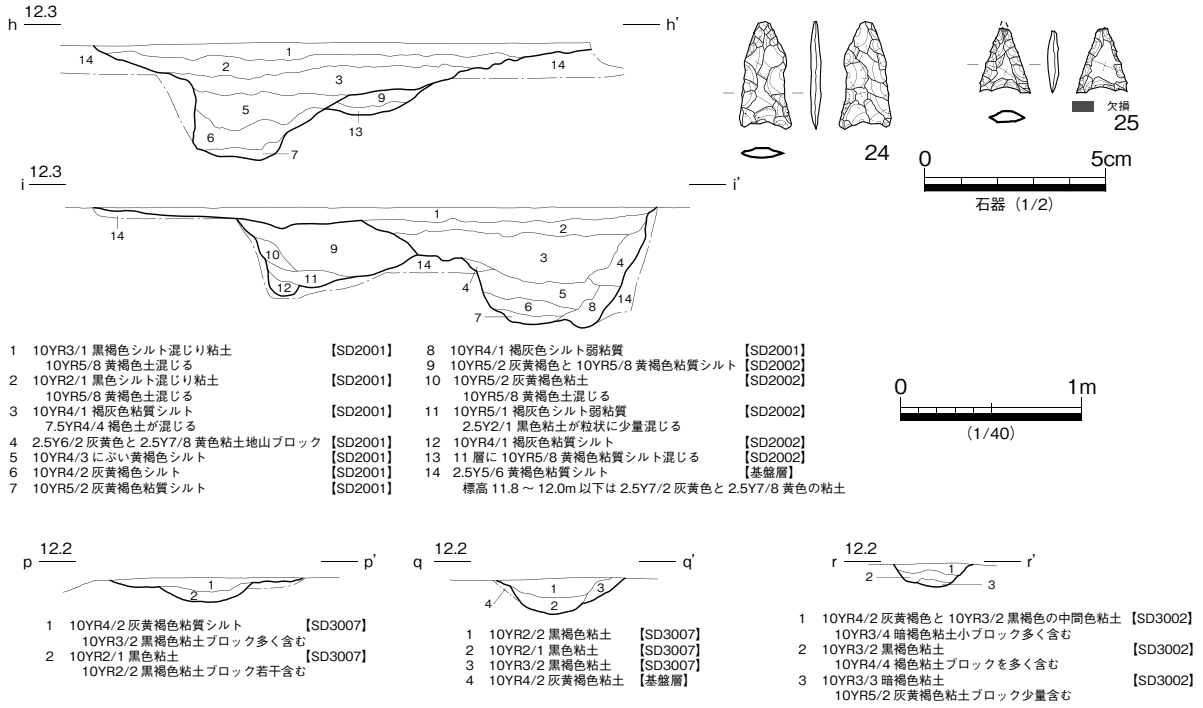
SD1013 出土遺物　**6**･**7**･**11** は前期の弥生土器壺底部、**8** ～ **10** は弥生土器甕である。**8**･**9** にはそれぞれ 2･4 条のヘラ描き沈線が施される。

SD1012 出土遺物　**12** ～ **14** は凹基式のサヌカイト製石鏃である。

SR1001 出土遺物　**15** ～ **22** はサヌカイト製石鏃で、**15**・**18**・**21**・**22** が凹基式、**16**・**17**・**19**・**20** が平基式である。

SR1001 流路 A ～ D 出土遺物　SR1001 流路 A ～ D のいずれかから縄文土器深鉢 **23** が出土した。

時期　**9** から SD1013 は弥生時代前期後半（前期Ⅱａ、森下 1998）と判断できる。近似する埋土でほぼ同地点にある SD1012・1014・1015・2003、SR1001 も近い時期と考えられる。SR1001 流路 A ～ D は縄文時代（後期～晩期か）から弥生時代前期後半の間に位置付けられる。流路Ⅰ～Ⅴは、それ以前の埋没と判断される。



第 20 図　SD2001・SD2002・SD3002・SD3007 断面図・SD2001 出土遺物実測図

SD2001・2002

2 区東部を、やや蛇行しながら南北方向に流下する溝である。先行する SD2002 は、しばらく機能した後、基盤層に近いブロックを含む土（9 層）で埋め戻された可能性がある。SD2002 埋没後に SD2001 が開削される。SD2001 も最終的には埋め戻されたとみられる（1 ～ 4 層）。

SD2001 出土遺物　**24･25** は凹基式のサヌカイト製石鏃である。

時期　灰褐色～黒褐色系の埋土がSD1012～1015等に類似する点から弥生時代前期としておく。なお、流下方向が条里方向と合致しないため 7 世紀以前であることは確実である。

SD3002・3007

SD3002 は 3 区南西部から北東方向に流下する溝である。3 区南東隅に位置する SD3007 も流下方向は南西 - 北東を示す。位置関係からみて、いずれも SD2001・2002 より派生した溝の可能性がある。遺物は出土していない。

時期　黒褐色系の埋土が SD1012 ～ 1015 等と近いため、弥生時代前期と考えられる。

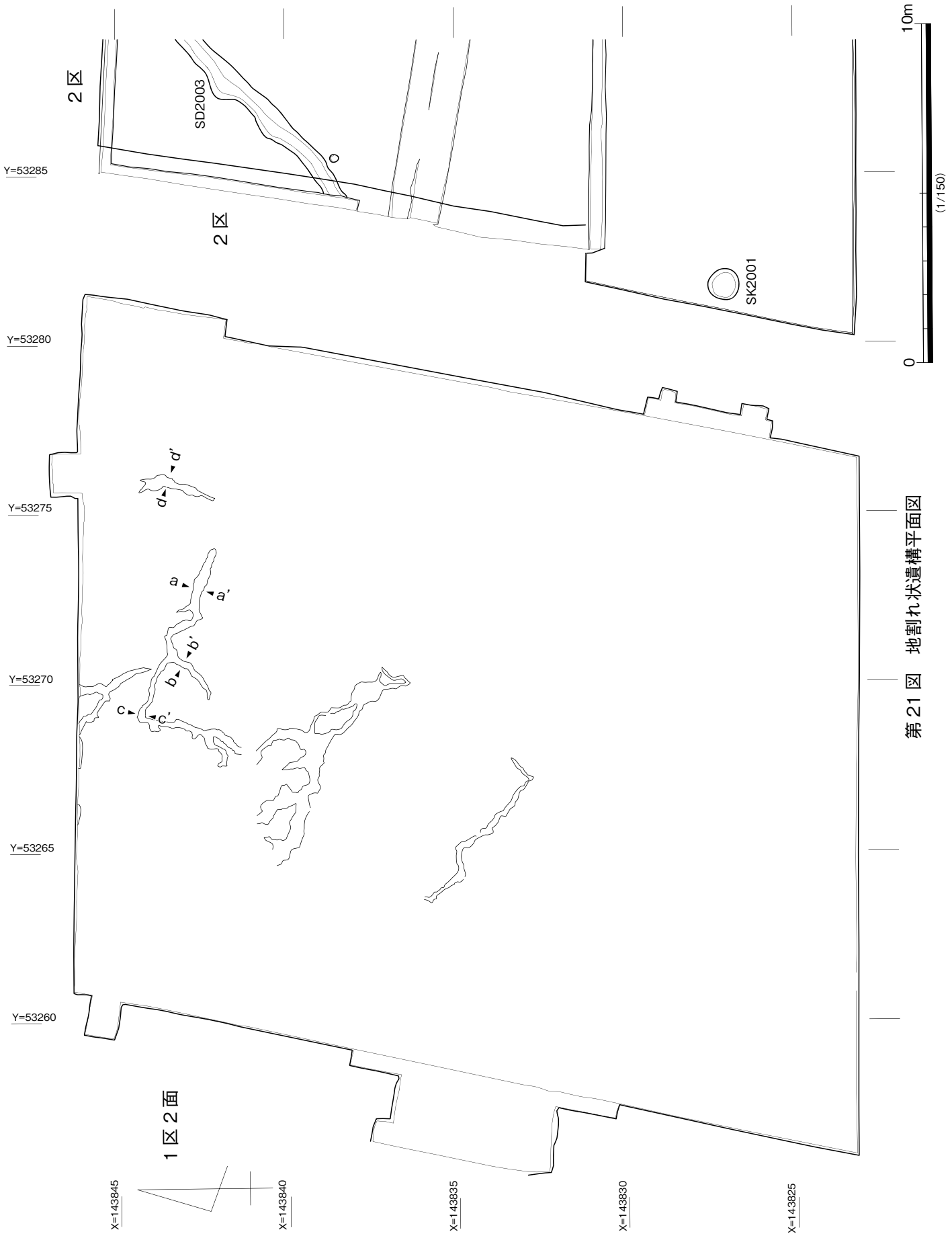
その他

SX3002

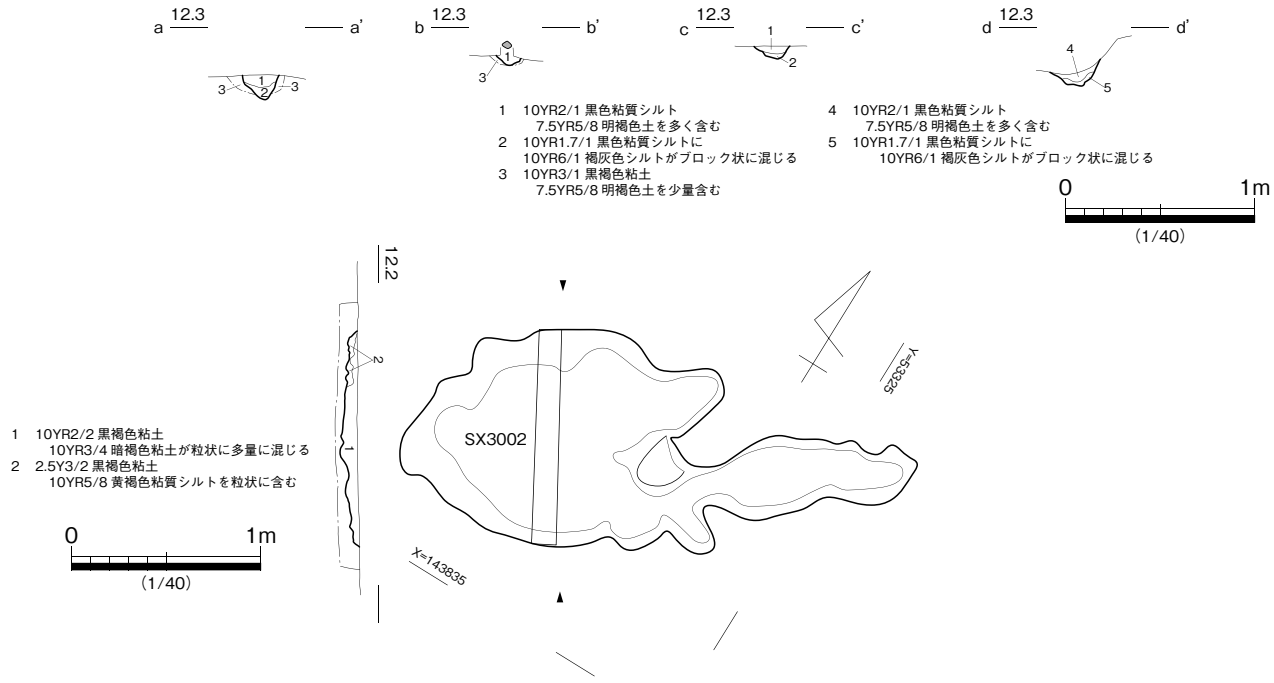
3 区東部で検出した平面形不定形の落ち込み状遺構である。遺物は出土していない。

時期　埋土から弥生時代前期としておく。

地割れ状遺構



第 21 図　地割れ状遺構平面図



第 22 図　1 区 地割れ状遺構断面図・SX3002 平・断面図

1 区北半部の SR1001 流路 A ～ D 下面で検出した網目状の遺構である。地割れを示す可能性を考えて、地割れ状遺構とした。遺物は出土していない。

時期　SR1001 流路 A ～ D に先行するため、弥生時代前期後半以前だろう。

第 4 節　中世の遺構と遺物

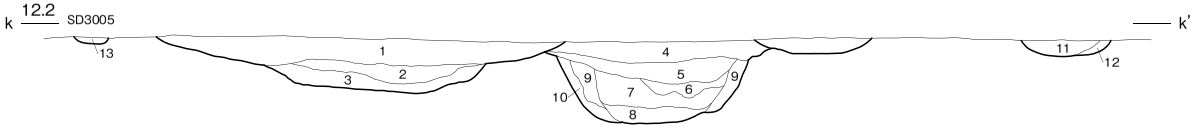
溝

SD3001・3003・3004・3005・3006・3007・3009

3 区西端部近くを南北方向に流下する溝である。流下方向は周囲の条里地割の方向に合致する。溝の先後関係は、SD3004 → SD3003、SD3004 → SD3009、SD3001 → SD3006、となっている。SD3009・3004・3003 の西側一群のいずれかと、SD3001・3006 の東側一群のいずれか、及び SD3005 は併存していた可能性がある。

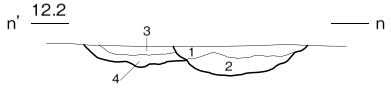
SD3001 出土遺物　**26** は土師質土器杯である。小破片のため、底径は実測図よりも小さくなる可能性がある。

SD3003 出土遺物　**27･28** は土師質土器杯である。十瓶山窯系須恵器椀 **29** の高台高さはかなり低い。椀 A Ⅱ -8 型式（佐藤 2000）と判断できる。**30** は土師質土器椀、**31** は内黒の黒色土器椀で、**29** に比べて高台の高さがある。**32･33** は土師質土器足釜、**34** は土師質土器甕である。**45** は写真のみを提示した。甑の把手のようにもみえるが、外面の仕上げがなされていない点、一部に黒斑が認められる点等から、土器焼成時に生じた可能性のある焼成土塊（乗松 2020,pp.106-107）と考えられる。焼成土塊は本遺跡から数 km 西にある北野遺跡や、さぬき市の鴨部・川田遺跡で出土している。いずれも弥生時代前期後半

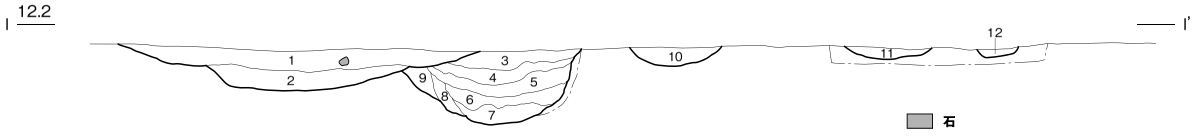


1　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　【SD3003】
　10YR6/2 灰黄褐色細砂質シルト乾痕状に多く含む
2　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3003】
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルトブロック若干含む
3　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3003】
4　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック少量含む
5　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック多く含む
6　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質粘質シルト　【SD3004】
7　10YR4/2 灰黄褐色粘土　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック多く含む
8　10YR6/2 灰黄褐色粘質細砂　【SD3004】
9　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土　【SD3004】
　10YR4/6 褐色粘土ブロック多く含む
10　10YR5/6 黄褐色粘土　【基盤層】
　10YR4/2 灰黄褐色粘土ブロック多く含む
11　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
12　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
13　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂混じり粘質シルト
　地山ブロック多含

★4 ～ 5 層掘り直し 1→4 層東側は SD3009 埋土
6 ～ 8 層掘り直し 2
9 層　閉削詰埋没層

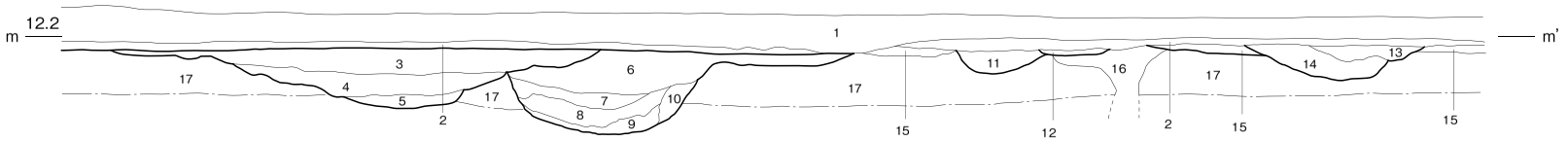


1　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　【SD3006】
　10YR5/2 灰黄褐色細砂混じり粘質シルト乾痕状に多く含む
2　10YR4/4 褐色と 10YR5/4 にぶい黄褐色の中間色中砂混じり粘質シルト　【SD3006】
　5 ㎝前後の亜円礫若干含む
3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト　【SD3001】
　10YR4/6 褐色粘質シルトがまだらに混じる
4　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト　【SD3001】
　SD3001 あぜ 2-1 層と同一



1　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3003】
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルトブロック若干含む
2　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3003】
3　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック少量含む
4　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルト多く含む
5　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質粘質シルト　【SD3004】
6　10YR4/2 灰黄褐色粘土　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック多く含む
7　10YR6/2 灰黄褐色粘質細砂　【SD3004】
8　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土　【SD3004】
　10YR4/6 褐色粘土ブロック多く含む
9　10YR5/6 黄褐色粘土　【SD3004】
　10YR4/2 灰黄褐色粘土ブロック多く含む
10　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3009】
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック多く含む
11　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3001】
12　10YR4/4 褐色と 10YR5/4 にぶい黄褐色の中間色　【SD3006】
　中砂混じり粘質シルト

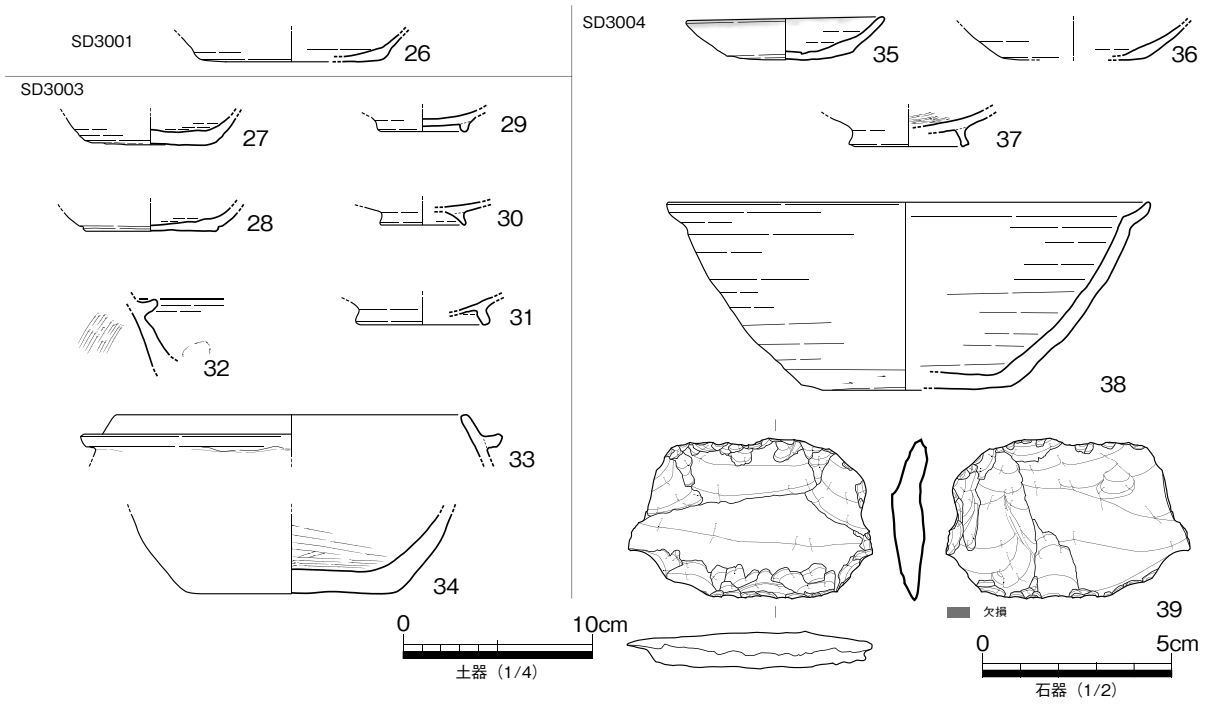
1　10YR6/2 灰黄褐色細砂質粘質シルト　【SD3006】



1　【耕作土】
2　【鋤床】
3　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト　【SD3003】
　10YR6/2 灰黄褐色細砂質シルト乾痕状に多く含む
4　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3003】
　10YR5/4 にぶい黄褐色
5　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3003】
6　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック少量含む　【SD3004】
　下端で 10YR4/2 灰黄褐粘質シルトに変わる
7　10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質粘質シルト　【SD3004】
8　10YR4/2 灰黄褐色粘土　【SD3004】
　10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック多く含む
9　10YR6/2 灰黄褐色粘質細砂　【SD3004】
10　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土　【SD3004】
　10YR4/6 褐色粘土ブロック多く含む
11　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3001】
12　10YR6/2 灰黄褐色細砂質粘質シルト　【SD3001】
12　10YR6/2 灰黄褐色細砂質粘質シルト　【SD3006】
13　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　【SD3007】
　10YR3/2 黒褐色粘土ブロック多く含む）
14　10YR2/1 黒色粘土　【SD3007】
　10YR2/2 黒褐色粘土ブロック若干含む
15　10YR4/2 灰黄褐色と 10YR4/1 褐灰色の中間色粘土　【SD3006】
　10YR3/1 黒褐色粘土ブロック多く含む
16　7.5YR3/4 暗褐色粘土　【風倒木痕？】
17　2.5Y5/6 黄褐色粘土　【基盤層】

0　1m
(1/40)

第 23 図　SD3001・SD3003 ～ SD3007・SD3009 断面図



第 24 図　SD3001・SD3003・SD3004 出土遺物実測図

の遺構に伴う。**45** も胎土は弥生時代前期の土器の胎土に近い。

SD3004 出土遺物　**35** は土師質土器杯である。完形品の **35** は、やや厚手であるものの 1d 型式（乗松 2004）に該当する。**36** も体部の立ち上がりから同型式と考えられる。**37** は内黒の黒色土器椀、**38** は須恵器鉢である。サヌカイト製の **39** は、上端部または下端部を刃部とみてスクレイパーとした。風化は進んでいる。

時期　**35** から SD3004 の埋没時期は 14 世紀後葉（Ⅸ期中段階、佐藤 2016）と考えられる。**32・33** から SD3003 の埋没も近い時期と判断される。小破片で断定するのは難しいが、**26** から SD3001 も 14 世紀前葉前後の溝とみられる。SD3004 に先行する SD3009 は出土遺物からの時期を推測することができない。ただし、SD3003・3004 出土遺物には 12 世紀前半（Ⅶ期古段階）あたりを示す **30・31・37**（**28** も近い時期だろう）が含まれているため、SD3009 は 12 世紀前半までさかのぼる可能性がある。

よってこれらの SD 群の時期は、12 世紀前半～ 14 世紀後葉の幅でとらえておきたい。

落ち込み状遺構

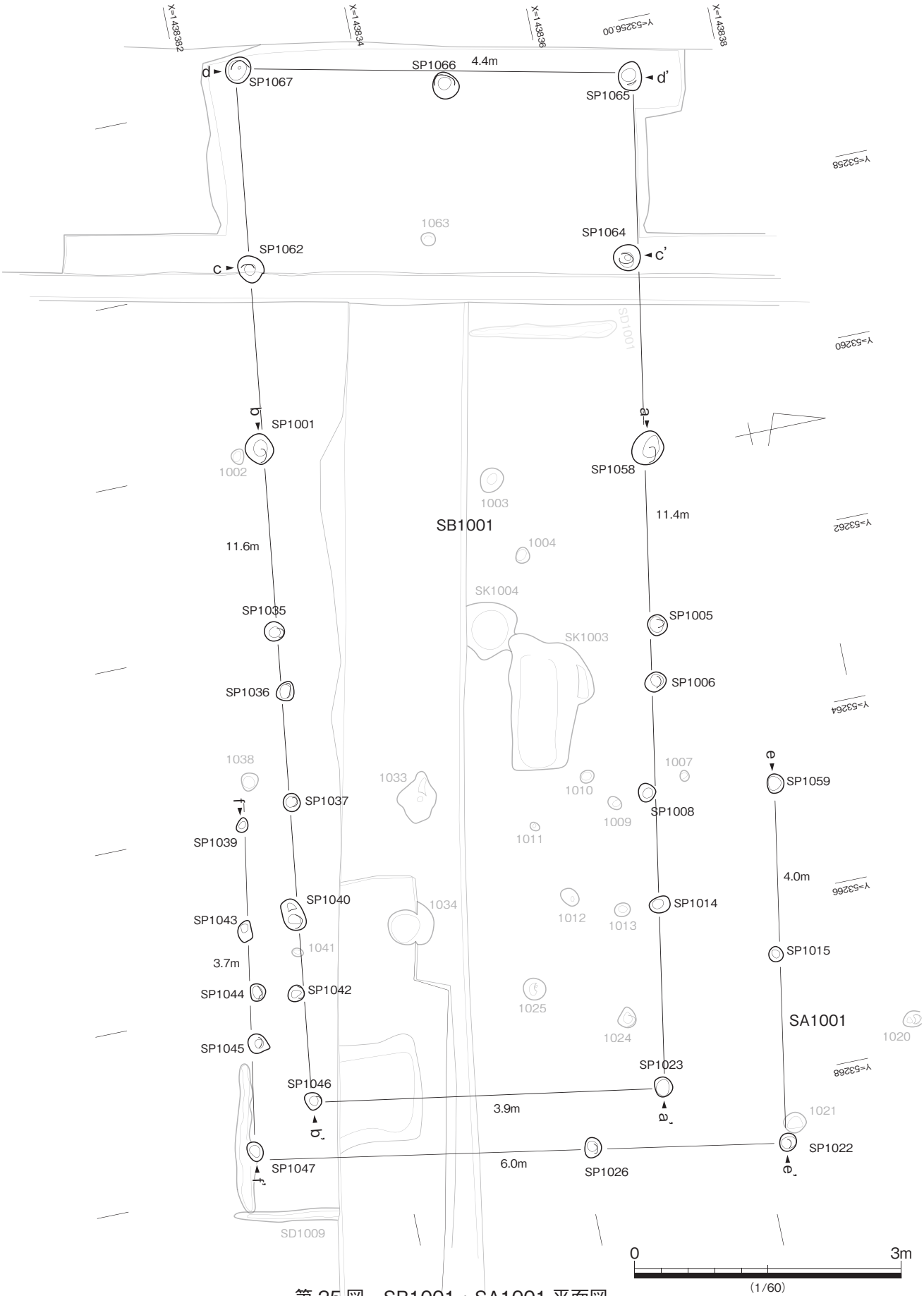
SX3001

3 区で検出した平面形不定形の遺構で、西端部を SD3006 に破壊される。遺物は出土していない。

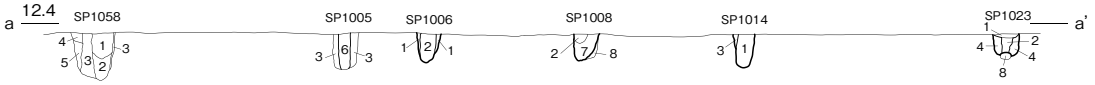
時期　埋土から SD3006 等の溝群に近い 12 世紀前半～ 14 世紀後葉としておく。

第 5 節　近世以降の遺構と遺物

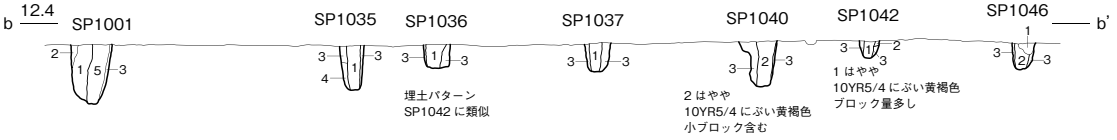
掘立柱建物



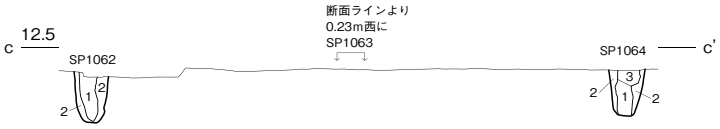
第 25 図　SB1001・SA1001 平面図



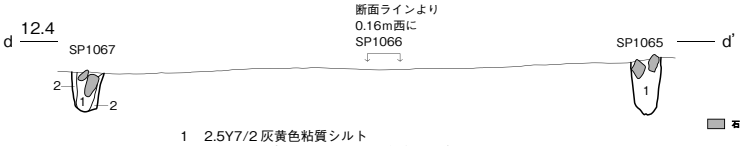
1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
　10YR5/2 灰黄褐色粘土小ブロック多含
2　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土多く含む
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土多く含む
3　2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
4　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト小ブロック若干含
5　10YR4/4 褐色粘土
6　2.5Y7/2 灰黄色　【柱痕】
　10YR5/2 灰黄褐色と 10YR4/2 灰黄褐色の中間色粘土ブロック少量含む
7　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト小ブロック若干含
8　10YR5/6 黄褐色粘土



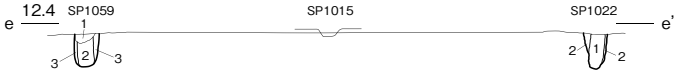
1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロック多く含む
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック多く含む
2　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
3　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
　10YR2/3 黒褐色粘土ブロックを多く含む
4　10YR4/2 灰黄褐色と 10YR5/2 灰黄褐色の中間粘土
5　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
　10YR5/6 黄褐色粘土小ブロックを若干含む



1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
　φ1 ～ 3 ㎝の 10YR6/8 明黄褐色土を含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
　2.5Y7/2 灰黄色土と地山ブロック（10YR7/8 黄橙色）を含む
3　25Y7/2 灰白色粘質シルト

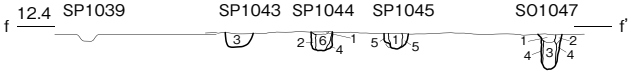


1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
　φ1 ㎝程度の 10YR6/8 明黄褐色土を含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト

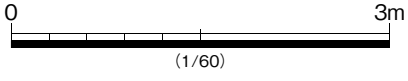


1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトに地山ブロック多含
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10Y R5/4 にぶい黄褐色粘土
2　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
3　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
　2.5Y7/2 灰黄色小ブロック若干含

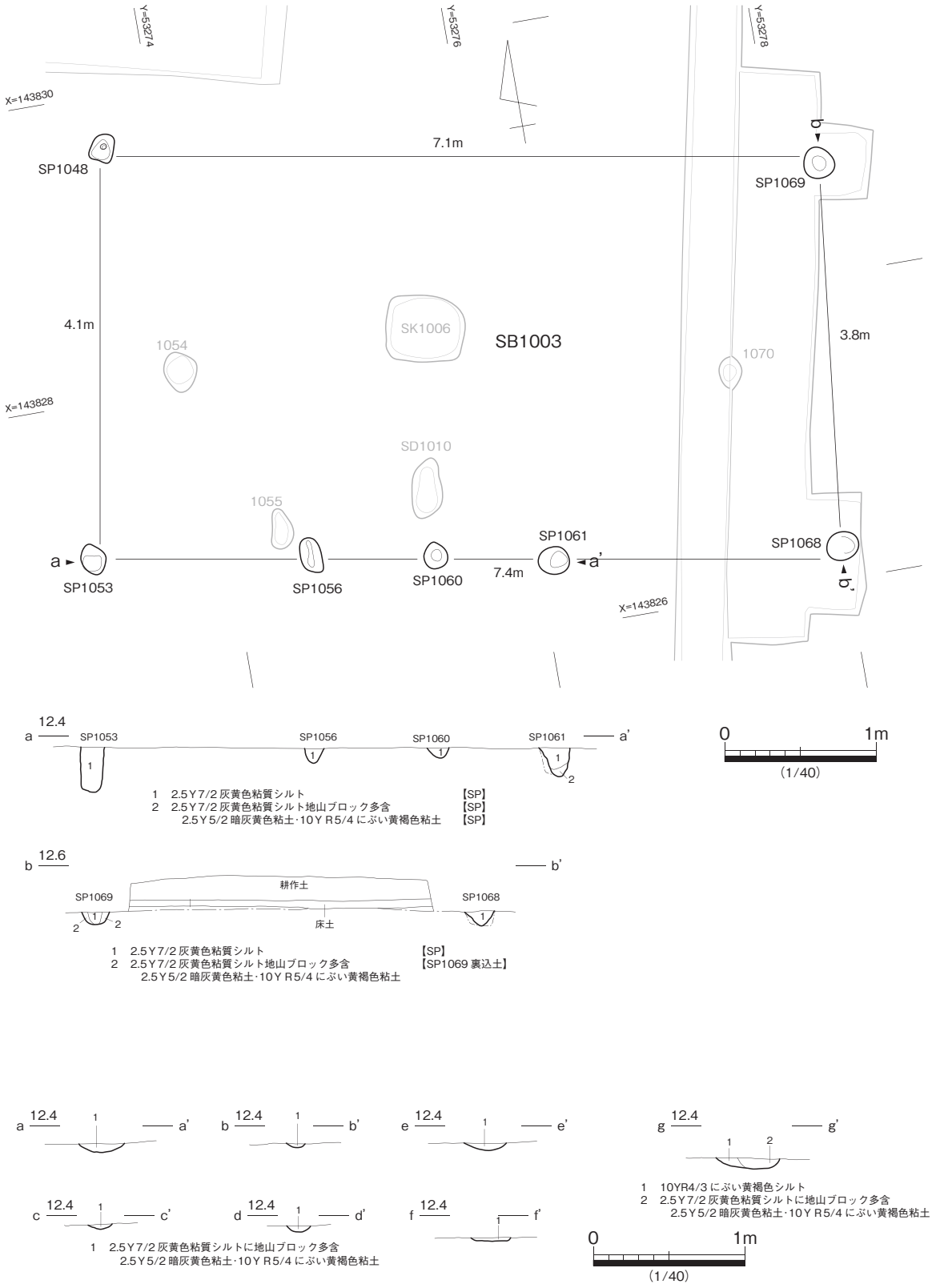
1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
2　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト地山ブロック多含
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10Y R5/4 にぶい黄褐色粘土



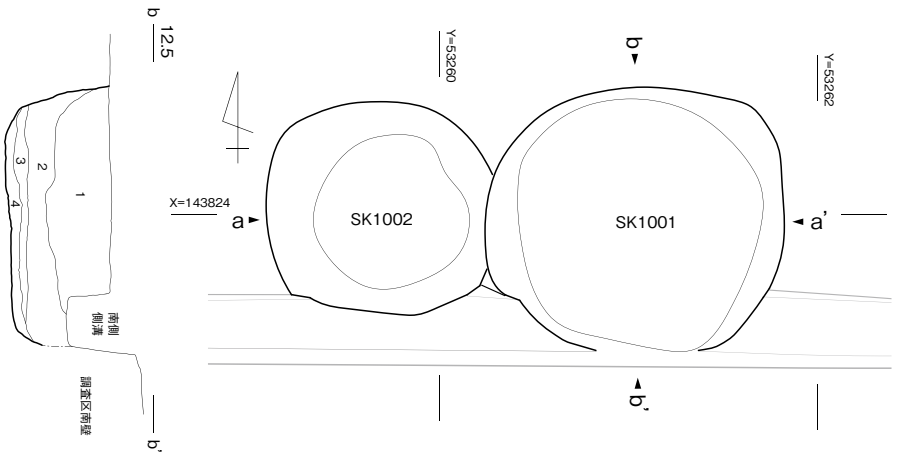
1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10Y R5/4 にぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む
2　10Y R2/3 黒褐色粘土　【柱痕】
　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトブロックを多く含む
3　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
4　10Y R5/2 灰黄褐色粘質シルト
　10Y R2/3 黒褐色粘土ブロックを多く含む
5　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10Y R5/4 にぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む
　ややブロックの量多い
6　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10Y R5/4 にぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む
　ブロックの粒径５～ 10 ㎜で他よりも小さい



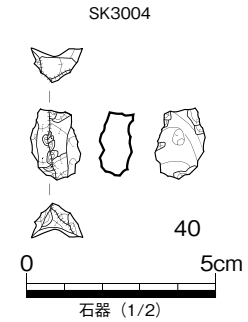
第 26 図　SB1001・SA1001 断面図

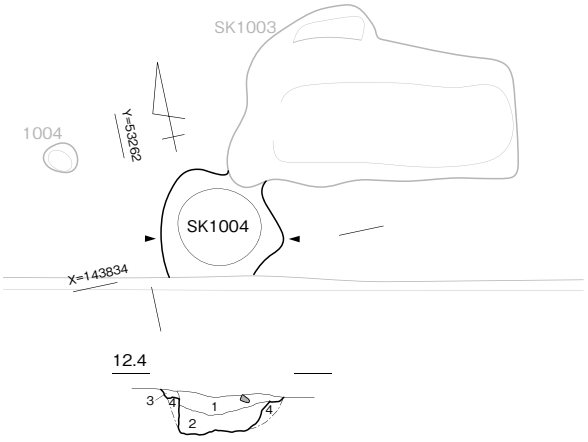


第 27 図　SB1003 平・断面図・SD1003・SD1004・SD1005・SD1007・SD1009 断面図

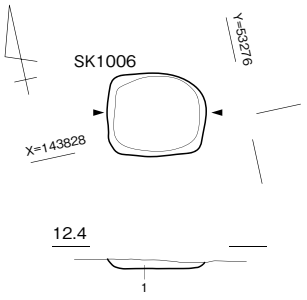


1　2.5Y6/2 灰黄色シルトブロックと　【SK1001】
　2.5Y3/2 黒褐色シルトブロックがまだらに混じる
2　10YR3/1 黒褐色粘質土に　【SK1001】
　7.5YR4/6 褐色シルトが混じる
3　10YR3/2 黒褐色粘質土　【SK1001】
4　10YR4/6 褐色粘土　【SK1001】
5　10YR3/2 黒褐色シルトに　【SK1001】
　2.5Y7/2 灰黄色シルトがブロック状に混じる
6　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト　【SK1002】
　10YR3/1 黒褐色粘土ブロックを多く含む
7　10YR5/1 褐灰色粘土　【SK1002】
　10YR3/1 黒褐色粘土ブロックを少量含む
8　10YR3/1 黒褐色粘土　【SK1002】
　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルトブロックを多く含む
9　10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト
　10YR3/1 黒褐色粘土ブロックを多く含む
10　10YR2/1 黒色粘土　【基盤層】

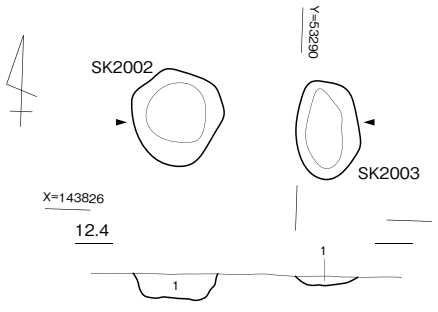




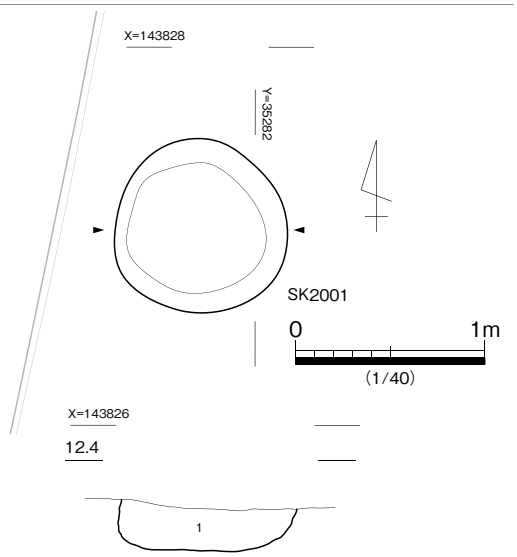
1　2.5Y7/2 灰黄色シルトやや粘質　【SK1004】
　10YR4/2 灰黄褐色粘土ブロック多含
2　2.5Y7/2 灰黄色シルト　【SK1004】
3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土　【SK1004】
4　10YR5/6 黄褐色粘土　【基盤層】



1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトに
　75Y5/4 オリーブ色粘質シルト（焼土）が混ざる　【SK1006】

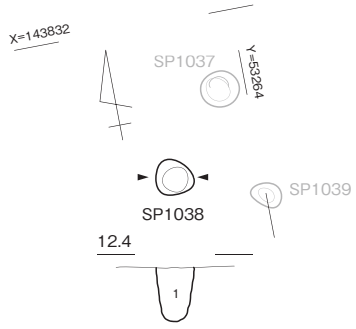


1　2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
　10YR5/6 黄褐色粘質シルトと粒状に少量まだらに混じる

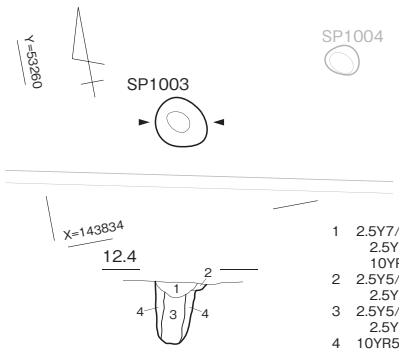


1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトと 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質シルトが
　ブロック状にまだらに混じる
　10YR5/6 黄褐色粘質シルトを粒状にまだらに含む

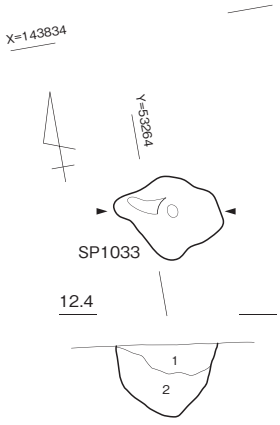
第 28 図　SK1001・SK1002・SK1004・SK1006・SK2001・SK2002・SK2003 平・断面図
　　SK3004 出土遺物実測図



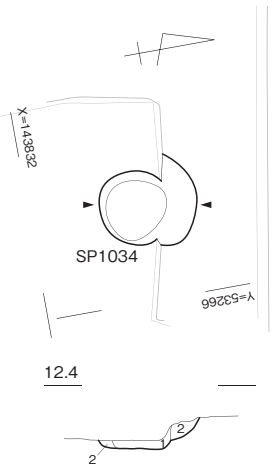
1　10YR4/2 灰黄褐色と 10YR4/3 にぶい黄褐色の中間色粘質シルト
　2.5Y7/2 灰黄色ブロックを多く含む他
　10YR7/6 明黄褐色小ブロックを多く含む



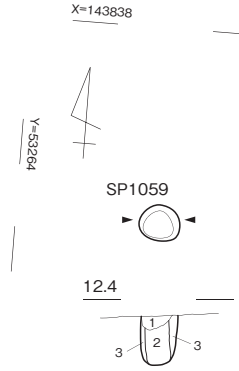
1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロックを多く含む
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
　2.5Y7/2 灰黄色小ブロックを若干含む
3　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
　2.5Y7/2 灰黄色小ブロックを多く含む　【柱痕】
4　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト



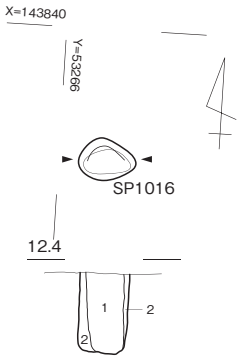
1　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトブロック多含
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック多含
2　2.5Y7/2 灰黄色粘土
　10YR3/3 暗褐色粘土ブロック多含
　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック多含



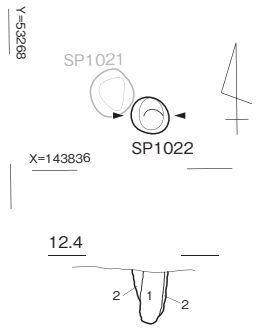
1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（地山）ブロック多含
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
2　10YR3/3 暗褐色粘質シルト
　2.5Y7/2 灰黄色ブロックを多く含む



1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトに地山ブロック多含
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
2　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
3　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
　2.5Y7/2 灰黄色小ブロック若干含

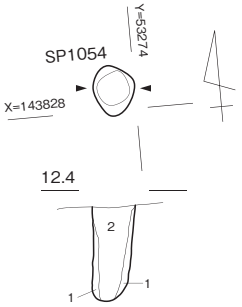


1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトに地山ブロック多含
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10YR5/4 にぶい黄褐色粘土　【柱痕】
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト

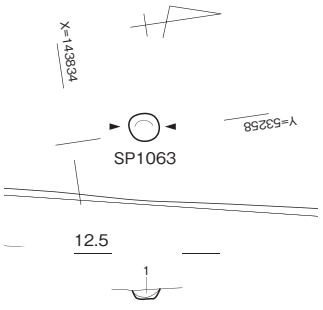


1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】
2　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト地山ブロック多含
　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土･10YR5/4 にぶい黄褐色粘土

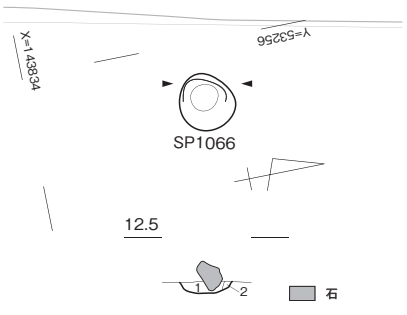
1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト



1　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
2　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト　【柱痕】



1　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト
　φ1 ㎝の 10YR6/8 明黄褐色土を含む



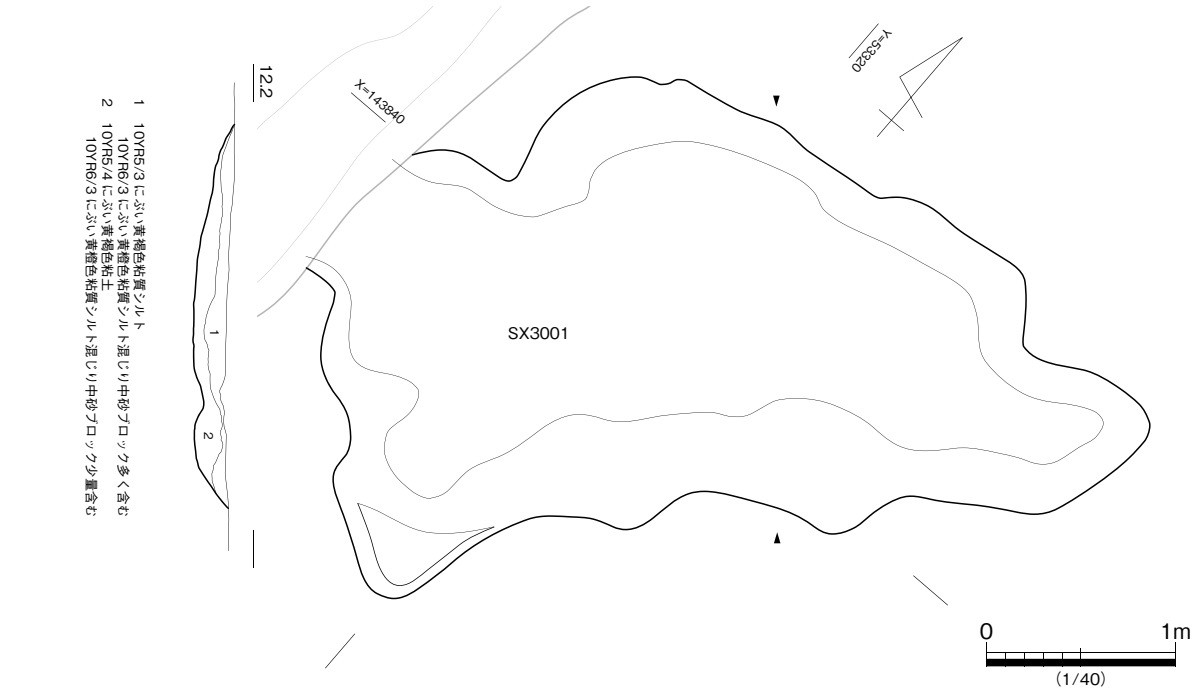
1　2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
　2.5Y7/2 灰黄色土ブロック多く含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト

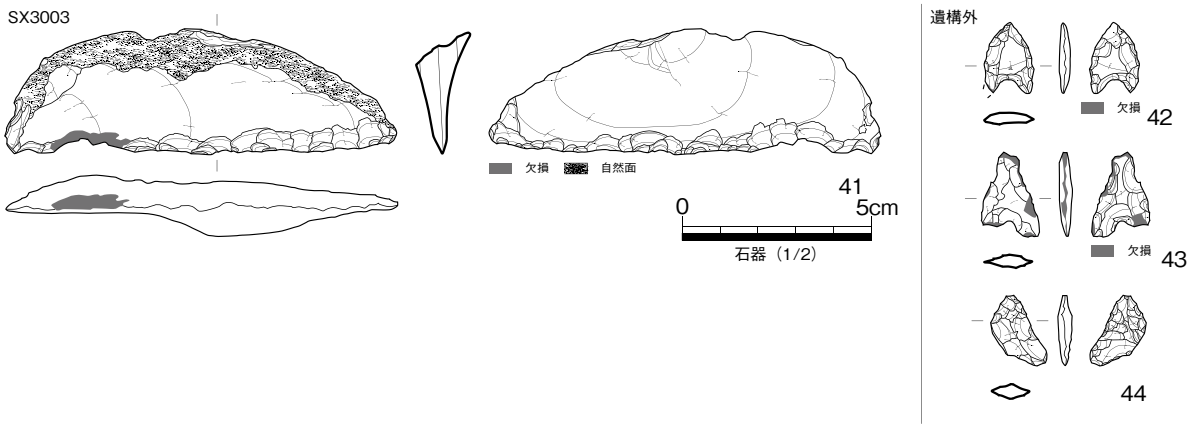
第 29 図　SP 平・断面図

SB1001、SA1001

１区西部で検出した、梁間（南北）4.4 ～ 6.0m、桁行（東西）11.4 ～ 11.6m の掘立柱建物である。SB1001 の東端を「コ」状に囲む柱列を、SB1001 と併存する柵 SA1001 とした。ただし、SA1001 とした遺構については SB1001 と重複する掘立柱建物の可能性も残る。主軸方向は周辺の条里地割の方向に合致する。いずれの柱穴も埋土は灰黄色系の粘土～粘質シルトが堆積している。遺物は出土していない。

時期　埋土から近世と考えられる。





第 30 図　SX3001 平・断面図・SX3003・遺構外出土遺物実測図

SB1003

1 区東部で検出した、梁間 3.8 ～ 4.1m、桁行 7.1 ～ 7.4m の掘立柱建物である。北辺及び東西辺は隅柱以外の柱穴を確認できなかったが、建物として復元した。主軸方向は周辺の条里地割の方向に合致する。柱穴の埋土は灰黄色粘質シルトである。遺物は出土していない。

時期　埋土から近世と考えられる。

溝

SD1003・1004・1005・1007・1009

いずれも 1 区で検出した溝で、主軸方向は周辺の条里地割の方向に合致する。SD1007・1009 は SB1001 の雨落ち溝だろう。

時期　いずれも埋土から近世とみられる。

土坑

SK1001・1002・1004・1006・2001・2002・2003・3004

1 ～ 3 区で検出した土坑で、いずれも埋土は灰黄色系シルト～粘質シルトである。

SK3004 出土遺物　**40** は青緑チャート製火打石である。複数の稜線に使用痕が残る。

時期　埋土からいずれも近世と考えられる。なお、香川県内における大田井産チャート製火打石は 18 世紀以降に流通範囲を拡大させる（蔵本 2019）。この点を重視すれば、SK3004 は 18 世紀以降とみることも可能である。

第 6 節　その他の遺物

41 は 3 区の SX3003 から出土したサヌカイト製スクレイパーである。上端部に残る自然面を打面とし、下端部には刃部調整が施される。**42** ～ **44** は遺構に伴わないサヌカイト製石鏃である。

参考文献
蔵本晋司 2019「香川県周辺地域における火花式発火法の導入と展開」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　上林遺跡』香川県教育委員会ほか ,pp.174-197
佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における土器編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊　空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会ほか ,pp.405-468
佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業 (1)　9 世紀後葉～ 11 世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 26 年度』,pp.41-72
乗松真也 2004「14 ～ 15 世紀の土師質土器杯編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊　浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか ,pp.303-308
乗松真也 2020「自然科学分析の目的と概要」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊　北野遺跡　鎌野西遺跡』香川県埋蔵文化財センター ,pp.106-108
森下英治 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 29 冊　龍川五条遺跡Ⅱ　飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか ,pp.284-325

第４章　自然科学分析

第１節　六条下所遺跡の花粉分析

森　将志（パレオ・ラボ）

1. はじめに

六条下所遺跡で検出された弥生時代前期の流路周辺の古植生を検討するために、花粉分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われている（第４章第２節参照）。

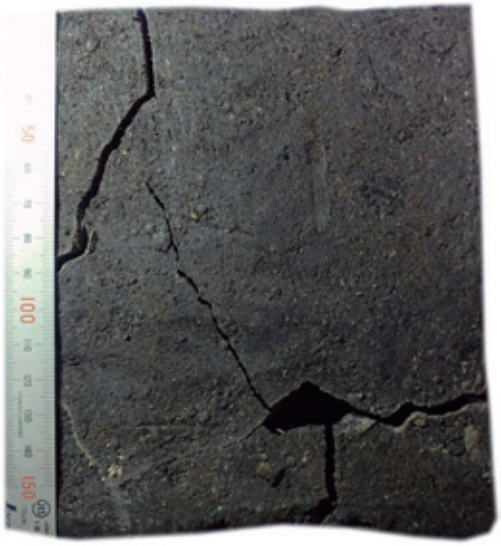
2. 試料と方法

分析試料は、SR1001 流路 A と SD1013 から採取された計２点である（第３表）。時期はいずれも弥生時代前期とされている。また、写真１に採取された堆積物試料の断面画像を示す。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料 No.	遺構	層位	時期	岩質
KRG-G0017	SR1001 流路 A	第 16 図　27 層	弥生時代前期	10YR2/2 黒褐色粘土 一部下位に 10YR3/2 黒褐色細砂
KRG-G0034	SD1013	第 17 図　11 層		10YR2/2 黒褐色粘土 10YR3/4 暗褐色細砂を多量に含む

第３表　分析試料一覧

・KRG-G0017



・KRG-G0034

写真１　分析試料の断面画像

試料（湿重量約３～４g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え、１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを

滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC.2979 ～ 2986）を作製し、写真を写真 2 に載せた。

3. 結果

今回の分析試料に含まれる花粉化石は、保存状態が良好ではなかった。そうしたなかで、2 試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 15、草本花粉 7、形態分類のシダ植物胞子 2 の、総計 24 である。これらの花粉・シダ植物胞子の一覧を第 4 表に、花粉分布図を第 31 図に示した。花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

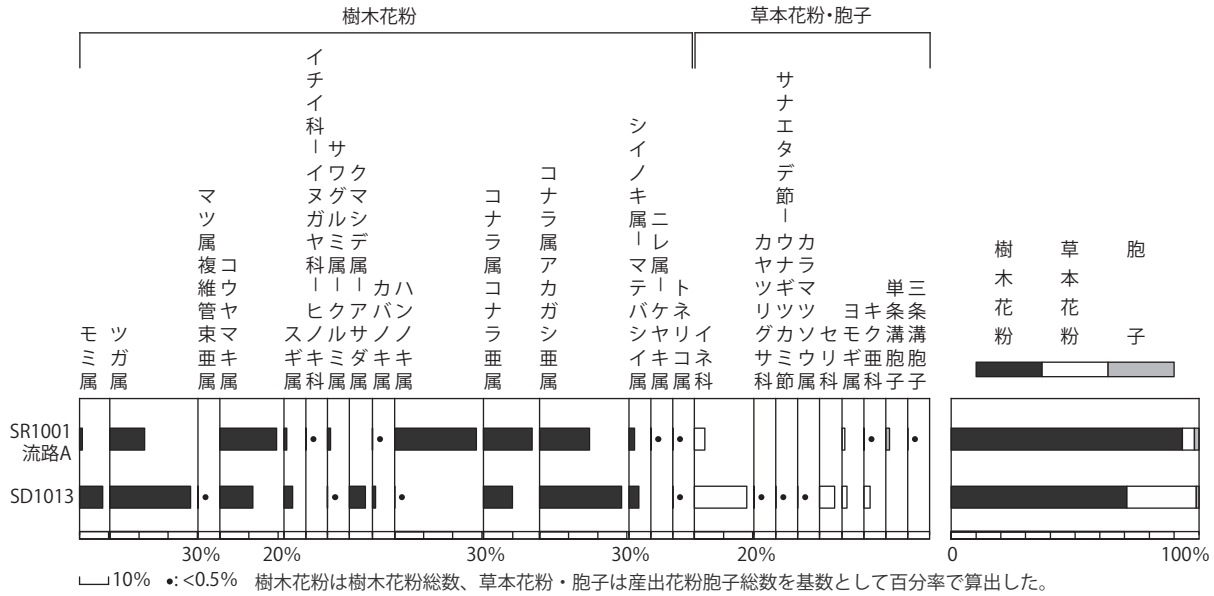
2 試料では、ツガ属やコウヤマキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属等の樹木花粉産出が目立つ。一方、SR1001 流路 A ではハンノキ属の産出が目立つが、SD1013 ではハンノキ属の産出が稀であるという相違点もある。

学名	和名	SR1001 流路 A	SD1003
樹木			
Abies	モミ属	2	16
Tsuga	ツガ属	25	56
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	-	1
Sciadopitys	コウヤマキ属	41	23
Cryptomeria	スギ属	2	6
Taxaceae − Cephalotaxaceae − Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	-
Pterocarya − Juglans	サワグルミ属－クルミ属	2	1
Carpinus − Ostrya	クマシデ属－アサダ属	-	11
Betula	カバノキ属	1	2
Alnus	ハンノキ属	59	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	35	20
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	36	57
Castanopsis − Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	4	7
Ulmus − Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	1	-
Fraxinus	トネリコ属	1	1
草本			
Gramineae	イネ科	8	51
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	1
Polygonum sect. *Persicaria − Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	1
Thalictrum	カラマツソウ属	-	1
Apiaceae	セリ科	-	15
Artemisia	ヨモギ属	2	5
Tubuliflorae	キク亜科	1	6
シダ植物			
monolete type spore	単条溝胞子	3	-
trilete type spore	三条溝胞子	1	-
Arboreal pollen	樹木花粉	210	202
Nonarboreal pollen	草本花粉	11	80
Spores	シダ植物胞子	4	-
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	225	282
Unknown pollen	不明花粉	-	3

第 4 表　産出花粉胞子一覧表

4. 考察

今回の分析試料に含まれる花粉化石は保存状態が良好ではなかった。大型植物遺体の残存状況も悪く、



第 31 図　六条下所遺跡における花粉分布図

植物化石の保存状態をふまえると、SR1001 流路 A や SD1013 の分析層準は、湿潤な環境ではなかった可能性がある。試料断面観察では、未分解の植物遺体片が含まれず、腐植を多く含む。植物化石の保存状態をふまえると、この腐植は、流路周辺の好気的な環境下で形成された表土からの再堆積に由来する可能性がある。

このように花粉の分解・消失等で本来の花粉組成が歪められている可能性があるものの、2 試料ともに十分な量の花粉化石が得られたため、得られた花粉化石群集から古植生を検討した。

照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属は、2 試料に共通して産出が目立ち、同じく照葉樹林要素のシイノキ属 - マテバシイ属も伴っている。遺跡周辺の氾濫原を含む丘陵地や台地等には、アカガシ亜属を主体とし、シイノキ属 - マテバシイ属を伴う照葉樹林が分布していた可能性がある。2 試料では、その他にもモミ属やツガ属、コウヤマキ属といった中間温帯林を構成する分類群や、コナラ属コナラ亜属の産出も目立つため、遺跡周辺の丘陵地や台地等にはモミ属やツガ属、コウヤマキ属等の針葉樹やコナラ属コナラ亜属といった落葉広葉樹からなる森林植生も広がっていたと思われる。

一方で、ハンノキ属は SR1001 流路 A と SD1013 で産出率が著しく異なる。ハンノキ属は河畔林要素として知られており、ハンノキ属の産出率の相違は、SR1001 流路 A 周辺と SD1013 周辺に成立した古植生の相違を反映している可能性がある。なお、草本花粉を見ると、ハンノキ属が多く産する SR1001 流路 A では産出割合が低く、ハンノキ属の産出が稀な SD1013 では産出割合が高い。ハンノキ属の河畔林が発達する SR1001 流路 A 周辺では草本類の分布がまばらで、ハンノキ属の河畔林が疎らな SD1013 周辺では、イネ科やセリ科、ヨモギ属、キク亜科等の草本類が分布を広げていた可能性がある。

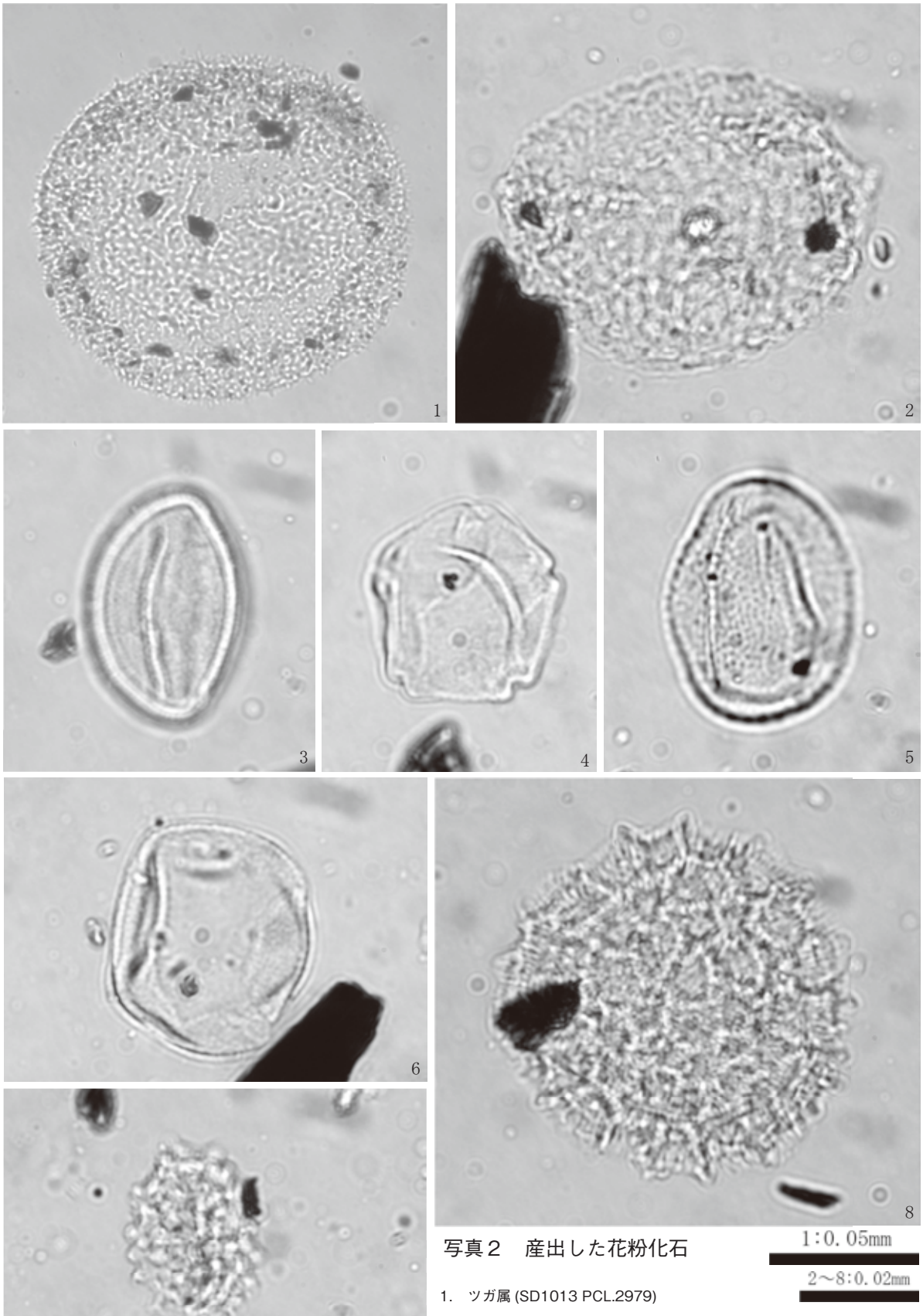


写真２　産出した花粉化石

1. ツガ属 (SD1013 PCL.2979)
2. コウヤマキ属 (SD1013 PCL.2980)
3. コナラ属アカガシ亜属 (SD1013 PCL.2981)
4. ハンノキ属 (SR1001 流路 A PCL.2982)
5. トネリコ属 (SR1001 流路 A PCL.2983)
6. イネ科 (SD1013 PCL.2984)
7. キク亜属 (SD1013 PCL.2985)
8. サナエダテ節 - ウナギツカミ節 (SD1013 PCL.2986)

第２節　六条下所遺跡から出土した大型植物遺体

バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

六条下所遺跡の弥生時代前期の流路埋土から得られた種実の同定結果を報告し、当時の利用植物について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析も行われている（第４章第１節参照）。

2. 試料と方法

試料は、弥生時代前期のSR1001 流路 A の 27 層と、SD1013 の 11 層から採取された土壌の 2 試料で、香川県埋蔵文化財センターにより採取された。

堆積物試料の水洗は、パレオ・ラボで行った。試料700cc について最小0.5mm 目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出、同定、計数は、肉眼及び実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。計数が困難な分類群は、記号（+）で示した。試料は、香川県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、検出された大型植物遺体はイネ籾殻のみであった。大型植物遺体以外には不明の昆虫遺体も得られたが、同定の対象外とした（第５表）。

以下に、得られた大型植物遺体について遺構別に記載する。

SR1001 流路 A：イネ籾殻破片 3 点が得られた。

SD1013：同定可能な種実は得られなかった。

次に、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名については、米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

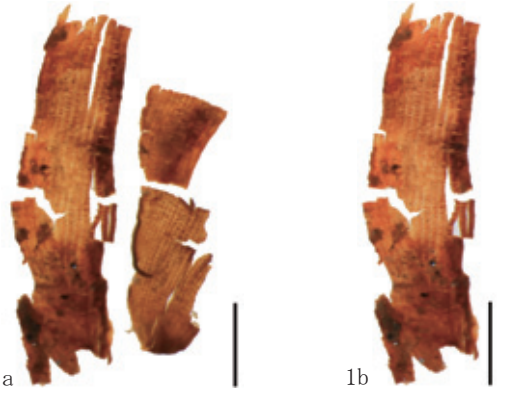
(1) イネ　Oryza sativa L.　籾殻　イネ科

黄褐色で、縦方向に明瞭な稜線があり、基部は残ってない。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。最大の破片で残存長 4.5mm、残存幅 1.2mm。

	注記番号	KRG-G0017	KRG-G0034
	区	1 区	
	遺構	SR1001 流路 A	SD1013
	層位	27 層	11 層
	時期	弥生時代前期	
分類群	水洗量（cc）	700	
イネ	籾殻	(3)	
不明	昆虫遺体	(+)	
			種実なし

+:1-9
括弧内は破片数

第５表　大型植物遺体



1a　1b
スケール　1:1mm

写真３　六条下所遺跡から出土した大型植物遺体

1. イネ籾殻 (SR1001 流路 A、26 層)

4. 考察

六条下所遺跡の弥生時代前期の遺構から出土した大型植物遺体を同定した結果、非常にわずかな量の種実が得られた。

SR1001 流路 A からは水田作物のイネ籾殻が得られたが、その由来は現状で特定できない。SD1013 には同定可能な植物遺体が残存しておらず、植物遺体が堆積していたとしても、分解、消失したと考えられる。大型植物遺体は好気的な環境下では化石として残りにくい。SD1013 の 11 層は、堆積中あるいは堆積後に乾燥した環境に晒される等、生の大型植物遺体が残存しにくい堆積環境であったと推定される。

引用文献

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

第３節　六条下所遺跡のテフラ分析

藤根　久・鈴木正章（パレオ・ラボ）

1. はじめに

遺構検出面の基盤層の堆積年代を明らかにする目的で、下層確認トレンチで採取された堆積層の８点について、鉱物組成と火山ガラスの形態分類及び火山ガラスの屈折率測定を行った。

2. 試料と方法

分析試料は、SR1001 下層確認トレンチから採取された８点である（第６表）（第 16 図参照）。第 32・33 図に、採取された分析試料の断面斜面、採取位置を示した断面図、柱状図を示す。

分析 No.	注記番号	採取位置	層位	特徴
1	KRG-G0039	下層確認トレンチ	1 層	10YR6/4 にぶい黄橙色粘土
2	KRG-G0040		3 層	5Y6/4 オリーブ黄色粘土
3	KRG-G0041		4 層	2.5Y8/6 黄色粘土混じり細～中砂　小粒の Mn 含む
4	KRG-G0042		5 層	10YR7/8 黄橙色粘土　細砂混じる
5	KRG-G0043		6 層	10YR6/8 明黄褐色粘土混じり細～中砂　Fe の雲状斑紋
6	KRG-G0044		12 層	7.5Y7/2 灰白色粘土　細砂混じる
7	KRG-G0045		13 層	5Y5/3 灰オリーブ色細砂　シルト多く混じる Fe の雲状斑紋
8	KRG-G0046		14 層	5Y4/1 灰色極細砂　粘土多く混じる

第６表　テフラ分析試料の詳細

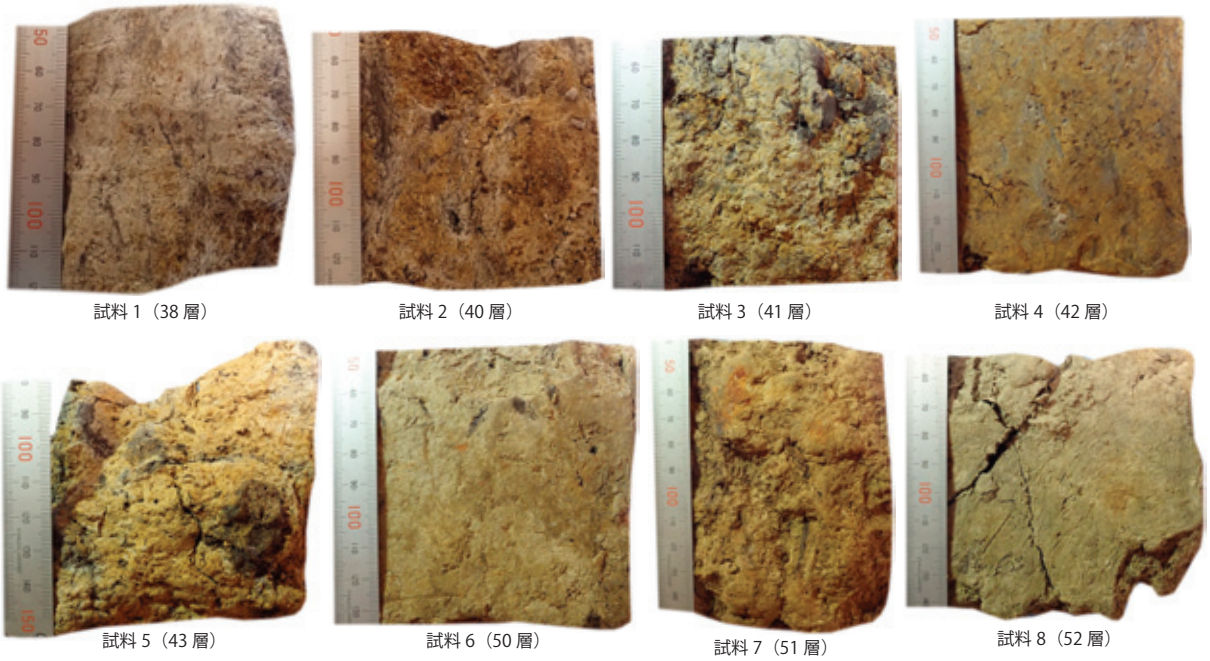
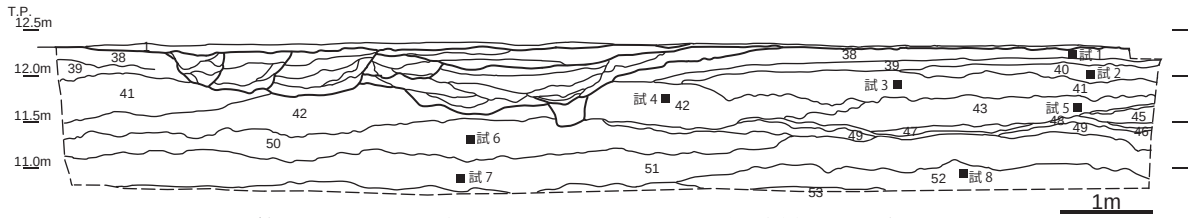
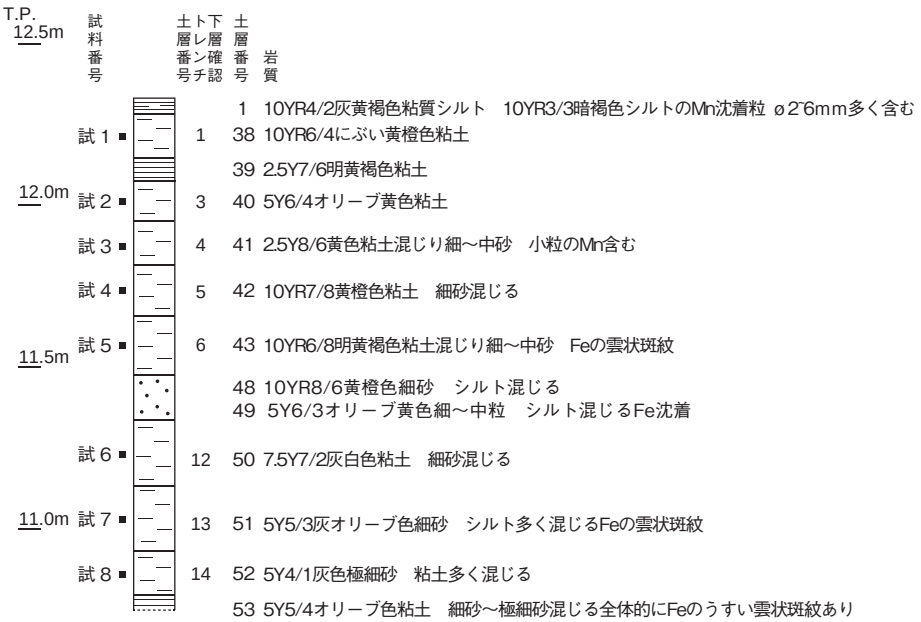


写真４　火山灰分析試料の断面写真



第 32 図　下層確認トレンチのテフラ分析試料の採取位置



第 33 図　テフラ分析試料の採取層準の柱状図

試料は、以下の方法で処理した。

湿潤重量 25g 程度を秤量した後、1 φ（0.5mm）、2 φ（0.25mm）、3 φ（0.125mm）、4 φ（0.063mm）の 4 枚の篩を重ねて湿式篩分けをした。この試料とは別に、10g 程度を定温乾燥器で 105 度、24 時間乾燥し、含水率を計算した。4 φ篩残渣について、重液（テトラブロモエタン、比重 2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物は、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井（2003）の分類基準に従って、バブル型平板状（b1）、バブル型Ｙ字状（b2）、軽石型繊維状（p1）、軽石型スポンジ状（p2）、急冷破砕型フレーク状（c1）、急冷破砕型塊状（c2）に分類した。重鉱物は、封入剤レークサイドセメントを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石（Opx）、単斜輝石（Cpx）、角閃石（Ho）、ジルコン（Zr）、磁鉄鉱（Mg）等を同定・計数した。4 φ軽鉱物中の軽石型火山ガラスは、横山ほか（1986）に従い、温度変化型屈折率測定装置（株式会社古澤地質製、MAIOT）を用いて屈折率測定を行った。なお、火山ガラスが少なかったため、10 粒の屈折率測定を行った。

3. 結果

以下に、鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率測定の結果について述べる。

分析試料は、いずれもシルト～粘土からなる。含水率は、7.03 ～ 18.60% であった。篩分けした結果、4 φ篩残渣が最も多い。4 φ以上の含砂率は、14.19 ～ 52.70% であり、分析 No.5（6 層）が最も高く、分析 No.6（12 層）が最も低い。4 φ粒子の重液分離では、いずれの試料も軽鉱物の割合が非常に高い（第 7 表）。

軽鉱物では、複合した鉱物からなる不明粒子（Opq）が多く、石英（Qu）や長石（Pl）が検出された。火山ガラスは、全体的に少なく、分析 No.1 や分析 No.2 あるいは分析 No.4 において主にバブル型ガラス（b1，b2）が検出された（第 8 表、第 34 図）。これら火山ガラスには、淡褐色からなるガラスも含

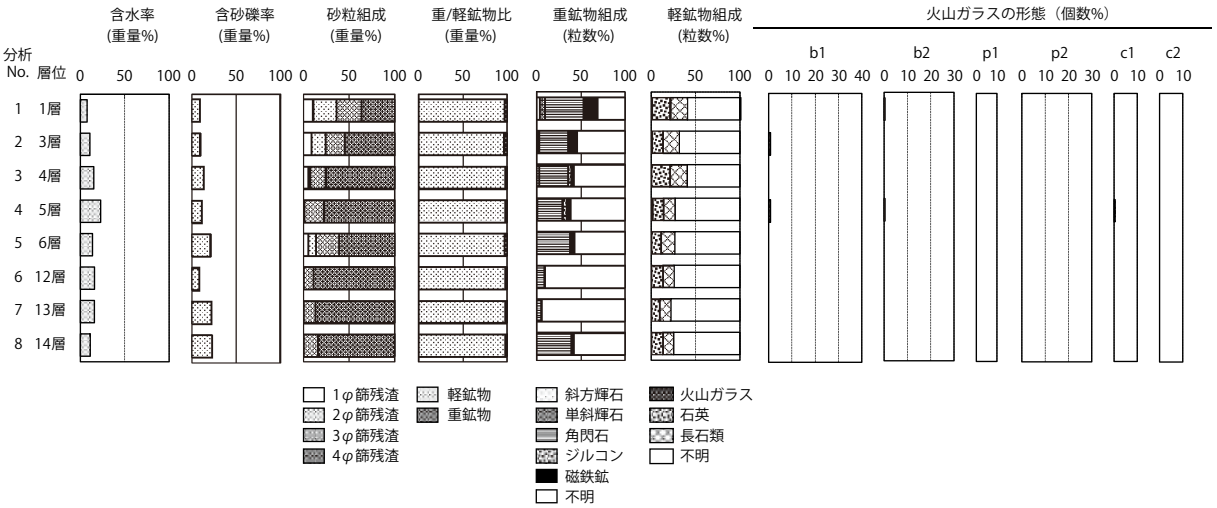
分析 No.	処理湿潤重量（g）	処理乾燥重量（g）	含水率（%）	砂粒分の粒度組成（重量 g）				4 φ以上含有率（%）	軽・重鉱物組成（重量 g）	
				1 φ	2 φ	3 φ	4 φ		軽鉱物	重鉱物
1	14.51	13.49	7.03	0.28	0.67	0.72	0.94	19.35	0.34	0.01
2	13.41	12.11	9.69	0.22	0.39	0.53	1.37	20.73	0.29	0.01
3	16.00	13.90	13.13	0.19	0.09	0.62	2.74	26.19	0.41	0.01
4	15.54	12.65	18.60	0.00	0.05	0.90	3.25	33.20	0.47	0.01
5	14.32	12.60	12.01	0.35	0.56	1.69	4.04	52.70	0.34	0.01
6	18.14	15.65	13.73	0.00	0.01	0.23	1.98	14.19	0.40	0.01
7	23.38	20.19	13.64	0.01	0.01	0.73	4.91	28.03	0.51	0.01
8	20.91	18.82	10.00	0.00	0.01	0.91	4.93	31.08	0.45	0.01

第 7 表　テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

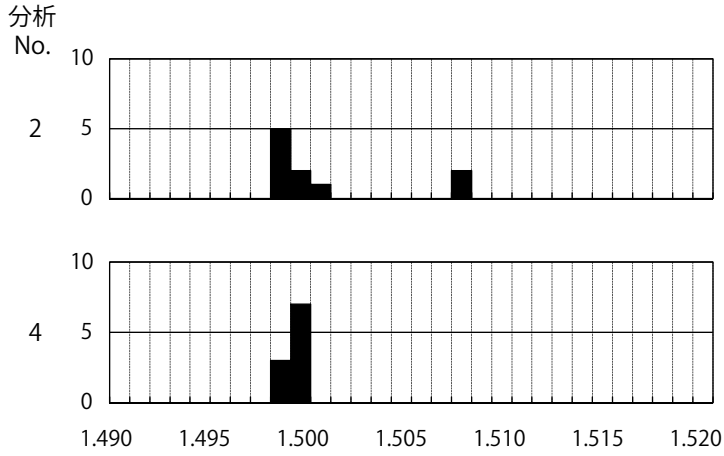
分析No.	石英(Qu)	長石(Pl)	不明(Opq)	火山ガラス						ガラス合計	備考	軽鉱物合計	重鉱物						重鉱物の合計
				バブル（泡）型		軽石型		急冷破砕型					斜方輝石(Opx)	単斜輝石(Cpx)	角閃石(Ho)	ジルコン(Zr)	磁鉄鉱(Mg)	不明(Opq)	
				平板状(b1)	Y字状(b2)	繊維状(p1)	スポンジ状(p2)	フレーク状(c1)	塊状(c2)										
1	52	49	148		1					1	褐色・透明ガラス	250	10	14	108	4	35	79	250
2	31	46	171	2						2	褐色・透明ガラス	250	5	3	80	2	24	136	250
3	52	49	149							0		250		7	82	9	7	145	250
4	30	33	183	2	1			1		4	褐色・透明ガラス	250		3	71	12	11	154	250
5	27	39	184							0	透明ガラス	250		1	94	5	7	143	250
6	32	32	186							0	透明ガラス	250		1	21	1		227	250
7	24	31	195							0		250			14	1		235	250
8	32	31	187							0	透明ガラス	250			97	3	4	146	250

備考は、計数以外の火山ガラスの特徴を示す。

第８表　蒜残渣中の鉱物組成



第 34 図　テフラ試料の含水率・含砂率・鉱物組成の分布図



範囲(range)	平均(mean)	個数
1.4984 - 1.5080	1.5008	10
1.4986 - 1.4998	1.4992	10

第 35 図　火山ガラスの屈折率測定結果

まれていた。重鉱物は、全体的に角閃石が多く含まれ、ジルコンも含まれていた（第８表、第 34 図）。

分析 No.2 の火山ガラスの屈折率測定では、範囲 1.4984-1.5080（平均 1.5008）であった。また、分析 No.4 の火山ガラスの屈折率測定では、範囲 1.4986-1.4998（平均 1.4992）であった（第 35 図）。

4. 考察

下層確認トレンチの１層、3 層、4 層、5 層、6 層、12 層、13 層、14 層の８試料について、テフラ分析を行っ

た。その結果、全体的に火山ガラスは少なく、特定のテフラ層は検出されなかった。なお、分析 No.2 及び分析 No.4 の試料中の火山ガラスの屈折率測定では、主に低い屈折率を示す火山ガラス（1.499-1.500）が検出された。これら火山ガラスは、主にバブル型火山ガラスであることから、以下に示す姶良 Tn テフラ（AT）起源の火山ガラスと考えられる。

姶良 Tn テフラ（AT）は、南九州姶良カルデラを噴出源として噴出した降下軽石（pfa）、巨大火砕流堆積物（pfl）とその降下火山灰（afa）からなる。このテフラは、日本列島をすっぽりおおい、日本海全域、朝鮮半島、東シナ海、太平洋四国海盆を広くおおっている。分布は 1,200km 以上に及ぶ。主な鉱物は、斜方輝石（Opx）と単斜輝石（Cpx）、少量の石英（Qt）からなる。火山ガラスの屈折率が 1.498-1.501、斜方輝石（opx）の屈折率が 1.728-1.734 である（町田・新井，2003）。

なお、水月湖クロノロジーに基づいた年代は、30,009 ± 189(2 σ) SG062012 yr BP である（Smith et al.,2013）。

以上、今回の分析では、特定のテフラ層が検出されず、遺構検出面の基盤層の堆積年代に関しての詳細な情報が得られなかった。ただし、AT が混在する結果から、今回の分析層準については、約 3.0 万年以降に堆積したと推定される。

引用文献

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．336p，東京大学出版会．

Smith V.C., Staff R.A., Blockley S.P.E., Bronk Ramsey C., Nakagawa T., Mark D.F., Takemura K., Danhara T., Suigetsu 2006 Project Members（2013）Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews, 67, 121-137.

横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定．第四紀研究，25，21-30.

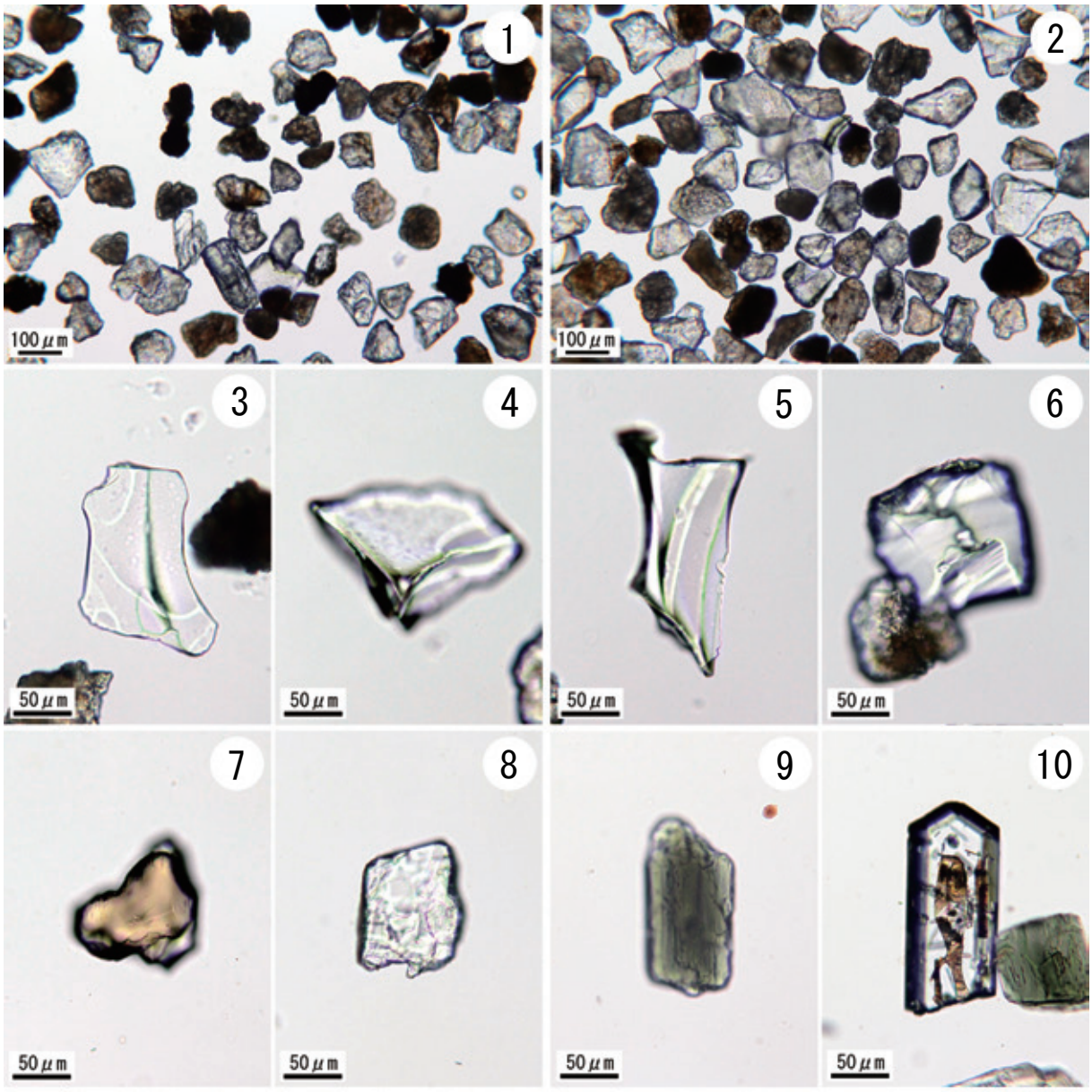


写真５　テフラ試料中の粒子の顕微鏡写真

1. 4 φ篩残渣中の軽鉱物（分析 No. 2）　2. 4 φ篩残渣中の軽鉱物（分析 No. 4）

3. バブル型平板状ガラス（分析 No. 1）　4. バブル型Ｙ字状ガラス（分析 No. 4）

5. バブル型Ｙ字状ガラス（分析 No. 1）　6. 急冷破砕型フレーク状ガラス（分析 No. 4）

7. 斜方輝石（分析 No. 1）　8. 単斜輝石（分析 No. 2）

9. 角閃石（分析 No. 1）　10. ジルコン（分析 No. 1）

第 5 章　総括

六条下所遺跡の発掘調査では、弥生時代前期以前から近世にかけての遺構を確認した。以下、時期ごとに遺構の変遷を述べる。

弥生時代前期以前

溝 SR1001 流路 A ～ D の埋没時期は弥生時代前期後半と考えているが、縄文時代晩期にも機能していた可能性もある。また、SR1001 流路 A ～ D の下面で地割れ痕が検出された。

弥生時代前期後半

SR1001 流路 A ～ D、SR1001、SD1013・1015 の流路は近い位置にあり、SD1013・1015 の出土遺物から、最終埋没は弥生時代前期後半とみられる。今回の調査地の北に隣接する高松市教育委員会調査地の SR01、西に近接する空港跡地遺跡 I 地区の SRi02 でも弥生時代前期後半の遺物が出土しており、位置や流下方向も考慮していずれも SR1001 等と同一の溝と考えられる（第 37 図、註 1）。また、空港跡地遺跡（上青木地区）の NR01 についても、遺物は出土していないが連続する溝と推測される。これらの溝群の総延長 300m 以上となる。SR1001 等は水田への導水路と考えられるが、両岸に近接する水田は未確認で、周辺が高燥していた可能性であった土地環境（第 4 章）を考慮すれば、導水の目的地は下流の沖積平野とみられる。さらに、取水先はより上流の流路や谷に求められ、導水路の敷設距離はかなり長くなる。

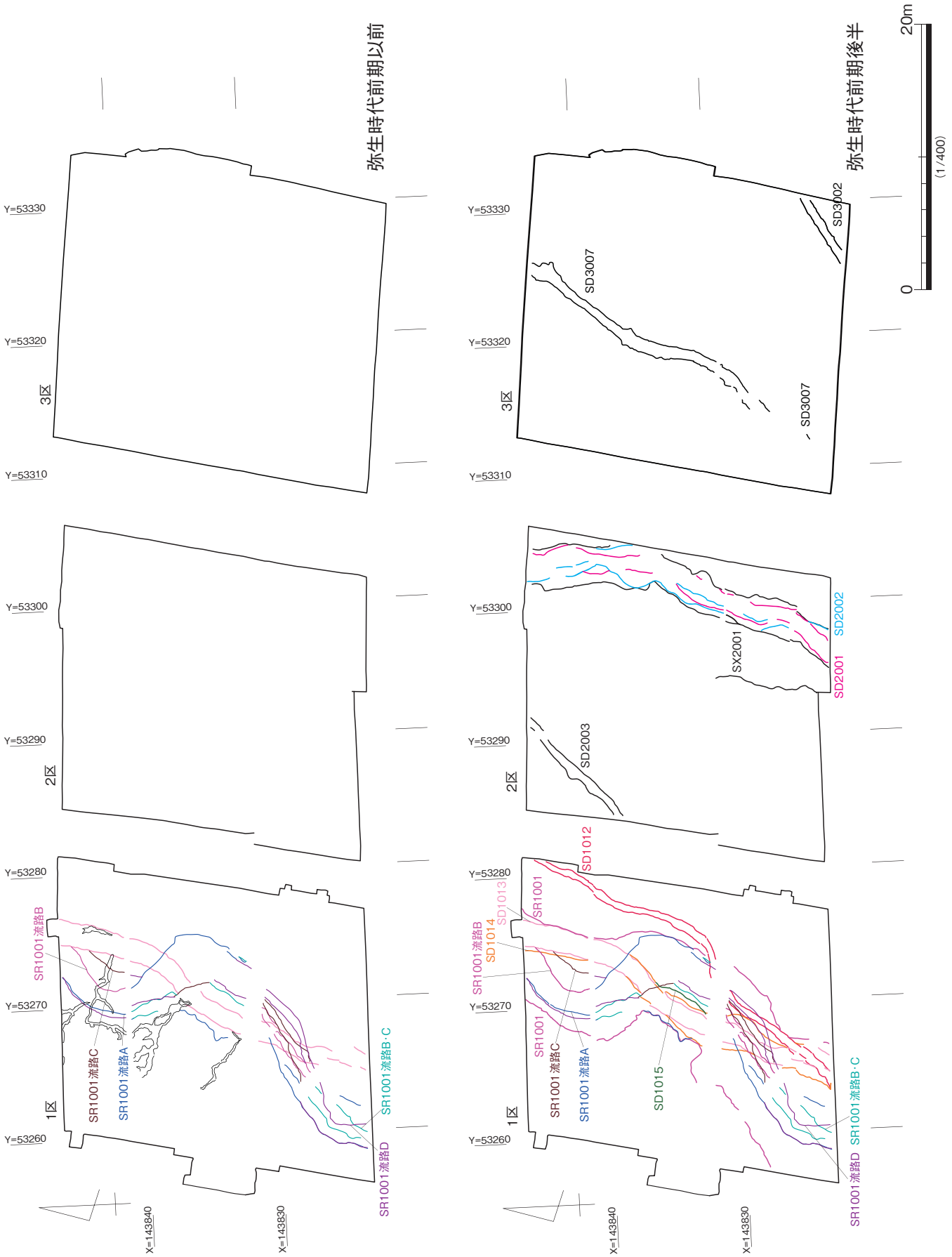
SR1001 等が埋没した後に形成される SD1012 も、埋土が SR1001 等に似るため、弥生時代前期後半に位置付けられる。高松市教育委員会調査地でも幅が広い溝の埋没後に掘削される溝があり、空港跡地遺跡にも SR1001 等と近い時期と考えられている SDi19 が確認されている。これらの溝は SD1012 と連続すると考えられる。

同じく南西 - 北東方向の溝 SD2003 も遺物は出土していないが、SR1001 等、または SD1012 から分岐する溝と考えて同時期とした。

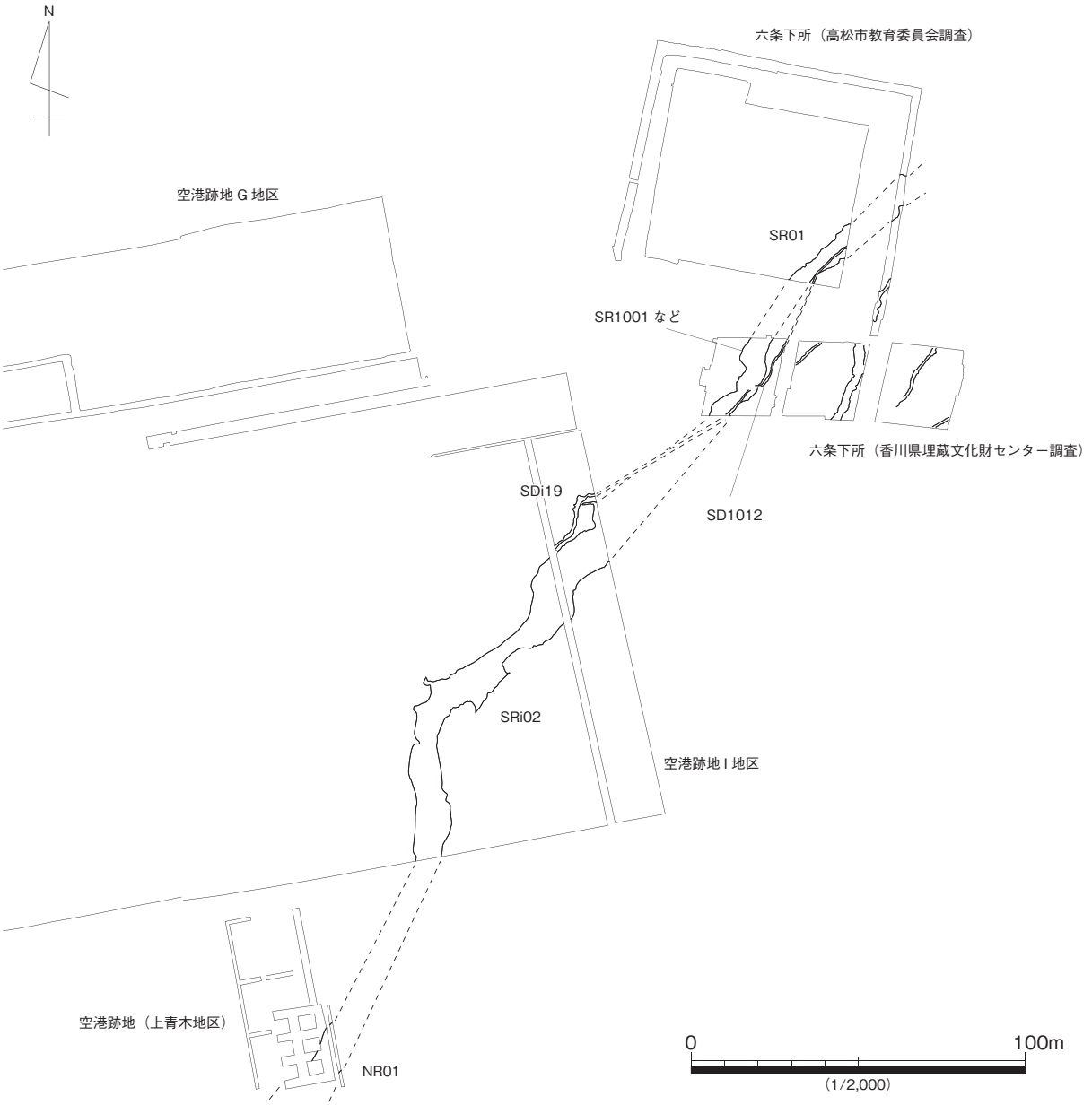
SD2001・2002 は条里方向に合致しないため、7 世紀以前の溝であることはほぼ確実である。今回の調査地では弥生時代中期～ 7 世紀の遺物が出土していないため、SD2001・2002 も弥生時代前期後半の溝と考えた。ここから派生する可能性のある SD3002・3007 も同時期とみたい。ただし、空港跡地遺跡 I 地区では SRi02 埋没後に弥生時代後期後半の溝 SRi01 が掘削され、空港跡地遺跡（上青木地区）でも NR01 埋没後に古墳時代前期の溝 SD01・03 が設けられる。このため、六条下所遺跡 SD2001・2002・3002・3007 は、空港跡地遺跡の弥生時代後期後半から古墳時代前期の溝に連続する可能性も否定はできない。

古代末～中世

3 区西端部の溝 SD3001・3003・3004・3005・3006・3009 の時期は、出土遺物から 12 世紀前葉～ 14 後葉とみられる。周辺の条里地割から条里を復元すると、これらの溝群は坪界に合致する。掘削が何度も行われているのは、坪界を示す溝であったことも想定される。



第 36 図　時期別遺構配置図（弥生時代前期以前～弥生時代前期後半）



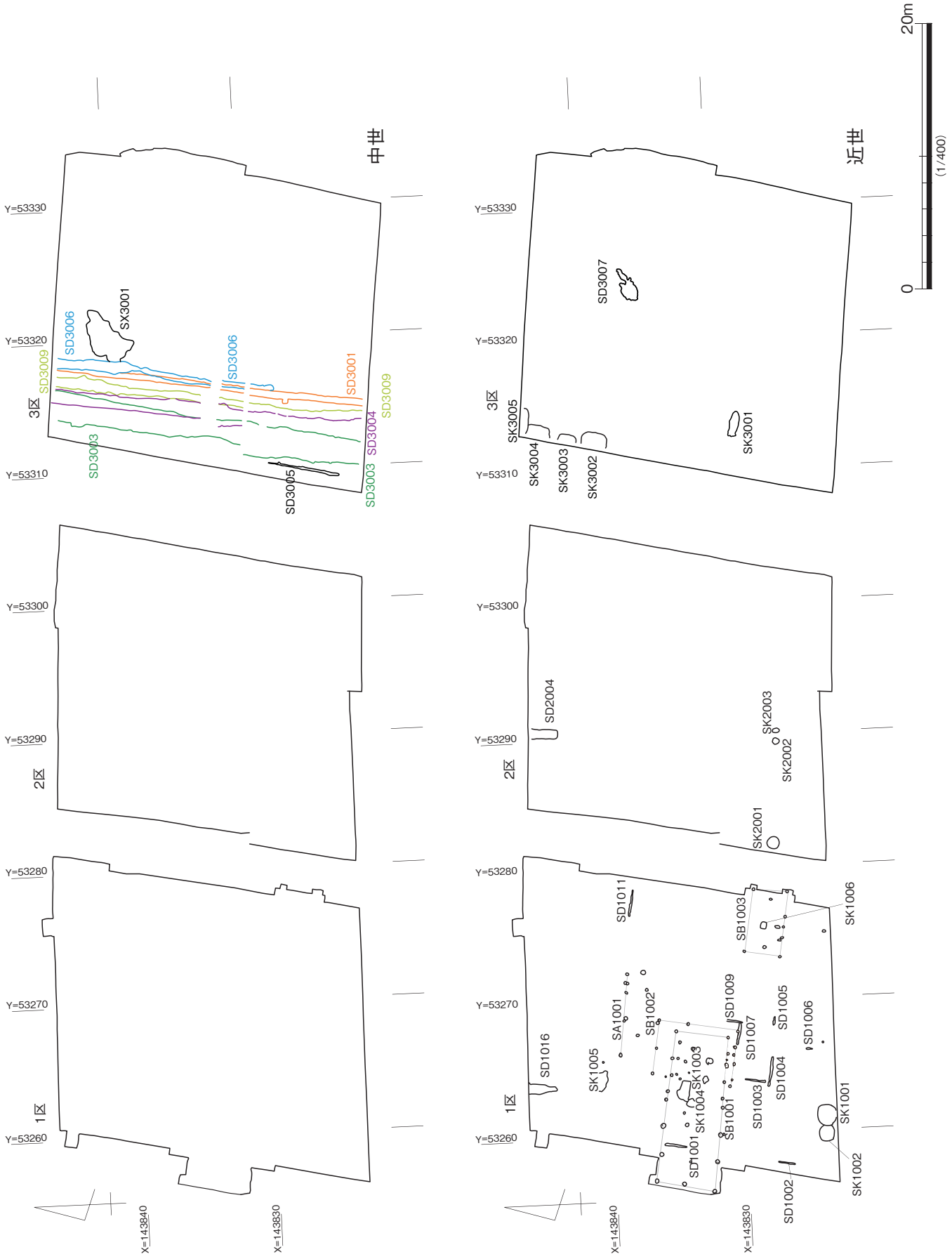
第 37 図　弥生時代前期の自然流路と溝

近世

埋土から近世と判断した遺構は 1 区に集中する。掘立柱建物 SB1001 は、一部に区画 SA1001 を伴う。西に近接する空港跡地遺跡 I 地区では､17 世紀以降の掘立柱建物が緩くまとまるように検出されている。空港跡地遺跡の建物群が同時期にどれだけ併存していたかは不明だが、複数の建物が緩くまとまりながら点在していたとみられる。六条下所遺跡の建物群も空港跡地遺跡 I 地区の状況と類似する。

註

1　高松市教育委員会調査地の状況については、香川将慶氏の教示を得た。



第 38 図　時期別遺構配置図（中世～近世）

発掘調査報告書
太田原高州遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2014『県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　太田原高州遺跡 1』香川県教育委員会
上西原遺跡:高松市教育委員会編 2000『上西原遺跡　附汲仏遺跡　太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊』
鴨部・川田遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1997『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　鴨部・川田遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2000『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第９冊　鴨部・川田遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか
北口遺跡：高松市教育委員会編 2017『大野地区統合保育所用地埋蔵文化財発掘調査報告書　北口遺跡』高松市教育委員会
北野遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2020『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　北野遺跡　鎌野西遺跡』香川県教育委員会ほか
鬼無藤井遺跡：高松市教育委員会編 2001『鬼無藤井遺跡　高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会
空港跡地遺跡：空港跡地遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財センター編 1998『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』香川県教育委員会ほか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2002『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　空港跡地遺跡Ⅴ』香川県教育委員会ほか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2004『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第８冊　空港跡地遺跡Ⅷ』香川県教育委員会ほか／香川県埋蔵文化財センター編 2007『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第９冊　空港跡地遺跡Ⅸ』香川県教育委員会ほか／高松市教育委員会編 2013 四国細胞病理センター新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　空港跡地遺跡（上青木地区）』高松市教育委員会
高野丸山古墳：香川考古学研究会編 1994『香川考古』3, 香川考古刊行会
汲仏遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2018『香川県警察本部機動隊舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　汲仏遺跡』香川県教育委員会
さこ・長池遺跡：高松市教育委員会編 1993『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊 さこ・長池遺跡』高松市教育委員会
さこ・長池Ⅱ遺跡：高松市教育委員会編 1994『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　さこ・長池Ⅱ遺跡』高松教育委員会
多肥北原遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2012『県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥北原遺跡』香川県教育委員会
多肥北原西遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2015『県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥北原西遺跡』香川県教育委員会
多肥廃寺：多肥郷土史編集委員会編 1981『多肥郷土史』／丹羽祐一・藤井雄三 1988『高松の古代文化』高松市図書館
多肥松林遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　多肥松林遺跡』香川県教育委員会ほか
多肥宮尻遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2018『県道太田上町志度線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥宮尻遺跡』香川県教育委員会
天満・宮西遺跡：高松市教育委員会編 2002『天満・宮西遺跡～集落・水田編～　太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊』高松市教育委員会
林・坊城遺跡：財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　林・坊城遺跡』香川県教育委員会ほか／財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編 2004『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 53 冊　中森遺跡　林・坊城遺跡Ⅱ　東山崎・水田遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか
三谷石舟古墳：香川県教育委員会編 1983『新編香川叢書』新編香川叢書刊行企画委員会
三谷中原遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2019『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　三谷中原遺跡』香川県教育委員会ほか
横内東遺跡：高松市教育委員会編 2012『高松市埋蔵文化財調査報告第 144 集　三谷コミュニティセンター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　横内東遺跡』高松市教育委員会
六条上青木遺跡：高松市教育委員会編 2016『高松市埋蔵文化財調査報告書第 174 集　保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　六条上青木遺跡』高松市教育委員会ほか
六条下所遺跡：高松市教育委員会編 2014『高松市埋蔵文化財発掘調査報告第 152 集　高松市内遺跡発掘調査概報―平成 25 年度国庫補助事業―』高松市教育委員会

第９表　六条下所遺跡出土土器観察表

報文番号	調査区	面	遺構名	種類	器種	調整		色調		胎土					法量（ｃｍ）				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径	器高	底径	その他		
3	１区		SD1014	弥生土器	甕	（不明）	（不明）	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗・多	－	－	－	－	－	－	(9.2)	－	1/8	
4	１区		SD1014	弥生土器	壺	ヘラミガキ	（不明）	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗・多	中・多	細・少	細・並	－	－	－	11.0	－	3/8	
6	１区北側拡張		SD1013	弥生土器	壺	（不明）	（不明）	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	粗・多	粗・少	－	－	－	－	－	9.5	－	8/8	
7	１区北側拡張		SD1013	弥生土器	壺	ハケ	指オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗・多	－	－	細・少	－	－	－	7.6	－	7/8	
8	１区		SD1013	弥生土器	甕	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄	粗・多	－	－	－	－	－	－	ー	－	1/8 未満	
9	１区		SD1013	弥生土器	甕	（不明）	（不明）	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	粗・多	－	－	中・少	－	－	－	ー	－	1/8 未満	
10	１区		SD1013	弥生土器	甕	（不明）	（不明）	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	粗・多	－	－	－	－	－	－	7.6	－	3/8	
11	１区		SD1013	弥生土器	壺	ヘラミガキ	ハケ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	粗・多	－	－	－	－	－	－	10.0	－	1/8	
23	１区	２面	SR1001	縄文土器	深鉢	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	中・多	－	－	細・並	－	－	－	ー	－	破片	
26	３区		SD3001	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	細・並	－	－	－	－	－	－	9.6	－	1/8 未満	
27	３区		SD3003	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/6 明黄褐	中・並	細・少	－	中・並	－	－	－	6.1	－	5/8	
28	３区		SD3003	土師質土器	杯	回転ナデ→回転糸切り	回転ナデ	2.5Y6/4 にぶい黄	7.5YR7/6 橙	中・少	中・少	細・並	－	－	－	－	(7.0)	－	1/8	
29	３区		SD3003	須恵器	椀	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	細・少	－	－	－	－	－	－	2.2	－	6/8	
30	３区		SD3003	土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	細・少	－	－	－	－	－	－	4.4	－	1/8	
31	３区		SD3003	黒色土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/4 淡黄	N4/ 灰	中・並	－	－	細・少	－	－	－	7.1	－	1/8	
32	３区		SD3003	土師質土器	足釜	回転ナデ	ハケ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	細・少	－	細・並	－	－	－	ー	－	1/8 未満	
33	３区		SD3003	土師質土器	足釜	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	細・並	細・少	－	中・少	－	(18.5)	－	ー	－	1/8	
34	３区		SD3003	土師質土器	甕	回転ナデ	回転ナデ→ハケ	7.5YR7/2 明褐灰	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	中・少	－	－	－	－	－	(11.2)	－	3/8	
35	３区		SD3004	土師質土器	杯	回転ナデ→回転ヘラ切り	回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・少	中・少	－	－	－	10.5	2.3	6.7	－	8/8	
36	３区		SD3004	土師質土器	杯	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	中・少	細・並	－	－	－	－	－	7.6	－	1/8	
37	３区		SD3004	黒色土器	椀	回転ナデ	ヘラミガキ	2.5Y8/3 淡黄	10Y3/1 オリーブ黒	中・少	細・少	細・並	細・多	－	－	－	(6.4)	－	2/8	
38	３区		SD3003 SD3004	須恵器	鉢	回転ナデ→回転ヘラケズリ	回転ナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	中・少	－	－	－	－	25.5	10.0	11.1	－	8/8	
45	３区		SD3003	焼成土塊？				10YR8/3 浅黄橙	2.5Y7/1 灰白	粗・多	中・並	－	－	－						

第 10 表　六条下所遺跡出土石器観察表

報文番号	調査区	面	遺構名	石材	器種	長さ（ｃｍ）	幅（ｃｍ）	厚　（ｃｍ）	重量（ｇ）	備考
1	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	2.65	1.6	0.4	1.20	
2	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	現存長 1.85	現存幅 1.25	0.25	0.44	
5	1 区		SD1014	サヌカイト	石鏃	2.1	2.0	0.3	0.91	
12	1 区		SD1012	サヌカイト	石鏃	1.8	1.65	0.2	0.57	
13	1 区		SD1012	サヌカイト	石鏃	2.4	1.35	0.4	0.94	
14	1 区		SD1012	サヌカイト	石鏃	2.3	1.6	0.3	1.10	
15	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	1.4	1.2	0.2	0.21	
16	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	2.5	1.3	0.2	0.76	
17	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	2.9	1.75	0.35	1.50	
18	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	2.95	1.2	0.35	1.02	
19	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	1.8	1.15	0.3	0.60	
20	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	1.9	1.8	0.35	1.00	
21	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	2.6	1.3	0.4	0.82	
22	1 区		SR1001	サヌカイト	石鏃	5.1	1.9	0.4	3.08	
24	2 区		SD2001	サヌカイト	石鏃	3.0	1.45	0.3	1.10	
25	2 区		SD2001	サヌカイト	石鏃	1.8	1.4	0.3	0.57	
39	3 区		SD3004	サヌカイト	スクレイパー	6.5	4.2	1.0	23.00	
40	3 区		SK3004	チャート	火打石	1.9	1.3	0.9	2.34	
41	3 区		SX3003	サヌカイト	スクレイパー	10.4	3.35	1.6	31.34	
42	1 区		遺構外	サヌカイト	石鏃	1.85	1.3	0.3	0.59	
43	1 区		遺構外	サヌカイト	石鏃	2.2	1.6	0.35	1.03	
44	3 区		遺構外	サヌカイト	石鏃	1.9	1.45	0.4	0.67	

写真６
１区
遺構検出状況
（西から）

写真 ７
１区
全景
（北東から）

写真８
１区
全景
（東から）

写真 9
1 区
SB1001
（南から）

写真 10
1 区
SB1001-SP1064 断面
（東から）

写真 11
1 区
SB1001-SP1065 断面
（東から）

写真 12
1 区
SR1001
流路 A-D 検出状況
（北西から）

写真 13
1 区
SD1012 断面
（南から）

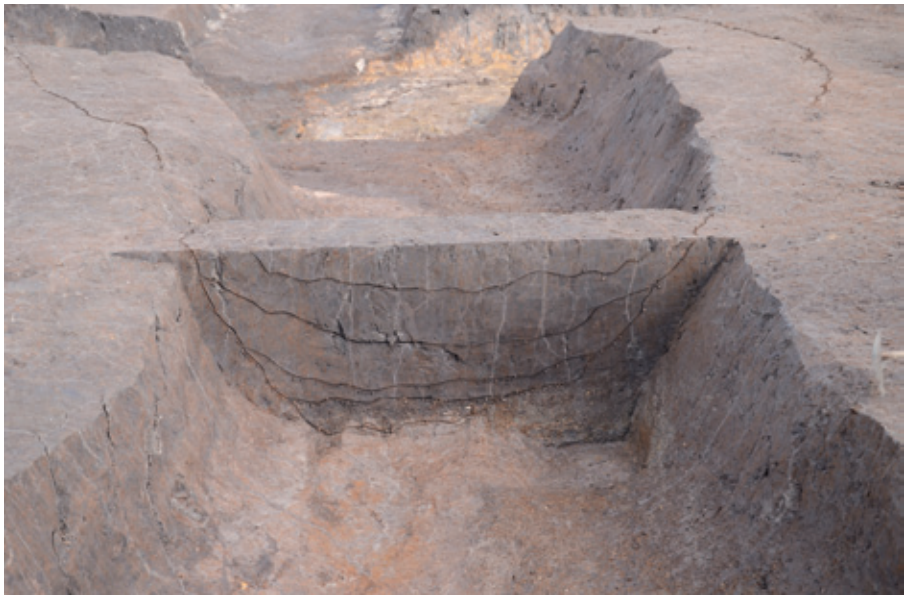


写真 14
1 区
SD1013 断面
（南から）

写真 15
1 区
SD1013
弥生土器出土状況
（南から）

写真 16
1 区
SD1014
（南から）

写真 17
1 区
調査状況
（東から）

写真 18
1 区
SR1001
流路 A·D 調査状況
（南から）

写真 19
1 区
SR1001 石鏃出土状況

写真 20
1 区 SR1001 断面
（南東から）

写真 21
1 区
SR1001 断面
（南東から）

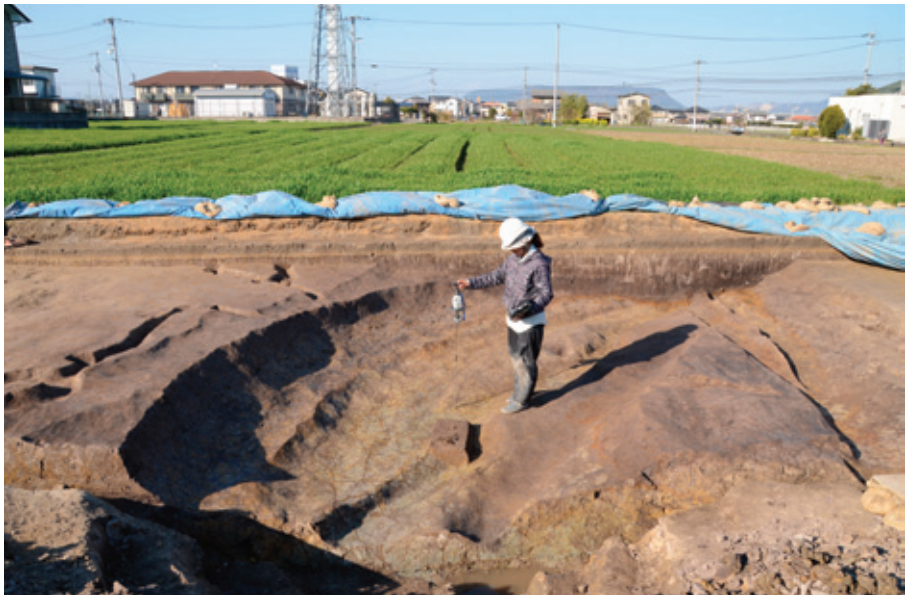


写真 22
1 区
SR1001 流路 A･B
（南から）

写真 23
1 区
SR1001 流路 A-D
（北から）

写真 24
1 区
地割れ状遺構検出状況
（東から）

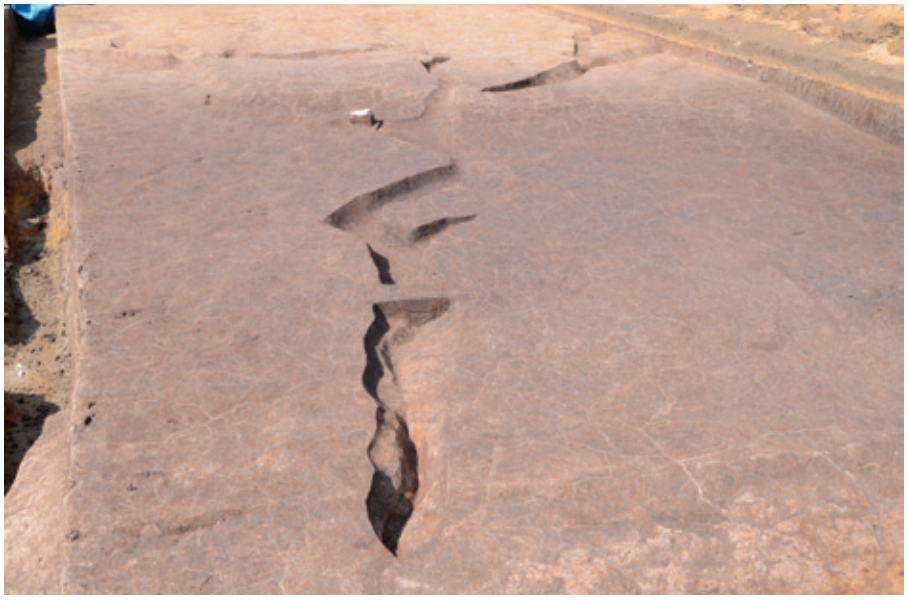


写真 25
1 区
地割れ状遺構
（東から）

写真 26
1 区
SR1001 下層断面
（東から）

写真 27
1 区
基盤層剥片出土状況
（南から）

写真 28
2 区
全景
（南から）

写真 29
2 区
北壁断面
（南東から）

写真 30
2 区
SK2002·SK2003 断面
（南から）

写真 31
2 区
SD2001·SD2002
（南から）

写真 32
2 区
SD2001·SD2002 断面
（北から）

写真 33
3 区
全景
（南から）

写真 34
3 区
SD3004 断面
（南から）

写真 35
3 区
SD3004
土師質土器出土状況
（南西から）

写真 36
3 区
SD3007 断面
（北から）

写真 37
3 区
SD3009 断面
（南から）

写真 38
発掘体験

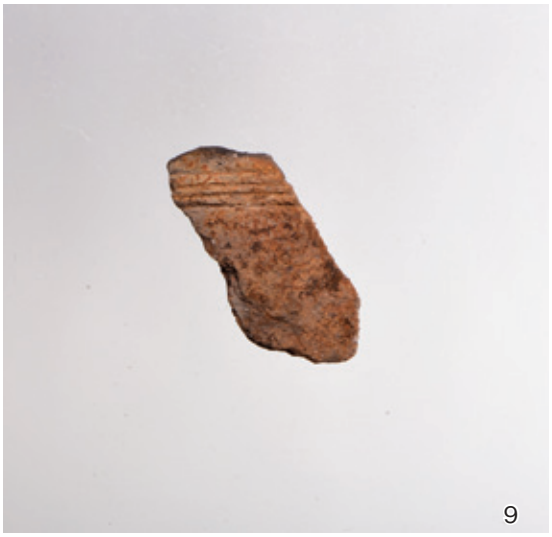
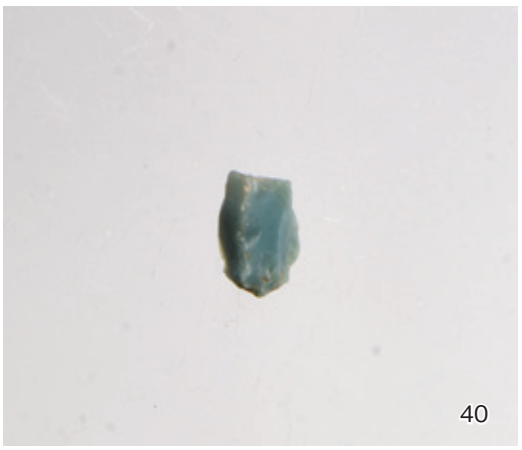


写真 39　六条下所遺跡出土遺物 1



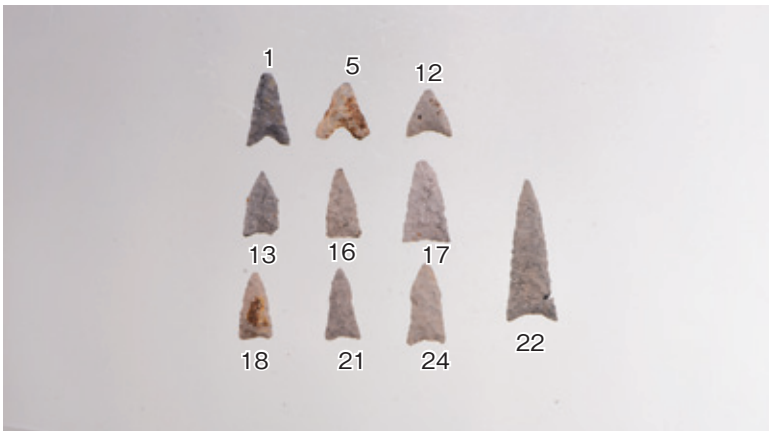


写真 40　六条下所遺跡出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	ろくじょうげしょいせき
書名	六条下所遺跡
副書名	県道太田上町志度線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
編著者名	乗松真也（編）
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町字南谷5001-4 Tel 0877-48-2191　Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp/maibun/
発行機関名	香川県教育委員会
発行年月日	2021年2月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
六条下所遺跡（ろくじょうげしょいせき）	香川県高松市六条町（かがわけんたかまつしろくじょうちょう）	37201		34°17′44″	134°04′44″	2015年11月1日 ～ 2016年3月31日	1,934㎡	道路改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六条下所遺跡	集落	弥生時代	自然流路 溝	弥生土器、石器	
		中世	溝	須恵器、土師質土器、 黒色土器	
		近世	掘立柱建物 柵	なし	

要約	弥生時代前期後半の流路および、水路とみられる溝群を検出した。いずれも、南西の空港跡地遺跡から連続し、北東の高松市教育委員会調査地につながる。近世と考えられる掘立柱建物群は、西の空港跡地遺跡と併せて、当時の農村地域の集落景観を復元する手がかりとなる。

県道太田上町志度線道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

六条下所遺跡

2021 年 2 月 28 日
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024　香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
Tel　0877-48-2191　Fax　0877-48-3249
発行　香川県教育委員会
印刷　ワールド印刷株式会社